

岡山理科大学獣医学部 設置の趣旨等を記載した書類(文科省提出)

・設置の趣旨及び必要性

1．国家戦略特別区域諮問会議における獣医学部設置計画について

平成 29(2017)年 1 月 20 日、国家戦略特別区域諮問会議において、獣医学部新設に係る認可の基準の特例が認定された。四国地区は獣医師養成系大学の空白地帯（資料 1）であり、産業動物臨床や公衆衛生分野の人材不足が深刻なため、平成 21(2009)年には四国知事会から緊急要望（資料 2）が出される等、四国地区での獣医師不足（資料 3）は切迫した状態であった。この状況の解消を含め、四国地区を中心とした西日本での獣医事に関連する危機管理の学術支援拠点等の必要性から、今治市は長年にわたり構造改革特別区域、国家戦略特別区域における獣医学部の設置を提案していた。今回の認定により、広域的に獣医師養成系大学の存在しない「四国」への獣医学部設置の必要性、また、先端ライフサイエンス研究や地域における感染症対策など、新たなニーズに対応する獣医師養成機関の設置の必要性が認められたこととなる。

学校法人加計学園は、平成 29(2017)年 1 月 4 日「文部科学省関係国家戦略特別区域法第二十六条に規定する政令等規制事業に係る告示の特例に関する措置を定める件の一部を改正する件」が公布されたことを受けて、平成 29(2017)年 1 月 10 日、国家戦略特別区域会議の構成員の公募に事業主体として応募した（資料 4）。その後、特定事業（獣医師の養成に係る大学設置事業）を行うと見込まれる者として広島県・今治市国家戦略特別区域会議の構成員に学校法人加計学園を加えることが決定され、1 月 20 日に国家戦略特別区域諮問会議（第 27 回）（資料 5）において獣医学部の新設に係る認可の基準の特例が正式に認定された。

2．岡山理科大学が担う必要性

獣医学部の設置を計画している学校法人加計学園岡山理科大学（以下「本学」という。）は、開設当初より、充実した教員組織、教育研究環境を活かした学際的・応用的な教育研究と、社会の即戦力として活躍する実践力のある人材養成に取り組んできた。現在 6 学部(理学部、工学部、総合情報学部、生物地球学部、教育学部、経営学部)を有し、中四国最大規模の私立大学である。

本学は生物系分野において、昭和 63（1988）年理学部生物化学科の設置を皮切りに、理学部動物学科、生物地球学部を設置し、専門領域・学際領域の教育研究を行っている。また、医療系分野においても理学部応用物理学科、臨床生命科学科、工学部生命医療工学科を設置し、生命科学、医学、生物学を理解し、人類の健康と福祉に貢献する実践力のある人材を多数輩出している。

このような長年の実績を有し教育研究体制を確立してきた本学が、中四国、九州の地理上の中心に位置し、また、獣医養成伝統の地（約 130 年前に県立獣医系学校設置（資料 6））である愛媛県今治市に、充実した施設設備環境、教員組織、独自の教育プログラムを整備し、国家戦略特別区域諮問会議で提示された「先端ライフサイエンス研究や地域における感染症対策など新たなニーズに対応する獣医学部を新設する」というミッションに応えるものである。

3．獣医学部の養成する人材像と教育研究上の目的

（1）獣医学部の人材養成の理念と目的

先端ライフサイエンス研究は、革新的な創薬、医療機器開発分野等へ貢献するものであり、ヒトの健康と福祉の増進や我が国の経済成長を支える極めて重要な分野である。基礎研究から応用研究へ、動物のデータからヒトのデータへ外挿する（動物からヒトへ）という研究プロセスにおいて、適切な動物実験を行い、動物種の特性をふまえて有効性とリスクを慎重に分析することができる人材、複雑な生命現象を統合的に把握する力を身につけている人材へのニーズは、高度化するライフサイエンス分野において、さらに高まっていくと考えられる。

また、社会のグローバル化の進展により、国境を越える人や物資の交流がますます盛んになり、家畜越境感染症・人獣共通感染症が世界的に拡大するリスクが高まっている。このため、動物の健康や食の安全の確保に留まらず、人の健康を保障するためにも国際的な防疫体制の強化は重要な課題となっている。

さらに、超高齢社会を迎え、生活習慣や加齢に伴う疾患への対応が喫緊の課題となっており、これらに貢献する予防医療や医薬品・医療技術の開発が期待されている。伴侶動物は、科学的にコントロールされている実験動物とは異なり、ヒトと同様な環境で生活し、かつ加齢性疾患等、ヒトに類似した疾病構造をとる。米国国立衛生研究所（NIH）では医学と獣医学は共通である（一つの医学：One Medicine）という認識に立ち、伴侶動物を用いたヒトの新しい予防医療や医療機器開発等の分野におけるイノベーション創出に着目し、積極的な人材養成に取り組んでいる。

これらの背景から、本学部は、動物を用いた基礎研究の成果をヒトの治療につなげることのできる人材、感染症統御などローカル対応及びグローバル対応のできる人材、及び医学と獣医学は共通であるという認識に立った動物とヒトの健康と福祉に貢献できる人材を

養成する。以上の人材養成の理念に基づき、高度専門獣医師を養成する獣医学科を設置する。

また、ヒトの医療現場における医師と看護師との関係と同様に、獣医療現場においても、獣医師と動物看護師とが連携し、チーム獣医療体制を築くことが重要である。一方、近年獣医師の担う職域は拡大の一途をたどっている。

本学部においては、これらのニーズに対応して、ライフサイエンス研究分野において重要な実験動物の取扱や管理に従事できる技術者、人獣共通感染症の防御や産業動物の生産管理等、食の安全・安心に関し獣医師と協力して適確に対応できる技術者、獣医師と協働して高度獣医療を支えることのできる動物看護師を養成する。本学部ではこのための多様な知識・技術に習熟する実験動物管理者、産業動物管理者、動物看護師等を獣医関連専門家（VPP）（資料7）と定義し、獣医保健看護学科を設置する。

1) 獣医学科の養成する人材像

獣医学科においては、獣医学の知識と技能を活かし、次の3つの観点に基づく人材像を掲げる。

ライフサイエンス研究に必要な基礎的な知識と技能を有し、実験動物の研究成果をヒトの治療に繋ぐトランスレーショナル・リサーチ分野で活躍できる人材を養成する。また、国内外の感染症防御や食の安全性を担うため、国際的な視野を有し、家畜越境感染症や人獣共通感染症の対策、及び危機管理対応に貢献できる人材を養成する。さらに、ヒトと動物の疾病構造が類似していることに着目し、獣医師として動物の臨床的な知見に加え、ヒト疾患の特性を理解し、ヒトと動物の共通性を認識した上で、ヒト疾患に対する医療行為、臨床研究等に関する広い視野を有し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、動物とヒトの創薬や医療機器等の開発に貢献できる医獣連携獣医師を養成する。

本学部で養成するライフサイエンス分野と医獣連携獣医分野の人材像は、ともに動物からヒトをゴールとしたものであるため、一見似通っているが下記（表1）のように整理するとその違いが明確である。

（表1）ライフサイエンス分野と医獣連携獣医分野の人材像の違い

	ライフサイエンス分野	医獣連携獣医分野
1) 特徴	この分野は、獣医学の特徴である動物個体の特性を生かした基礎生命科学研究領域である。特にニーズの高いヒトの創薬研究においては、トランスレーショナル・リサーチ（遺伝子や細胞を用いた基礎研究の成果を、動物個体を用いて検証し、臨床研究に発展させる研究、すなわ	ヒトが超高齢社会に突入し、また伴侶動物の長寿命化が進んだため、多くの生活習慣病、加齢性疾患や慢性感染症などがヒト医療と伴侶動物医療で共通した新しい問題となりつつある。One Medicine といわれるように、両者の疾患に対する予防・診断・治療などのツールやゴールは同一であ

	<p>ち基礎研究と臨床研究との間に実験動物など高等哺乳動物を用いる研究)を取り入れることにより、効率的な医薬品開発が期待されている。ヒトを含めた比較動物科学に基づく、ワクチン・診断薬・疾病予防・治療薬などの開発に寄与する研究分野である。</p>	<p>る。ヒトと共通の生活環境で過ごし、同様の疾病構造をもつ自然発症伴侶動物を用いて、医学部等と連携し、医薬品や新規医療技術開発の臨床評価研究を進める(疾病動物を用いた先行研究)。大学や研究機関、都市部を中心に増加する1.5次、2次病院等で推進する獣医療分野である。</p>
2) 修得する知識・技能	<p>コア・カリキュラム及びアドバンスト教育を受け、動物の形態・機能に習熟し、分子生物学やゲノム科学を理解し、実験動物の特性を生かし、医薬品等の有効性及び毒性評価を行うための知識・技能を修得する。</p>	<p>伴侶動物の疾病に関する基礎的な臨床知識・技術を身につけた上で、アドバンスト教育において、生活習慣病・加齢性疾患・慢性感染症等を対象に専門臨床獣医師になるための臨床研究の進め方を修得する。</p>
3) 具体的な人材像	<p>適切、適正な動物実験などを行うことができ、動物種の特性をふまえて創薬等の有用性とリスクを慎重に分析することができる人材。複雑な生命現象を動物個体レベルで統合的に把握する力を身につけ、ライフサイエンス分野の研究に貢献できる研究者。</p>	<p>動物との共生を考え、これを支える専門臨床獣医師。加齢性疾患等、ヒトに類似した疾病構造をとる伴侶動物を用いてヒトや動物の新しい予防医療や医療機器開発等の分野におけるイノベーション創出に貢献できる臨床獣医師。</p>
4) 主な対象となる動物	<p>マウス、ラット、ハムスター、モルモット、ウサギ、ブタ、サル類等の実験動物(遺伝子改変、疾患モデル動物を含む)</p>	<p>自然発症の疾患動物(伴侶動物)(イヌ、ネコなど選抜交配が原因となる動物の遺伝性疾患も対象となる)</p>
5) 想定される進路・就職先	<p>大学院進学(獣医及び他学部)。主としてヒト用製薬企業(薬理・薬効、安全性試験)、生物学的製剤(ワクチン開発、製造)、医療器材開発企業、動物用医薬品企業、動物実験受託研究機関、感染症等研究所(国立感染症研究所、国立医薬品食品衛生研究所、動物衛生研究所、畜産試験場など)、その他の研究機関(食品、化粧品等の研究所、動物用医薬品検査所、理化学研究所など)。</p>	<p>今後、さらに深刻となる高齢化に伴うヒトと伴侶動物の医療は目的・予防・治療も同じというOne Medicineを基本に置き、動物ならびにヒト用の新しい医薬品や医療機器の臨床評価・臨床治験をベースに、将来1.5次あるいは2次病院の専門医として活躍する。大学院進学、医薬品・医療機器開発等のイノベーション企業、研究機関における動物実験施設等で動物実験に用いる疾病動物の獣医学的ケアを行う臨床獣医師等も含む。</p>

2) 獣医保健看護学科の養成する人材像

獣医保健看護学科では、ライフサイエンス研究の発展や獣医事に関する感染症への迅速な対応、及び臨床獣医療におけるチーム獣医療遂行のため、次の3つの観点に基づく人材像を掲げる。

ライフサイエンス研究において、重要な役割を担う実験動物の取扱いや管理等の知識と技能を有し、動物の病態を理解し、ライフサイエンス研究の基盤を支える人材として、大学医学部等の附属実験動物センター、医科学研究機関、製薬企業、実験動物繁殖企業、医薬品、医療機器開発企業、衛生管理、機器関連企業、実験動物関連機材製造販売企業等で実験動物管理者等として実践的な能力を発揮するVPPを養成する。

次に、公共獣医事分野において、産業動物看護、感染症対策に関する知識と技能を有し、産業動物の管理を担うことで、食の安全・安心と感染症防御の基盤を支える人材を養成する。畜産業の大規模集約化に伴う生産マネジメント、国境を超えた感染症、人獣共通感染症等のリスクマネジメント等、産業動物の生産管理、疾患管理、感染症対策に関する知識と技能を有し、食の安全、安心を支える人材として、VPPの需要はますます高まっている。

本学科では、これらの需要に対応し、公共獣医事分野において、家畜防疫、家畜改良センター、農林水産消費安全センター、厚生労働省食品衛生監視員等の公務員、さらに地方自治体における農産・畜産技術職等で専門知識と技能を活かし、危機対応も含め食の安心、安全を支える人材や、地域のNOSAI（農業共済）、JA及び養豚、養鶏、酪農など畜産農家、食肉関連企業等で活躍するVPPを養成する。

さらに、獣医療看護分野において、獣医看護学に関する専門的な知識と技能を備え、高度化する臨床獣医療において獣医師と連携・補完し合うチーム獣医療を実践し、動物とヒトの健康と福祉、QOLの向上に貢献する人材を養成する。近年、急速に高度化する臨床獣医療において、獣医看護学に関する専門的知識、技能を有し、獣医療の現場において予防・診断・治療をサポートできる実践能力の高い人材の需要は高まっている。

本学科では、これらの需要に対応し、動物病院や高度獣医療に携わる二次動物病院、ペット保険業、動物臨床検査業、ペット飼料企業、獣医関連出版業等において獣医看護に関する実践的な能力を発揮するVPPを養成する。

（2）獣医学科の教育研究上の目的及び卒業認定・学位授与の方針

<教育研究上の目的>

獣医学科は、ライフサイエンス分野、公共獣医事分野及び医獣連携獣医分野における教育研究を通して、動物とヒトの健康と福祉に貢献できる人材の養成を目的とする。

以上の教育研究上の目的をふまえ、獣医学科の学生が修得すべき能力及び卒業認定・学位授与の方針を次のとおり定める。

<卒業認定・学位授与の方針（ディプロマポリシー）>

獣医学科では教育研究上の目的に定める人材を養成するために、次に挙げる能力を身につけ、所定の単位を修得した者に学士（獣医学）の学位を授与する。

- A 科学的根拠に基づき動物に関する高度な専門知識と技能を獲得し、専門分野で活躍・貢献できる能力を身につけている。
- B 獣医学の知識と技能を基盤として、ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、あるいは医獣連携獣医分野への応用力を身につけている。
- C 獣医事に関する国際的な視野を有し、日本語及び外国語を用いてコミュニケーションをとることができる。
- D 獣医療に携わる者としての生命倫理、科学倫理、動物福祉に基づいた行動規範を身につけている。

（3）獣医保健看護学科の教育研究上の目的及び卒業認定・学位授与の方針

<教育研究上の目的>

獣医保健看護学科は、動物の健康維持に必要な基礎的な獣医学知識、獣医看護学の専門知識と技能を持ち、獣医師とともに動物とヒトの健康と福祉、QOLの向上に貢献する人材の養成を目的とする。

以上の教育研究上の目的をふまえ、獣医保健看護学科の学生が修得すべき能力及び卒業認定・学位授与の方針は次のとおり定める。

<卒業認定・学位授与の方針（ディプロマポリシー）>

獣医保健看護学科では教育研究上の目的に定める人材を養成するために、次に挙げる能力を身につけ、所定の単位を修得した者に学士（獣医保健看護学）の学位を授与する。

- A 科学的根拠に基づき動物に関する基礎知識と技能を修得し、専門分野で活躍・貢献できる能力を身につけている。
- B 基礎的な獣医学知識と獣医看護学に関する専門知識を基盤として、ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、あるいは獣医療看護分野へ応用できる能力を身につけている。
- C 獣医療看護分野に必要なコミュニケーションをとることができる。
- D 獣医療に携わる者としての生命倫理、科学倫理、動物福祉に基づいた行動規範を身につけている。

4. 獣医学部の中心的な学問分野とその研究対象

養成する人材像に対応するものとして、3つの中心的学問分野（ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野）を置く。その研究対象として、獣医学部では3つの研究グループを構成する。なお、獣医学科と獣医保健看護学科は、学科を越えて研究を推進する。

(1) ライフサイエンス研究グループ

神経・内分泌・代謝研究、創薬開発研究、組織再生医科学研究、実験動物管理研究等

(2) 公共獣医事研究グループ

感染症統御研究、畜水産等食品安全科学研究、国際獣医事危機管理研究等

(3) 医獣連携獣医研究グループ

加齢性疾患研究、癌・難治性疾患研究、再生医療・移植研究、診断技術・医療器材開発研究、高度看護技術研究等

なお、教育体制については、当該分野における教育の継続性を重視し、従来の講座制を維持する。一方、研究体制については講座制を廃し、研究の活性化を図るため、先進性を重視し柔軟で機動的な体制を導入する。具体的には、上記の研究グループを組織し、研究環境としてオープンラボを整備して目的別プロジェクト型研究を推進する。目的別プロジェクト型研究とは、獣医学、獣医療に関する現代的なニーズに基づく課題に対して、研究代表者が研究プロジェクトの目的や研究計画に沿って研究者を募り、応募した研究者の専門分野に基づき役割を明確にした上で、分野横断的な課題に時限的に取り組むものである。

. 学部・学科の特色

養成する人材像をふまえて、獣医学部においては次の特色を掲げる。

a 動物からヒトへ

実験動物を用いた基礎研究の成果をヒトの治療につなげる教育研究を推進し、創薬研究等において国際競争力の向上に貢献する。

b ローカル対応及びグローバル対応

ゾーニングに基づく危機管理、感染症・食品安全に対応する国際獣医事等の公共獣医事に関する教育研究を推進する。

c One Medicine

医学と獣医学は共通である（一つの医学；One Medicine）という認識に立ち、医学部や薬学部、国の研究機関と連携し、新しい獣医臨床を実践し、動物とヒトの健康と福祉に貢献する。

これら3つの特色を実現するために、教育内容として独自のアドバンスト科目を置き、教育研究環境として実験動物センター、国際獣医教育研究センター、獣医学教育病院等、最先端の施設設備を整備する。さらに、これらの教育研究を推進するために、充実した教員組織を編成する。また、後述の3分野において外国語でコミュニケーションを図ることができるというディプロマポリシーを実現するため、特色ある英語教育を展開する。

1. 独自のアドバンスト科目の配置による特色ある教育

本学部においては、獣医学科及び獣医保健看護学科にアドバンスト科目を設ける。この科目群は各分野の専門性を確立するため、上記 a, b, c の特色をふまえ、3分野で構成している。アドバンスト科目の各分野への方向づけを行うために、1年次から実習や体験学習を継続して実施する。専門的な内容を英語で理解し発信することが重要であるため、英語圏にて研究・教育経験を持つ獣医学専任教員による英語環境での問題解決力強化を目指した教育を行う。

(1) 獣医学科のアドバンスト科目

1) ライフサイエンス分野 a 動物からヒトへ

ライフサイエンス分野において、基礎研究の成果をヒトの治療につなげ、創薬研究等において国際競争力の向上に貢献できる人材を養成するため、＜ライフサイエンス科目＞を配置する。この科目群では、創薬科学の専門家等を配置し、「トランスレーショナル・リサーチ」、「創薬科学」等を体系的に学び、さらに実際にトランスレーショナル・リサーチの基礎的技能を修得する「ライフサイエンス特別実習」により、実験動物を用いた基礎研究の成果をヒトの治療に繋げる高度な実践力を有する人材育成を推進する。

2) 公共獣医事分野 b ローカル対応及びグローバル対応》

公共獣医事分野において、国際的な視野を有し、家畜越境感染症や人獣共通感染症の対策、及び危機管理対応に貢献できる人材を養成するため＜国際獣医事科目＞を置く。この科目群では、公衆衛生、獣疫学、人獣共通感染症、水畜産の専門家等の専任教員を配置し、「動物危機管理学」、「国際動物疾病学」、「レギュラトリー科学」等を網羅したカリキュラムを整備する。さらに、これらの講義、演習で得られた知識を活用する実践的な能力を養うため、国際獣医教育研究センターを活用した「公共獣医事情報解析実習」を配置することにより、感染症統御に関する最新情報等を把握し、エビデンスの分析、評価を行う体験を通して、国内外の公共獣医事に対応できる獣医師を養成する。

3) 医獣連携獣医分野 《c One Medicine》

医獣連携獣医分野において養成する人材は、「医学と獣医学はひとつである（One Medicine）」という理念に基づき、加齢性疾患などヒトに類似する環境で自然発症した伴侶動物の疾病構造を解明し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる獣医師である。このため、獣医師として動物の臨床的な知見に加え、ヒト疾患の特性を理解し、ヒトと動物の共通性を認識した上で、ヒト疾患に対する医療行為、臨床研究等に関する広い視野を備えておくことが重要である。

医獣連携獣医分野に対応するために設定した＜臨床獣医科目＞では、医学部や薬学部で教育経験を積んだ教員を配置し、「抗菌薬バイオロジー」、「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」等の体系的なカリキュラムにより、医学と獣医学は共通であるという認識にたった医獣連携ができる獣医師の教育研究を推進する。さらに、学生は「獣医キャリアスキルアップ研修」において、医学系（愛媛大学医学部）あるいは薬学系（千葉科学大学薬学部）の大学等教育研究機関において研修を受ける。これらの研修を通して、獣医学以外の分野の手法や考え方に触れることが出来るようになる。自身の専門分野がそこでどのような意味を持つのか、医学、薬学と獣医学の違い、異分野が連携した時の研究の広がりの可能性などを感じ取り、ひいては科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる能力も養える。One Medicine の概念を理解した学生は、生命システム全体を視野に入れた持続可能な社会づくりの意義を理解し、その実現に向け貢献できる人材となる。

このため、愛媛大学医学部、千葉科学大学薬学部との教育研究連携や国の研究機関での実習（資料8、資料20）などを通じて医獣連携の教育研究を推進する。具体的には、実習の具体的計画で記載する。

さらにこれらの機関との教育連携を活かして、研究者グループを形成し、共同研究、セミナー等研究会の開催により相互の理解を深め、ヒトや動物の医療に関する課題解決に取り組む医獣連携研究を推進する。獣医学が複雑な生命現象を総体的に把握、解明する分野であることを活かし、ライフサイエンス研究の場において、医学、薬学との連携・協働により、創薬、医療機器開発等、実際のヒトの疾病の治療に適用させる知識と技術を進展させる。

(2) 獣医保健看護学科のアドバンスト科目

1) ライフサイエンス分野

ライフサイエンス分野に対応するために設定した＜実験動物科目＞では、実験動物学の専門家等を配置し、「実験動物飼養管理学」、「遺伝子工学」、「実験動物看護実習」等

を体系的に配置したカリキュラムにより、VPPとして適正な実験動物管理に関する教育研究を推進する。

2) 公共獣医事分野

公共獣医事分野に対応するために設定した<公衆衛生科目>では、産業動物獣医療の実務経験の豊富な教員を配置し、「産業動物看護学実習」、「バイオセーフティ学」、「動物危機管理学」等を網羅したカリキュラムにより、VPPとして産業動物の取り扱いや感染症防御の支援に関する教育研究を推進する。

3) 獣医療看護分野

獣医療看護分野に対応するために設定した<高度獣医療看護科目>では、臨床経験・動物看護教育経験を持った教員を配置し、「動物の疼痛と福祉」、「高齢動物看護学」等による体系的なカリキュラムにより、高度獣医看護に関する教育研究を推進する。

2. 最先端の教育研究環境整備による教育研究の推進

本学部において、上記で掲げたアドバンスト科目による特色ある教育を行うために、充実した教育研究環境を整備する。

(1) 実験動物センター《a 動物からヒトへ》

ライフサイエンス研究を充実させるために、「動物からヒトへ」というコンセプトのもと、実験動物センターを整備する。両学科において学科を越えてライフサイエンス分野の教育研究を実践する場とする。多機能の小動物飼育エリアと独立した中動物（サル、ブタ等）飼育エリア、さらに水産系飼育エリアを有する特色を持つ。中動物飼育エリアには、通常飼育室に加え、感染実験室、手術室等を備え、最先端のライフサイエンス研究ができる設備を備えている。

本センターは、開学4年後を目途に、AAALAC（国際実験動物ケア評価認証協会）の認証を得るための計画を進めている（資料9）。平成29(2017)年4月時点において、AAALAC認証を取得している獣医学部を擁する大学は北海道大学のみである。

(2) 国際獣医教育研究センター《b ローカル対応及びグローバル対応》

International Veterinary Education and Research Information Center (IVERIC)

本センターは、学外を対象に獣医事に関連する専門性の高い情報を収集、編集、発信することで、関連機関や他大学との教育研究等で連携するためのネットワーク構築を図るものである。また、学内では編集した情報を教育研究に活用し、新しい分野に対応できる専門獣医師及びVPPに必要な能力を養う。

学外に対しては、情報資源として多言語（日本語、英語、ベトナム語、マレーシア語、インドネシア語）による人獣共通感染症を含む約80種類の感染症に関する情報提供シス

テムを確立する。この感染症情報を東南アジア諸国に提供し、情報交換することにより獣医学研究の質の向上を図る。また、本センターが国内外の獣医学領域に関する学会、研究会等々をアレンジし、アジアを中心に獣医学教育研究のネットワークの構築を図る。

学内に対しては、グローバル対応に必要なライフサイエンス研究や公共獣医事教育研究を推進するため、専任教員により、関連する情報を編集し、本センターでデータベース化し、e-ラーニング等の教材やオンデマンドで提供する（資料10）。

海外獣医系大学との連携も視野に、本学園が締結している海外協定校のなかで、獣医学部を有している大学は『フィリピン国立大学ロスバニョス校』、『（ブラジル）パラナカトリカ大学』、『（ブラジル）パラナ連邦大学』の3大学である。本学が獣医学部の設置認可を受けた後、海外協定校の3大学と連携協議を進め、獣医学教育の交流を図る。

（3）獣医学教育病院《c One Medicine》

獣医学教育病院は、二次診療を行う教育病院であり、獣医学科及び獣医保健看護学科の学生は、実習、実践経験を積むことで、チーム獣医療を学ぶことができる施設となっている。また、獣医学教育病院は、One Medicineを実践し、動物の臨床をヒトの臨床に、ヒトの臨床を動物の臨床に活かす教育研究を推進する。

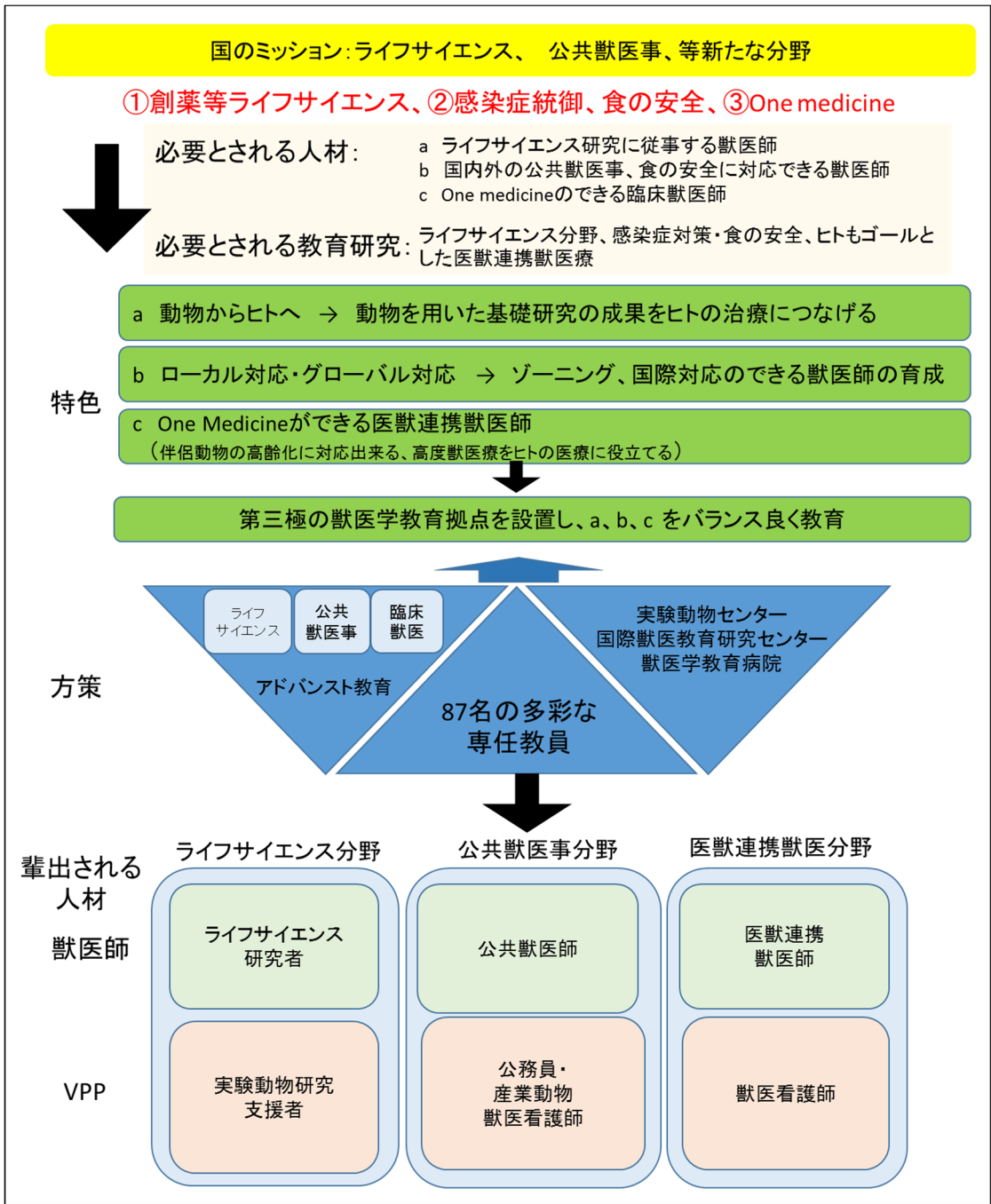
3. 多彩な専任教員の配置

本学部の教育においては、獣医学を始め、医学、薬学、農学、理学等の領域で活躍している教育研究者及び行政分野や獣医臨床分野で活躍している実務経験者による専任教員を配置し、充実した教育研究を行う。

また、国際対応のできる獣医師を養成するため、海外における教育研究の経験を有する教員配置を重視し、一定の期間、海外で生活し、研究・教育活動に従事したことのある経験を確認した結果、海外経験を有する教員を配置する（資料30）。

研究については、オープンラボの特徴を活かし、異なる領域の研究者間の交流を通じ活性化を図り、新たな発想を生み出す等、先進的な研究を行う。

（図1） 獣医学部の特色



4 . 特色ある英語教育

「外国語を用いてコミュニケーションをとることができる」というディプロマポリシーを実現するため、本学部が養成する人材像に即し到達目標を次のとおりとする。

1) ライフサイエンス分野の到達目標

ライフサイエンス研究に必要な、リスニング、プレゼンテーション、ディスカッション等で用いる実践的英語力を獲得し、専門分野に関し英語で説明ができる。

2) 公共獣医事分野の到達目標

公共獣医事に関する専門用語を日本語、英語の両言語で理解し、国際獣医事情、法規等が理解・説明できる。

3) 医獣連携獣医分野の到達目標

獣医療コミュニケーションに必要な能力、例えば身体に関する英語表現、症状や痛みに関する英語表現、医療行為に関する英語表現等を身につけ、クライアントからの聞き取り、医療行為の説明、検査結果の説明、処方と管理等についての一般的な英語で説明できる。

このような人材を養成するため、本学部の英語教育の特色として、以下を挙げる。

達成水準を明確にしたステップアップ英語教育を実施し、そのための教育のPDCAサイクルを機能させていること

海外経験を有する教員を配置すること

分野別に実践的な英語の活用能力を醸成する教育方法を確立すること

これらについては、 . 教育課程の編成の考え方及び特色、 . 教員組織の編制の方針及びその特色、 . 教育方法、履修指導方法及び卒業要件において、後述する。

. 学部・学科等の名称及び学位の名称

本学部の名称は、「獣医学部（英語名称：Faculty of Veterinary Medicine）」とする。

学科の名称は、「獣医学科（英語名称：Department of Veterinary Medicine）」及び「獣医保健看護学科（英語名称：Department of Veterinary Associated Science）」とする。

獣医学科の学位の分野は「獣医学関係」であり、学科名称は、社会的、国際的な通用性がある「獣医学科（英語名称：Department of Veterinary Medicine）」とした。

獣医保健看護学科の学位の分野は「農学関係」であり、獣医学科に併設し、獣医関連専門家（VPP）を養成することから、学科名称は「獣医保健看護学科」とした。英語名称は、VPPの職域を科学する学問として捉え、「Department of Veterinary Associated Science」とした。

学位については、獣医学科は「学士（獣医学）（英語名称：Bachelor of Veterinary Medicine）」、獣医保健看護学科は「学士（獣医保健看護学）（英語名称：Bachelor of Veterinary Associated Science）」とする。

（表2）学部・学科等の名称及び学位の名称

学部名	獣医学部	Faculty of Veterinary Medicine
学科名	獣医学科	Department of Veterinary Medicine
	獣医保健看護学科	Department of Veterinary Associated Science
学位名	学士（獣医学）	Bachelor of Veterinary Medicine
	学士（獣医保健看護学）	Bachelor of Veterinary Associated Science

・教育課程の編成の考え方及び特色

本学部の教育研究上の目的、ディプロマポリシーに基づき、教育課程は次の方針で編成する。

1. 獣医学科の教育課程の編成方針、科目区分内の科目構成とその理由

獣医学科の教育課程の編成方針（カリキュラムポリシー）を（1）に掲げ、続いて（2）に科目群の構成及びその理由を、（3）に科目群内の科目構成とその理由を述べ、教育課程編成の体系性について説明する。

（1）獣医学科のカリキュラムポリシー

- A 大学における学びへの適応を図り、獣医学への興味を持たせ、初年次よりライフサイエンス分野、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野の特性を理解させるために学部共通導入科目、基礎科目を配置する。教育にあたっては講義、演習、及び実習を適切に組み合わせ、自発的学習を促すべく工夫を行う。
- B 獣医師として必要な知識と技術を修得する基本的な授業科目として獣医学教育モデル・コア・カリキュラムを体系的に配置する。教育にあたっては講義、演習と実習の連携を密にし、実用的な知識と技術を身に付けることができるよう配慮する。
- C 獣医学教育モデル・コア・カリキュラムを基盤として、新たな課題に対応する能力を養うため、アドバンスト科目に獣医キャリアスキルアップ研修、及びライフサイエンス分野（ライフサイエンス科目）、公共獣医事分野（国際獣医事科目）、医獣連携獣医分野（臨床獣医科目）を配置する。教育にあたっては、英語を用いた授業を導入する。また、アクティブ・ラーニング等の方法を適切に取り入れ、課題解決能力を身につけさせる。
- D 学生自らが課題を探求し、解決する姿勢や、その過程と結果を論理的に説明する能力等、獣医師としての資質を涵養するため、卒業論文を総合科目として配置する。
- E 社会人としての基盤を築き、総合的な判断力を身に付けることのできる教養教育科目を配置する。教育にあたっては、講義、演習、及び実習を適切に組み合わせ、自発的学習を促すべく工夫を行う。
- F 国際的な視野を涵養し、基礎的なコミュニケーションに必要な英語を中心とした外国語を継続的に学修するため外国語教育科目を配置する。教育にあたっては、学生の能力に配慮した効果的な指導を行う。

（２）獣医学科の教育課程の科目構成とその理由

獣医学科は、「専門教育科目」のうち、主に４年間は獣医学教育モデル・コア・カリキュラム（以下「コア・カリキュラム」という。）により、獣医師としての基本的な知識と技術を学修する科目群として＜ 学部共通導入科目＞＜ 基礎科目＞を配置する。コア・カリキュラムが中心となる専門教育科目として＜ 基礎獣医系科目＞＜ 応用生物系科目＞＜ 公衆衛生系科目＞＜ 畜水産系科目＞＜ 臨床系科目＞を配置する。なお、１年次からの体験学習と実習を通じて、将来への方向づけを行う。４年次から講座に配属させ、専門職域に関連する知識と技術のステップアップを図る。５年次では、＜ アドバンスト科目＞の獣医キャリアスキルアップ研修において各職域の現場の体験を積む。３つのアドバンスト分野＜ - A ライフサイエンス科目＞＜ - B 国際獣医事科目＞＜ - C 臨床獣医科目＞を設ける。さらに、５年次、６年次には、＜ 総合科目＞として卒業論文を配置する。以上の科目群により、ライフサイエンス研究分野、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野における専門的な能力を備えた人材を養成する。

学部段階における幅広い教養を修得させ、より高次の専門性ならびに豊かな人間性の基盤を形成するために、「専門教育科目」の他に、「外国語教育科目」「教養教育科目」を配置する。

国際対応のできる語学の資質を養うため、「外国語教育科目」では、ステップアップ教育として1～2年次においては一般的な英語によるコミュニケーション及び文章読解のスキルを教育し、3年次対象の「専門英語」では、英語圏で教育研究経験を持つ獣医学の専任教員が指導を担当する。4年次からは講座に配属させ、プレゼミナールで英語の専門書や原著論文の輪読を開始し、その後3年間、英語文献及び英語表現に慣れる機会を設ける。

さらに、＜アドバンスト科目＞では、英語を交えた講義を実施し、全体として約2割を英語で指導し、専門分野での英語力を強化する。

(表3) 獣医学科 科目区分表

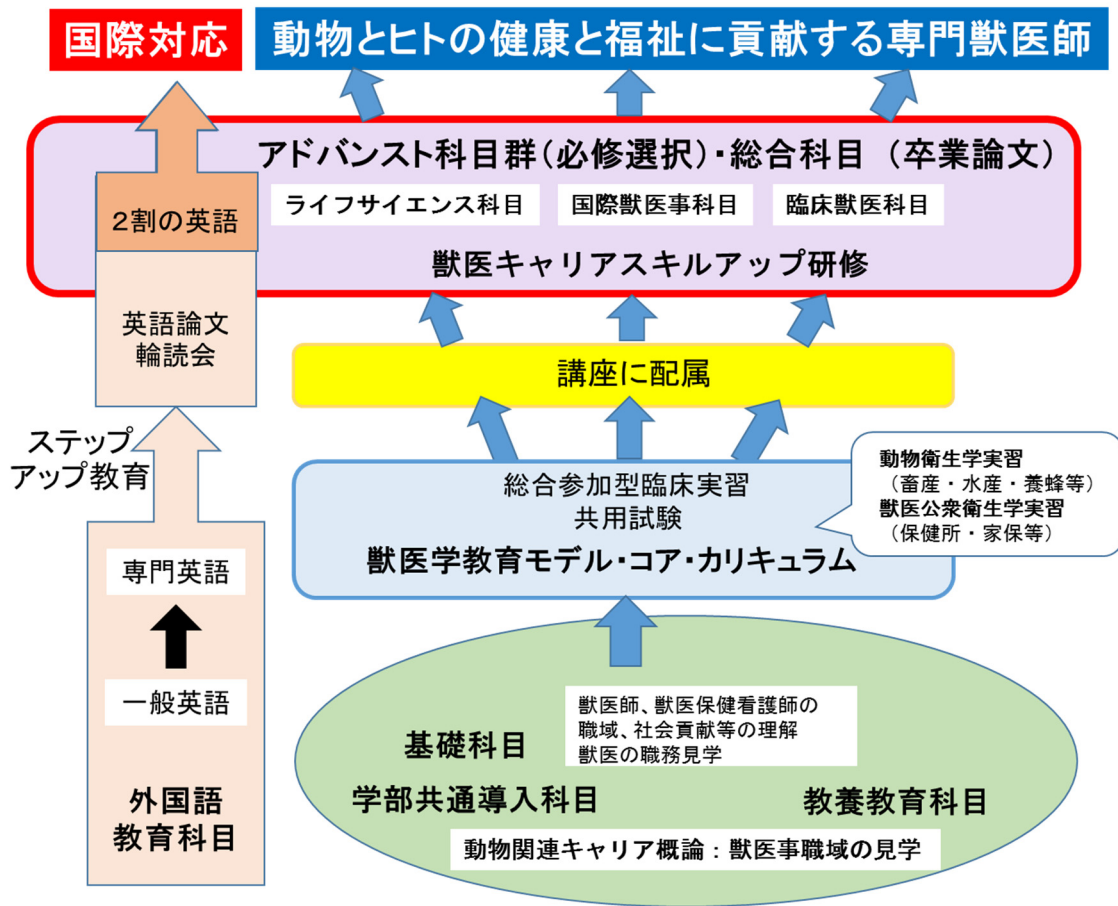
科目区分	
専門教育科目	学部共通導入科目**
	基礎科目**
	基礎獣医系科目*
	応用生物系科目**
	公衆衛生系科目*
	畜水産系科目**
	臨床系科目**
	アドバンスト科目
	獣医キャリアスキルアップ研修
	A ライフサイエンス科目
	B 国際獣医事科目
	C 臨床獣医科目
	総合科目
外国語教育科目	

教養教育科目	初年次教育科目
	人間・社会科学教育科目
	キャリア教育科目
	科学技術教育科目

**一部を除きコア・カリキュラムで構成

* すべて獣医学教育モデル・コア・カリキュラムで構成

(図2) 獣医学科教育課程の編成 模式図



(3) 獣医学科の科目区分内の科目構成とその理由

獣医学科の「専門教育科目」は、1年次から4年次にコア・カリキュラムを中心とした科目群を(表3)の ~ で行い、共用試験 (Vet-CBT、Vet-OSCE) 終了後、5年次から

6年次で、本学の特徴である<アドバンスト科目>を、<総合科目(卒業論文)>をに配置している。

「専門教育科目」のコア・カリキュラムに関する科目群(から)については、平成23(2011)年に策定された新しいコア・カリキュラム(51講義、19実習)に対応する科目として講義53科目、実習24科目を配置し、コア・カリキュラムの全体目標、一般目標、到達目標をふまえ、獣医師として必要な知識と技術の修得を行うことを目的としている。**(資料34 コア・カリキュラムとの対応表)**7科目群は、コア・カリキュラムの導入教育・基礎獣医学教育分野に対応する<学部共通導入科目>、<基礎科目>、<基礎獣医系科目>、コア・カリキュラムの病態獣医学教育分野に対応し、獣医療に関する基盤技術や獣医科学を学ぶ<応用生物系科目>、コア・カリキュラムの応用獣医学教育分野に相当し、獣医公衆衛生分野を学ぶ<公衆衛生系科目>、獣医師の職域を展望しコア・カリキュラムと関連して学ぶべき本学独自の内容として設定した<畜水産系科目>、コア・カリキュラムの臨床獣医学教育分野に対応した<臨床系科目>を配置する。コア・カリキュラムに対応する授業科目は、すべて必修である。

なお、<学部共通導入科目>は、獣医保健看護学科と共に学ぶことで、互いの立場の理解を深め、獣医師がVPPと協働する必要性を認識する科目群であり、「人間・動物関係学」を除き、必修としている。また、生命倫理、科学倫理、動物福祉に基づいた行動規範を身につけた人材を養成するため、<学部共通導入科目>に「生命倫理学」1単位(1年期)、<基礎科目>に「動物福祉論」1単位(1年期)、さらに5年次以降の卒業論文作成に備え、「科学倫理学」1単位(4年期)を配置し、全て必修としている。また、特に、科学倫理については、「フレッシュマンセミナー」において、第6回の講義で初期の心構えを学習する。フレッシュマンセミナー、動物福祉論、生命倫理、科学倫理で学習した内容をふまえ、「獣医キャリアスキルアップ研修」における実習前に、獣医倫理について再度学修する**(資料31)**。

コア・カリキュラムに含まれない科目は、本学科の特色的な科目であり、<応用生物系科目>の「獣医免疫学実習」は生体防御の実践的な理解に必須であることから必修科目とした。また、愛媛県は我が国有数の漁業県であり、学生には講義だけではなく実習として魚に触れておくことは重要であると考え、「魚病学実習」も必修科目とした。<畜水産系科目>には、「水産増養殖学」及び農場等生産現場を理解するための「生産農学概論」、繁殖・肥育のための「飼料作物学」を配置している。

4年次秋学期に共用試験(Vet-CBT、Vet-OSCE)に備えて「総合獣医学演習」を配置しOSCEの医療面接を想定した実習を行う。その後、総合参加型臨床実習を経て、アドバンスト科目に進む。なお、これまでの学習の総括と獣医師国家試験に備えることを目的とした「総合獣医学演習」を6年次に配置して、卒業後、獣医師として活躍するための教育課程としている。

<アドバンスト科目>は、「獣医キャリアスキルアップ研修」と3つの科目群<-A ライフサイエンス科目>、<-B 国際獣医事科目>、<-C 臨床獣医科目>を設定

し、各分野に分かれて人材を養成する。「獣医キャリアスキルアップ研修」は、実践的な場での体験を行い、卒業後の進路など将来設計に役立てる必修科目である。

ライフサイエンス分野においては、研究に必要な基礎的な知識と技能を有し、実験動物の研究成果をヒトの治療に繋ぐトランスレーショナル・リサーチ分野で活躍できる人材を養成する。このため、< - A ライフサイエンス科目 > には医療分野全般にわたる国際標準の研究開発のプロセス、ハイスループットスクリーニング等の最新創薬技術、有効性・安全性・品質に関わる諸規制について学ぶ「トランスレーショナル・リサーチ」、「創薬科学」、「国際ライフサイエンス産業政策論」、「ライフサイエンス特別実習」等、9科目の選択科目を置き、ライフサイエンス分野での実践的な知識を修得する。ライフサイエンス分野を選択した場合には< - A ライフサイエンス科目 > より10単位を必修とし、残りの3単位に関しては、< 国際獣医事科目 > < 臨床獣医科目 > から修得する。

公共獣医事分野においては、国内外の感染症防御や食の安全性を担うための国際的な視野を有し、家畜越境感染症や人獣共通感染症の対策、及び危機管理対応に貢献できる人材を養成することを目的としている。このため、< - B 国際獣医事科目 > には現場で発生した課題に対して自ら考え、検証し解決にあたることのできる実践的な能力を養うことを重視し、「国際獣医事概論」、「国際動物関連法規」、「セキュリティ学」、「グローバル食品管理科学」、「人獣共通感染症学実習」、「公共獣医事情報解析実習」等、15科目の選択科目を置く。また、教育方法としてPBLを取り入れ、学生の実践的な能力を養う。公共獣医事分野を選択した場合には、< - B 国際獣医事科目 > から「人獣共通感染症学実習」、「公共獣医事情報解析実習」を含む9単位を選択必修とし、残りの4単位に関しては、同科目群あるいは< ライフサイエンス科目 > < 臨床獣医科目 > から修得する。

医獣連携獣医分野においては、加齢性疾患などヒトに類似する環境で自然発症した伴侶動物の疾病構造を解明し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる獣医師養成する。このため、< - C 臨床獣医科目 > は、獣医学で得られた基礎的な研究成果をヒト臨床分野に繋いでいく方法論、新しい医療技術・治療薬・診断薬の開発に活かす手法等を学ぶ「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」、「抗菌薬バイオロジー」、「免疫関連疾病学」、「総合臨床検査特別実習」等、10科目の選択科目を配置する。医獣連携獣医分野においては、臨床研究を基盤にして基礎研究に関する知識を養うことから、< - C 臨床獣医科目 > から9単位を選択必修とし、< ライフサイエンス科目 > から「トランスレーショナル・リサーチ」、「分子細胞腫瘍学」、「創薬科学」の3科目3単位を必修とする。残りの1単位については、分野を問わず選択する。

< 総合科目 > には、「卒業論文」、「卒業論文」、「卒業論文」の3科目を必修科目として配置する。本科目群は5～6年次に配置している。なお、医獣連携獣医分野では、「トランスレーショナル・リサーチ」（5年 期）を履修し一般概念を身に付けた後、より臨床学に特化した「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」（5年 期）を学ぶことになる。

以上、 から の科目によって、3つの分野の専門獣医師としての知識と技能を修得させ、創薬等、先端ライフサイエンス分野へ貢献する獣医師、人獣共通感染症統御、食の安全等に対応できる獣医師、あるいはOne Medicine(医学と獣医学は共通である)の概念を認識し実践できる医獣連携獣医師等、獣医師が取り組むべき新たな分野に対応できる科目構成としている。なお、「専門教育科目」の履修順序については、カリキュラムツリーに示した(資料11-P1)。

2. 獣医保健看護学科の教育課程の編成方針、科目区分内の科目構成とその理由

獣医保健看護学科の教育課程の編成方針(カリキュラムポリシー)を(1)に掲げ、続いて(2)に科目群の構成及びその理由を、(3)に科目群内の科目構成とその理由を述べ、教育課程編成の体系性について説明する。

(1) 獣医保健看護学科のカリキュラムポリシー

- A 大学における学びへの適応を図り、獣医看護学への興味を持たせ初年次よりライフサイエンス分野、公共獣医事分野、獣医療看護分野の特性を理解させるために学部共通導入科目、基礎科目を配置する。教育にあたっては講義、演習、及び実習を適切に組み合わせ、自発的学習を促すべく工夫を行う。
- B 獣医関連専門家(VPP)として必要な知識と技術を修得する獣医看護学等を基本授業科目として体系的に配置する。教育にあたっては講義、演習、実習の連携を密にし、実用的な技術を身に付けることができるよう配慮する。
- C 獣医看護学を基盤として、新たな課題に対応する能力を養うため、獣医看護アドバンスト科目に、獣医看護実務実習、及びライフサイエンス分野(実験動物科目)、公共獣医事分野(公衆衛生科目)、獣医療看護分野(高度獣医療看護科目)を配置する。教育にあたっては講義、演習、及び実習を適切に取り入れ、知識と理解の定着を図る。
- D 学生自らが課題を探求し、解決する姿勢や、その過程と結果を論理的に説明する能力等、VPPとしての資質を涵養するため、総合科目を配置する。
- E 社会人としての基盤を築き、総合的な判断力を身に付けることのできる教養教育科目を配置する。教育にあたっては、講義、演習、及び実習を適切に組み合わせ、自発的学習を促すべく工夫を行う。
- F 国際的な視野を涵養し、基礎的なコミュニケーションに必要な英語を中心とした外国語を継続的に学修するため外国語教育科目を配置する。教育にあたっては、学生の能力に配慮した効果的な指導を行う。

(2) 獣医保健看護学科の教育課程の科目構成とその理由

獣医保健看護学科では、1年次からの体験学習と実習を通じて、将来への方向づけを行う。3年次から講座に配属させ、専門職域に関連する知識と技術のステップアップを図る。なお、動物看護師統一認定機構が推奨する動物看護師養成モデルコアカリキュラムにも準拠した教育課程を整備し(資料41)、獣医療に携わる者としての水準をクリアした上で、さらに本学科独自の特色ある教育課程により、VPPとして実践的な能力を養う。

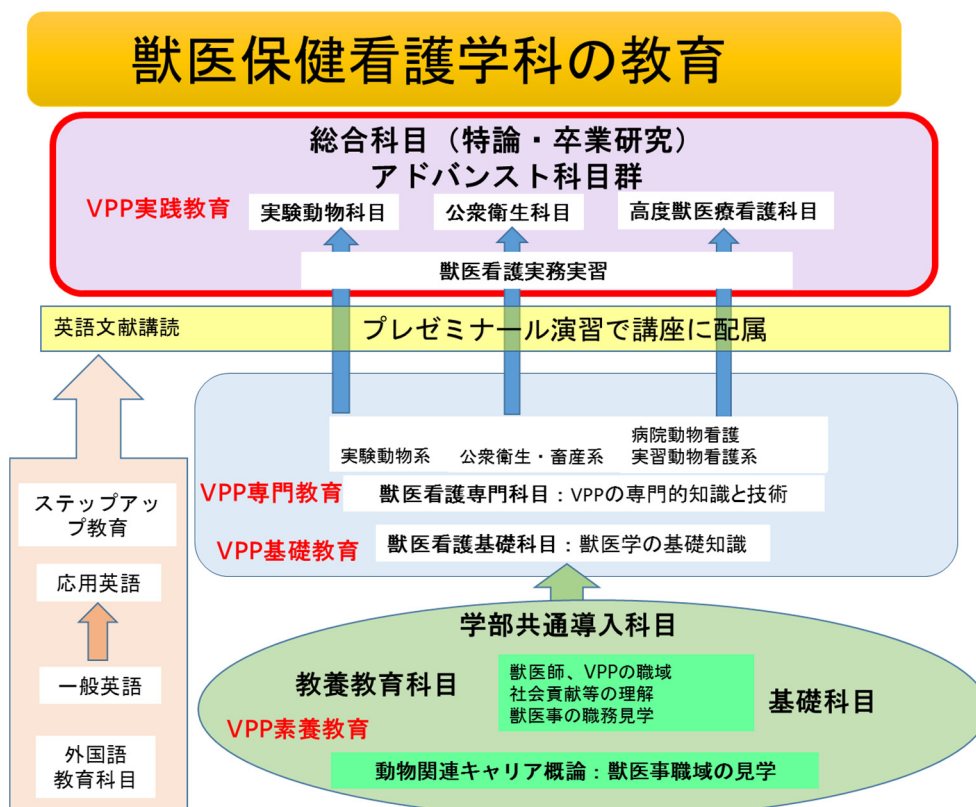
獣医保健看護学科の「専門教育科目」は、獣医学科と共通した< 学部共通導入科目>と< 基礎科目>を配置する。獣医学の基礎と獣医看護学の専門知識と技術を学ぶために、< 獣医看護基礎科目>、< 獣医看護専門科目>を配置している。< 獣医看護アドバンスト科目>には3つの分野< - A 実験動物科目>< - B 公衆衛生科目>< - C 高度獣医療看護科目>と獣医看護実務実習を配置する。< 総合科目>には、卒業研究に繋げるプレゼミナールとして「プレゼミナール ~ 」を配置し、さらにVPPが担う多様な分野への就業力を養成するため各分野の特論を配置する。最終的に4年間の学修の総括として卒業論文を作成する卒業研究・ を配置し、ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、あるいは獣医療看護分野へ応用できる能力を身につけたVPPを養成する。

(表4) 獣医保健看護学科 科目区分表

科目区分		
専門教育科目	学部共通導入科目	
	基礎科目	
	獣医看護基礎科目	
	獣医看護専門科目	
	獣医看護アドバンスト科目	- A 実験動物科目
		- B 公衆衛生科目
		- C 高度獣医療看護科目
		獣医看護実務実習
	総合科目	プレゼミナール
		特論
卒業研究		
外国語教育科目		

教養教育科目	初年次教育科目
	人間・社会科学教育科目
	キャリア教育科目
	科学技術教育科目

(図3) 獣医保健看護学科教育課程の編成 模式図



(3) 獣医保健看護学科の科目区分内の科目構成とその理由

本学科の「専門教育科目」の科目群の科目構成とその理由について、以下に述べる。

< 学部共通導入科目 > は、獣医師と協働する VPP として意識づけるために、獣医学科と共通した科目として4科目配置し、このうち、「動物関連キャリア概論」、「生命倫理学」、「獣医事法規」はコア・カリキュラムに対応する科目であり、必修科目である。

< 基礎科目 >では、獣医学の基礎を学ぶために、獣医学科との共通科目として7科目を配置し、このうちコア・カリキュラムと対応した「動物分子生物学」を含め、3科目を必修とする。

< 獣医看護基礎科目 >は基礎獣医学と獣医看護の基盤となる科目として28科目を配置し、このうち「動物福祉論」等18科目がコア・カリキュラムと対応し、「動物福祉論」、「生命関連法規」、「動物生理学」、「動物形態機能学」、「動物形態機能学」、「栄養学」の6科目を必修科目とする。

< 獣医看護専門科目 >は、獣医看護学の専門知識と技術を学ぶ科目として25科目を配置し、そのうち23科目がコア・カリキュラムに対応しており、「動物看護学概論」等15科目を必修科目とする。

< 獣医看護アドバンスト科目 >では、獣医師とチームを組み協働するVPPを養成するために、< -A 実験動物科目 > < -B 公衆衛生科目 > < -C 高度獣医療看護科目 >を配置する。

< -A 実験動物科目 >では、ライフサイエンス分野に対応するVPPを養成するために、「実験動物飼養管理学」、「実験動物看護実習」など実践力を養う6科目と、学部共通科目として「トランスレーショナル・リサーチ」など2科目、計8科目を配置し、実験動物の管理等実践的な知識と技能を修得する。この分野を選択した場合には< -A 実験動物科目 >から3単位を選択必修とし、残りの2単位に関しては、同科目群あるいは< -B 公衆衛生科目 >、< -C 高度獣医療看護科目 >から修得する。

< -B 公衆衛生科目 >では、公共獣医事分野に対応するVPPを養成するために、「産業動物看護学実習」、「人工授精学」など8科目と、学部共通科目として「レギュラトリー科学」、「医薬品・食品安全性評価演習」等3科目、計11科目を配置し、感染症防御、食の安全及び産業動物看護に必要な知識と技能を修得する。この分野を選択した場合には< -B 公衆衛生科目 >から3単位を選択必修とし、残りの2単位に関しては、同科目群あるいは< -A 実験動物科目 >、< -C 高度獣医療看護科目 >から修得する。

< -C 高度獣医療看護科目 >では、動物とヒトの健康と福祉を獣医師と共に考え、動物とヒトのQOL向上を実践するVPPを養成するために、「高齢動物看護学」、「動物の疼痛と福祉」、「救急・終末医療看護学」等5科目と、学部共通科目として「チーム獣医療学」を加えた計6科目を配置し、伴侶動物獣医療における獣医看護に必要な知識と技能を修得する。この分野を選択した場合には< -C 高度獣医療看護科目 >から3単位を選択必修とし、残りの2単位に関しては、同科目群あるいは< -A 実験動物科目 >、< -B 公衆衛生科目 >から修得する。

獣医看護実務実習では、コア・カリキュラムと対応し、学外の動物診療機関、動物園、研究機関、実験動物施設、畜産系公的機関（動物検疫所、家畜改良センター等）等で実習を行い、実践的な知識と技能を修得する。

< 総合科目 > では、プレゼミナール - 、卒業研究 - を配置し、各分野における VPP としての専門的な資質を養う。また、特に VPP の担う多様な職域における実践的な能力を高め、同時に卒業研究における課題を設定し、自ら探究する活動を通して知識を深める各分野の特論科目として「動物とヒトの健康と福祉特論」、「産業動物特論」、「実験動物福祉特論」、「VPP 特論」を開講する。

以上、 から の科目群を学修することにより、動物とヒトの健康と福祉に貢献する VPP を養成する科目構成としている。なお、「専門教育科目」の履修順序については、カリキュラムツリーに示した（資料 11 - P2）。

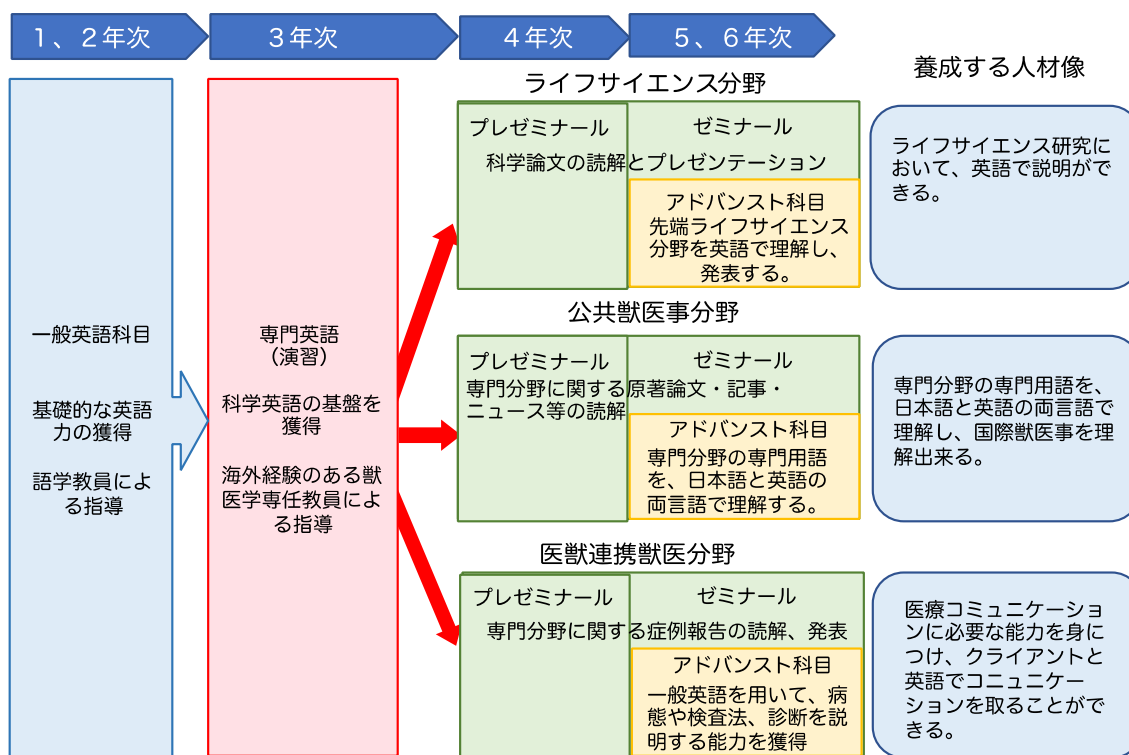
3. コミュニケーション能力を養うための英語教育について

(1) 特色 : 達成水準を明確にしたステップアップ英語教育

獣医学部獣医学科のカリキュラムは、英語を用いたコミュニケーション能力を有する学生を育てることを目標として、従来型の英語専門用語の語彙量を増やし読解力を強化することに加えて、英語で与えられた情報を的確に理解し問題の本質を見極め、自己の意見をもとに建設的に議論する能力を育てることを考慮している。そのため、英語のステップアップ教育を通して基本的な語彙力、英語読解力の向上を助けることに加え、表現力や議論力を取得するように科目配置している。

各ステップにおいては、到達目標及びその達成水準を明確に示した上で、授業科目を配置する。学生の達成状況は随時確認し、半期に一度、学科として目標としている学修成果が得られているか点検し、専門英語教育会議においてこれを検証する。必要に応じて、今後の改善計画を提案する。また、教員個人は、授業アンケートの定期的なフィードバックにより、学生の理解度を確認しつつ自らの講義内容、講義方法、課題の与え方等の改善を図る。必要に応じて、教育能力開発センターより指導、助言を受ける。さらに、学科として英語によるステップアップ教育が到達目標に達しているか、成果及び実施プロセスを検証し、専門英語教育会議で共有しながら改善に向けた意見交換を FD として実施する。これらの取り組みにより、英語ステップアップ教育の質と改善の仕組みが担保される。

(図 4) 英語ステップアップ教育



なお、英語教育に関する教科別の教育内容、教育方法、達成目標は以下の通りである。

【外国語教育科目「総合英語」「発信英語」】

(表5) 外国語教育科目「総合英語」「発信英語」

科目	年次	教育方法
総合英語	1年次	reading, writing に関わる基礎力を身につけ、基礎的なコミュニケーション能力を養成
発信英語	1年次	listening, speaking に関わる基礎力を身につけ、基礎的なコミュニケーション能力を養成
総合英語	2年次	reading, writing に焦点をあて、基礎的な英語力を定着させ、専門分野の英語への橋渡しをする

達成目標：reading, writing, speaking, listening に関する基礎的な英語力を養い、専門分野における英語でのコミュニケーションの基盤を身につける。

方法：小クラスに分け英語専任教員が各クラスを担当し、上述の通りアクティブ・ラーニング形式を用いたステップアップ教育を行う。

【外国語教育科目「専門英語」】

(表6) 外国語教育科目「専門英語」

科目	年次	教育方法
専門英語 A	3年次	一般的な英語力で理解出来るニュースや雑誌の読解や動画の視聴を通して、reading, listening 能力を磨く。また、これらのテーマについて、発表・議論する
専門英語 B	3年次	専門分野の発展の鍵となった原著論文等について、発表・議論する。
専門英語 A	3年次	専門分野に関する解説記事及び総説論文等について、発表・議論する。
専門英語 B	3年次	専門分野に関する最新の原著論文について、発表・議論する。

達成目標：専門分野に関する英語の記事、総説、原著論文に関して、英語での受け答えができるようになる。

【プレゼミナールでの英語教育】

プレゼミナールでの英語教育は、専門英語終了後に4年次から開始する。各9講座からなる3分野のゼミナールで、学生は配属後、指導教員のもと分野に関連する原著論文の輪読等に参加し、原著論文の読解等、円滑に卒業論文の作成に取り掛かることのできる英語力を身につける。

【アドバンスト科目での英語教育】

アドバンスト科目においては、ステップアップ教育の最終ステップとして、これまでに達成された水準を基盤として、実際の専門教育科目であるライフサイエンス科目、国際獣医事科目、臨床獣医科目に配置された授業科目において一部英語で行うこととしている。

3分野の英語の到達目標及び水準は異なっているため、各授業科目においては分野ごとの目標に基づき、授業科目における英語の達成目標を定めている。

1) ライフサイエンス科目における英語の到達目標及び教育方法の特色

ライフサイエンス研究の実施には、英語によるコミュニケーションが必須であり、リスニング、プレゼンテーション、ディスカッション等で用いる実践的な英語力、専門分野を英語で説明できる英語力を獲得する必要がある。このためアドバンスト科目（ライフサイエンス科目）9科目のうち8科目を、1回の講義の前半は日本語で説明、後半は英語で説明、最終的に英語でディスカッションを行うなどの方法で教育を行う。

2) 国際獣医事科目における英語の到達目標及び教育方法の特色

公共獣医事分野では、国際獣医事情、法規等に精通して、これらを日本語、英語の両言語で理解し説明できる能力を養う必要がある。このため、アドバンスト科目（国際獣医事科目）においては、15科目のうち11科目を、専門用語の解説を日本語で行った後、これらの英語表現を学んだうえで英語による事例等の研究を行い、英語を用いた発表を行う等の方法により、実践的な英語の運用能力を養う。

3) 臨床獣医科目における英語の到達目標及び教育方法の特色

医獣連携獣医分野においては、多様化するクライアントとも円滑なコミュニケーションがとれるよう、必要な英語能力（身体、症状、医療行為に関する英語表現等）を身に付ける必要がある。このため、アドバンスト科目（臨床獣医科目）においては、10科目中4科目をアクティブ・ラーニングを取り入れながら実践的な英語教育を行う。

アドバンスト科目の英語教育に関する教育方法は、（表7）のとおり3つのカテゴリーに分ける。各分野の目標を達成するため、これらの教育方法を効果的に組み合わせて実施する。具体的な各教科の教育方法は（表8）のとおりである。

（表7） アドバンスト科目 英語教育方法カテゴリー表

	教育方法
カテゴリー A	<ul style="list-style-type: none">・主な内容は英語で説明し、日本語で補足する方式で授業を行う。ディスカッションあるいはプレゼンテーションなどは、主に英語を用いて行う。・本カテゴリーで行う科目については、専門英語科目や研究室配属での英語文献の抄読等の延長線上にある。これまで学修してきた英単語を用いた授業になるこ

	とから、英語を主体とした授業形態を取り、英語での理解を深めることを目的とする。
カテゴリーB	<p>・英語と日本語で併記したスライドを用い、日本語と英語の両言語での理解を促す。専門用語については、日本語で解説した後、これに対応する英語表現を学ぶ（あるいはその逆順で講義する）。また、実際の事例を用いて学修する。プレゼンテーションは主に英語を用いて行う。</p> <p>・本カテゴリーで行う科目については、日本語独特の専門用語が用いられていることが多く、英語の用語を日本語（訳語）に置きかえることが容易ではない。そのため授業内容を英語で理解することが比較的難しいことから、専門用語の英語表現について学修する授業方法を採用し、国際通用性を高めることを目的とする。</p>
カテゴリーC	<p>・アクティブ・ラーニングを取り入れ、実用的な英語のリスニング、スピーキング能力を養う。また、ディスカッションあるいはプレゼンテーションは、主に英語を用いて行う。</p> <p>・専門用語はしばしば英語が用いられているが、臨床現場においては、一般の人に対して専門的内容を説明することが求められる。</p> <p>・本カテゴリーで行う科目については、アクティブ・ラーニングを取り入れ、専門的な内容を一般的な単語で伝達できる能力を養うことを目的とする。</p>

(表8) アドバンスト科目(一部英語科目) 教育方法

分野	英語教育の到達目標	一部英語で行うアドバンスト科目	教育方法
ライフサイエンス分野	ライフサイエンス研究に必要な、リスニング、プレゼンテーション、ディスカッション等で用いる実践的英語力を獲得し、専門分野に関し英語で説明ができる。	分子細胞腫瘍学	カテゴリーAの方法を中心とし、科目によってはBとの組み合わせで講義を行う。
		発生工学	
		獣医病態モデル学	
		創薬科学	
		トランスレーショナル・リサーチ	
		比較動物機能科学	
		修復・再生医療科学	
		国際ライフサイエンス産業政策論	
公共獣医事分野	公共獣医事に関する専門用語を日本語、英語の両言語で理解し、	国際獣医事概論	カテゴリーBの方法を中心として講義を
		国際動物関連法規	

	<p>際獣医事情、法規等が理解・説明できる。</p>	<p>レギュラトリー科学</p> <p>国際動物疫病学</p> <p>国際野生動物疫病学</p> <p>産業動物疫病学</p> <p>セキュリティ学</p> <p>グローバル食品管理科学</p> <p>国際獣医法医学</p> <p>動物危機疫病学</p> <p>国際生物資源学</p>	<p>行う。科目によってはAの方法を組み合わせる講義を行う。</p>
<p>医獣連携獣医分野</p>	<p>獣医療コミュニケーションに必要な能力、例えば身体に関する英語表現、症状や痛みに関する英語表現、医療行為に関する英語表現等を身につけ、クライアントからの聞き取り、医療行為の説明、検査結果の説明、処方と管理等について一般用語で説明できる。</p>	<p>分子疫学</p> <p>獣医臨床疫学演習</p> <p>国際展示動物疫病学</p> <p>トランスレーショナル・ベテリナリーメディスン</p>	<p>カテゴリーCの方法を中心とし、科目によっては、AあるいはBとの組み合わせで講義を行う。</p>

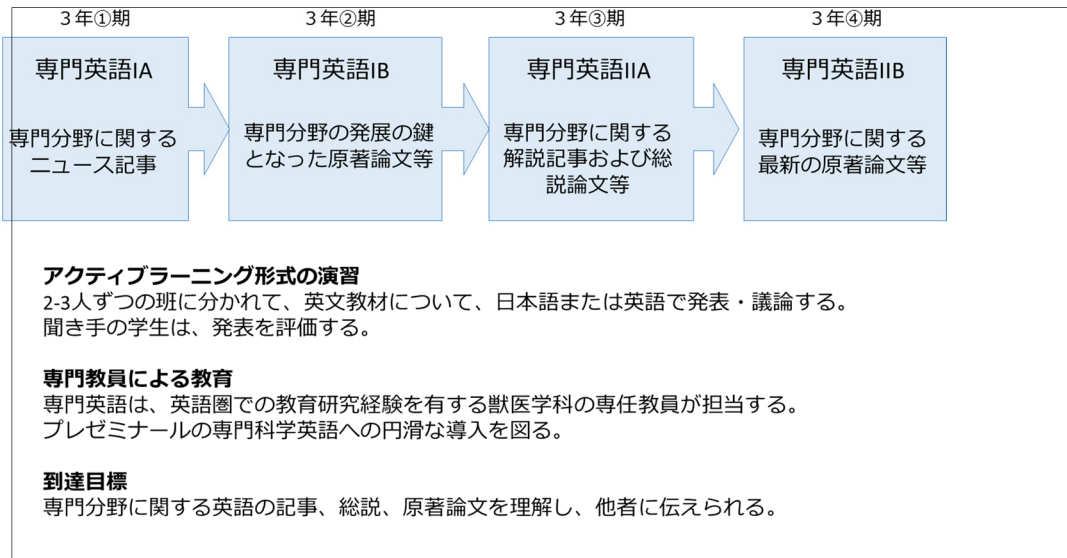
(2) 特色 : 海外経験を有する教員を配置すること

専門教育科目における英語教育では、海外での教育研究経験を持つ獣医学科の専任教員が、自身の海外活動経験に基づき選んだ獣医学関連記事、評論、論文などを実践的な課題として用いる(資料30)。海外の教育・研究指導経験を持つ教員が担当する教育によって実践的な英語力を身につける。

(3) 特色 : 分野別に実施する実践的な英語の活用能力の醸成

学生は「総合英語」「発信英語」等のステップを終了した後、「専門英語」、プレゼミナールを経て、分野別に「アドバンスト科目における英語教育」、そして「卒業論文における英語教育」へとステップアップする。これら3つのステップでは、より実践的な英語力を醸成する特色ある教育プログラムが組まれている。

(図5) アドバンスト科目につながる専門英語ステップアップ教育(3年次)



特に、「専門英語 A」「専門英語 B」「専門英語 A」「専門英語 B」においては、アクティブ・ラーニングを取り入れ、受け身型の英語学習から実践英語力の強化への橋渡しを行う。学生は、2～3人のグループ単位で課題を「批評的に」読み、グループ内にて「建設的な」議論を行い、それを演習時間に発表し議論することを要求される。この過程を通して外国語を用いてコミュニケーションをとることができる基盤となる能力を身につけることができる。

語彙力・読解力の強化を促すために、課題は一般的な英語力で理解出来るニュースや雑誌の読解から始まり、専門の原著論文が読めるレベルまで徐々にステップアップ出来るように考慮している。この科目は、学生間の議論を促進するために発表・討論は日本語で始めるが、授業の進行や学生の議論力の進歩に応じて順次英語での議論に切り替える。

このような英語力を備えた上で、アドバンスト科目に臨むことで、英語で専門分野を理解し、問題解決能力を高めるような体制を整えている。さらに、アドバンスト科目では、日本語と英語を交えた講義を行い、実習科目ではその成果を英語で発表することにより、両言語での理解力を養い、外国語を用いてコミュニケーションを図ることができる、というディプロマポリシーを実現する。

4. 教養教育科目について

中央教育審議会答申に示されたように、10代後半から20代前半にかけては、社会の中での自己の役割や在り方を認識し、より高いものを目指すことを意識した知的訓練を行うことが重要であり、大学の教養教育はこうした知的訓練の中核を占めるものと考えられる。このため、人文・社会科学及び健康・スポーツに関する科目からなる〈人間・社会科学教育科目〉と、インターンシップやプレゼンテーション、文章表現等の社会人基礎力を

養う<キャリア教育科目>、自然科学の視野を広げるための<科学技術教育科目>の3科目群を置き、横断的な教養教育科目の履修を可能にしている。

これら教養教育科目を通じて幅広い教養の修得をはかる。教養教育科目については、教育課程上その多くを1～2年次に配置しているが、在学期間の中で、学生の知的好奇心に応じて自由に履修されるべきものと考えている。

5. 準正課教育プログラムの設定

大学生生活全般を通じての全人的な成長を促すために、自主性、創造性、協調性、リーダーシップの醸成を重視する。このため、授業や卒業研究といった単位認定を伴う「正課教育」、部活動やサークル活動といった学生の自発的活動である「正課外活動」以外に、本学部では、第3のカテゴリーとして、単位認定を伴わない「準正課教育プログラム」を提供する。

本プログラムは、学生が自発的な意志で参加・企画することを基本としたもので、正課教育におけるアクティブ・ラーニングに比べて学生の主体性のウェイトがより大きい。大学内に準正課教育プログラム運営委員会を設置し、適正に行われているか、期待される成果が得られているかどうかを検証し、指導する。

計画しているプログラム（CBT教材作成プログラム、ラボ探訪プログラム、地域コミュニティ交流プログラム）の内容を（資料43）に示す。なお、これらの活動は授業のない空き時間を利用する。

・教員組織の編制の考え方及び特色

1. 教員組織編制の基本的な考え方

本学部の教育研究上の目的、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー等、各種方針に沿い、教育研究の質を保証する教育研究体制を整備する。

獣医学科は、新たな分野で活躍する人材を養成するため、高度な専門性を有する教員や実務経験を有する教員等、多彩な教員構成とする。獣医保健看護学科は、獣医関連業務の専門性を有する教員や公共獣医事等、実務経験を重視した教員構成とする。

2. 教員組織編制の考え方に基づく教員配置

本学部の専任教員数は、獣医学科 75 名（大学設置基準 20 名）、獣医保健看護学科 12 名（大学設置基準 8 名）、計 87 名からなり、大学設置基準を満たす教員数となっている。本学部の特色を発揮させるため、獣医学をはじめ医学、薬学、農学、理学分野等で活躍している教育研究者及び行政分野や臨床分野で活躍している実務経験者を配置した。

実習担当教員の年間スケジュールは別紙（獣医学科：資料 38、獣医保健看護学科：資料 42）のとおりであり、授業を進めていく上で支障のない教員配置となっている。また教員編制表を（資料 44）に示す。

（1）獣医学科

本学科の専任教員 75 名の教員職位ごとの内訳は、教授 29 名、准教授 15 名、講師 7 名、助教 24 名である。本学科は獣医師国家試験受験資格を取得するため、コア・カリキュラムに対応する全ての科目を必修とし、専任教員（「馬臨床学」を除く）を置いている。なお、75 名の専任教員を配置したことにより 獣医学科の全科目の専任比率は 88% であり、コア・カリキュラムに対応した科目に限ると専任比率は 95.8% であった。特にコア・カリキュラムに対応する科目については大学が自身の責任において完結させることが求められており、この様な高い専任比率は本学の特徴である。

本学科の「専門教育科目」における教員配置は次のとおりである。

< 学部共通導入科目 > 4 科目の全科目

専任教員 18 名（教授 13 名、准教授 5 名）

< 基礎科目 > 10 科目中 8 科目

専任教員 19 名（教授 7 名、准教授 4 名、講師 1 名、助教 7 名）

< 基礎獣医系科目 > 11 科目の全科目

専任教員 22 名（教授 7 名、准教授 7 名、講師 2 名、助教 6 名）

< 応用生物系科目 > 18 科目の全科目

専任教員 31 名（教授 15 名、准教授 6 名、講師 1 名、助教 9 名）

< 公衆衛生系科目 > 9 科目の全科目

専任教員 16 名（教授 7 名、准教授 5 名、助教 4 名）

< 畜水産系科目 > 7 科目中 5 科目

専任教員 11 名（教授 6 名、准教授 2 名、助教 3 名）

< 臨床系科目 > 33 科目中 31 科目

専任教員 36 名（教授 14 名、准教授 5 名、講師 4 名、助教 13 名）

< アドバンスト科目 >

「獣医キャリアスキルアップ研修」：専任教員 3 名（教員数：教授 3 名）

< ライフサイエンス科目 > 9 科目の全科目

専任教員 21 名（教員数：教授 9 名、准教授 7 名、講師 2 名、助教 3 名）

< 国際獣医事科目 > 15 科目中 14 科目

専任教員 16 名（教員数：教授 10 名、准教授 4 名、講師 2 名）

< 臨床獣医科目 > 10 科目の全科目

専任教員 22 名（教員数：教授 10 名、准教授 5 名、講師 3 名、助教 4 名）

< 総合科目（卒業論文 ～ ） > 専任教員 47 名（教授 28 名、准教授 15 名、講師 4 名）

なお、「外国語教育科目」には教員 12 名（教授 3 名、准教授 3 名、講師 2 名、助教 4 名）を配置する。

特に、本学科の特色である<アドバンスト科目>において、実務経験を有する多彩な専任教員を配置することにより、充実した教育を行う。

ライフサイエンス分野には、製薬企業等、創薬開発の経歴、医学系研究所等、先端ライフサイエンス研究に関わる経歴を有する者を配置している。また、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野においても、各分野の実務経験を重視して配置する。特に医獣連携獣医分野は、医療系分野における学歴、職歴並びに実務経験を有する教員を配置する。これにより医獣連携獣医分野として、加齢性疾患などヒトに類似する環境で自然発症した伴侶動物の疾病構造を解明し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・

診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる獣医師を養成する。医獣連携獣医分野においても、各分野の実務経験を重視して配置することで、実践的な教育研究を行う。さらに、3分野において国際対応のできる獣医師を養成するため、外国大学における学歴，研究者としての外国の大学や研究機関への留学歴を有する教員を配置している（資料30）。

本学科専任教員75名のうち、獣医師免許保有者は57名である。学位取得者は、博士67名（獣医学33名、農学16名、医学10名、理学2名、薬学1名、学術1名、カナダ Doctor of Philosophy 1名、水産科学1名、工学1名、文学1名）、修士5名、学士3名である。

（2）獣医保健看護学科

獣医保健看護学科の専任教員は12名である。教員の職位の内訳は、教授4名、准教授5名、講師2名、助教1名である。「専門教育科目」9名、「教養教育科目」3名を置いている。

本学科の「専門教育科目」において、＜学部共通導入科目＞及び＜獣医看護基礎科目＞は、獣医師と協働するVPPを養成するために基礎的な獣医学を身につける科目であり、獣医学科の教員が兼担となっている。基礎獣医学をベースとして獣医看護の基礎並びに専門知識を学ぶ＜獣医看護専門科目＞＜獣医看護アドバンスト科目＞は、本学科の主要科目であり、獣医保健看護学科の専任教員が担当することとしている。具体的な、教員配置は、次のとおりである。

＜学部共通導入科目＞4科目のうち2科目

専任教員2名（教授1名、准教授1名）

＜獣医看護基礎科目＞28科目のうち7科目

専任教員6名（教授2名、准教授3名、助教1名）

＜獣医看護専門科目＞25科目のうち18科目

専任教員8名（教授3名、准教授4名、助教1名）

＜獣医看護アドバンスト科目＞

＜実験動物科目＞8科目のうち6科目

専任教員5名（教授1名、准教授3名、助教1名）

＜公衆衛生科目＞11科目のうち6科目

専任教員3名（教授1名、准教授1名、助教1名）

<高度獣医療看護科目> 6科目のうち4科目

専任教員4名(教授2名、准教授2名)

「獣医看護実務実習」専任教員3名(教授2名、准教授1名)

<総合科目> 10科目の全科目

専任教員8名(教授4名、准教授4名)

なお、「教養教育科目」には教員3名(准教授1名、講師2名)を配置する。

本学科の専門教育科目担当の専任教員は、これまでに大学において獣医臨床及び獣医看護教育研究に従事してきた研究者教員と実務経験を持つ教員を配置する。実務経験を持つ教員は、ライフサイエンス分野に4名、公共獣医事分野(産業動物・公務員)に2名、及び獣医療看護分野に3名である。

専任教員12名のうち、獣医師免許保有者は6名、学位保有状況は博士8名(獣医学3名、農学3名、医学1名、健康科学1名)、修士3名、学士1名である。

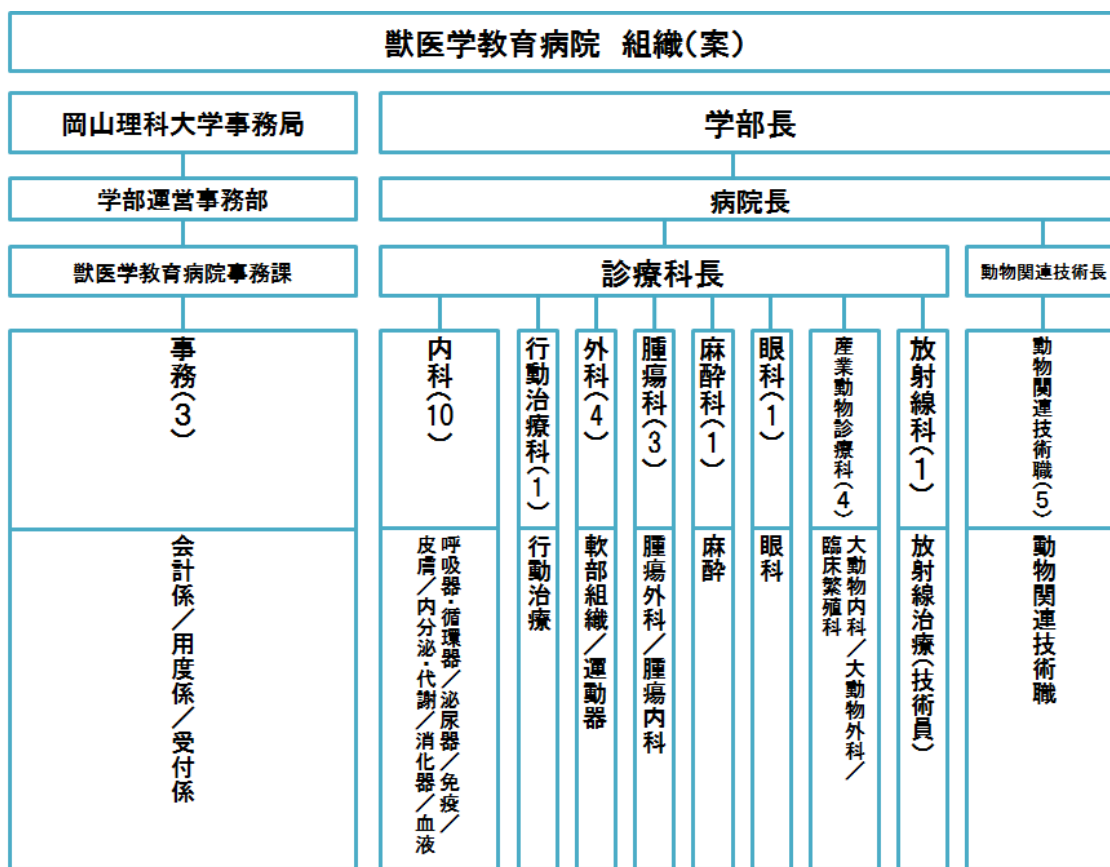
(3) 獣医学教育病院

獣医学教育病院の管理運営体制は、学部長を組織長とし、病院長、診療科長、動物関連技術長(獣医看護師長)及び獣医学教育病院事務課長の役職を設け、獣医学教育病院組織(案)とする(図6)。獣医学教育病院の診療科及び配置人数は、内科10名、行動治療科1名、外科4名、腫瘍科3名、麻酔科1名、眼科1名、産業動物診療科4名、放射線科1名の25名で、獣医学部の専任教員が診療を担当するが、これに加えて、放射線科の1名は獣医学教育病院の専任技術員が担当する。動物関連技術職(獣医看護師等)については、当初5名での診療補助体制とし、5名の内訳は、専任3名、兼任2名である。

獣医学教育病院における会計、用度、受付等の事務業務は、獣医学教育病院事務課が行い、専任3名を配置する。

また、放射線治療室(リニアック)の管理体制として、専任教員のうち、第一種放射線取扱主任者の有資格者2名を配置する。

(図6) 獣医学教育病院組織(案)



3. 研究体制

本学部の研究体制は、先進性を重視し、従来の講座別研究室体制をとらず、学科を越えて3つの研究グループを構築する。3つの研究グループは、ライフサイエンス研究グループ、公共獣医事研究グループ、医獣連携獣医研究グループからなる。それぞれの研究グループは、獣医学をはじめ、医学、薬学、農学、理学分野等、多様な領域で活躍している教員で構成されており、異なる領域の研究者間の交流を通じ研究を活性化し新たな発想を生み出す体制となっている。実際の研究は前述（ - 4 . 獣医学部の中心的な学問分野とその研究対象）の通り、目的別プロジェクト型研究というスタイルでさらに分化したチーム構成により実施される。したがって、これらの研究を推進できる研究業績及び資質を備えた教員を採用するため、現時点で当該研究分野の発展に寄与する研究に取り組んでいることを観点として選考した（資料39）。

さらに、上記の研究活動を活性化するために、先端ライフサイエンス研究を行っている京都大学IPS細胞研究所などで導入されているオープンラボを取り入れる。オープンラボは、各分野の教員が同じフロアで実験を行うことにより、教員は必然的に研究内容の情報交換を行うこととなり、多様な観点から示唆を得る場、また、研究グループとして新たな発想を生み出す場として活用することとなる。実験動物センター、国際獣医教育研究セン

ター、獣医学教育病院等においても、両学科で自由にアクセスし、使用できる体制を整えている。

4 . 教員の年齢構成

獣医学科が完成年度を迎える平成 35 (2023) 年度には、70 代 12 名、60 代 13 名、50 代 10 名、40 代 26 名、30 代 14 名の年齢構成となる。また、獣医保健看護学科が完成年度を迎える平成 33 (2021) 年度には、70 代 3 名、60 代 1 名、50 代 3 名、40 代 5 名の年齢構成となる。

両学科ともに教育研究において豊富な経験と実績を有する教授、准教授、講師、及び学生実習等を担当する助教をバランス良く配置することで、教育研究の継続性を担保する。

現行の定年退職年齢（就業規則 第 58 条 第 2 項）は教授 65 歳であり、獣医学科就任予定教員 19 名、獣医保健看護学科就任予定教員 3 名が、就任時または就任後に定年退職年齢に達する。このため「学校法人加計学園就業規則 第 58 条 第 3 項（資料 12）」を適用して、完成年度までの定年退職を延長することが、平成 28(2016)年度第 14 回理事会（平成 29(2017)年 3 月 13 日開催）、平成 29(2017)年度第 6 回理事会（平成 29(2017)年 6 月 20 日開催）及び平成 29 (2017) 年度第 10 回理事会（平成 29 (2017) 年 9 月 19 日開催）において承認されている。

これら教員の後任人事は、教育研究の質保証を原則とし、完成年度の前年度から採用手続きを開始する（資料 13）。退職者の教育研究分野の継続性を重視し、教員採用計画に基づき、公募を原則とした公平性、透明性を担保した手続きを行う。早期に取り組むことにより十分な選考を行い、教育研究の質を維持する。

5 . 臨床系教員の年齢構成

開設時：獣医学科の開設時（平成 30 年 4 月）の臨床系教員の年齢構成は、20 代 1 名（4%）、30 代 13 名（52%）、40 代 5 名（20%）、50 代 3 名（12%）、65 歳以上 3 名（12%）である。この年齢構成は、完成年度（平成 36 年 4 月）には 20 代 0 名（0%）、30 代 6 名（24%）、40 代 11 名（44%）、50 代 2 名（8%）、60～64 歳 3 名（12%）、65 歳以上 3 名（12%）となる。完成年度に 65 歳以上の教員は、当該年度で退職する予定である（資料 45）。開設時の年齢構成は、私大教員全体や理工系他複数学部と比較して、30 代の教員が多く、40 代と 65 歳以上はほとんど差がなく、50 代と 60～64 は少ない傾向にある。

完成年次：6 年後の完成年度になると、教育と研究に関する活性度の高い 40 代の教員が増えて最も多くなり、50 代、60 前半と徐々に減少する。65 歳以上の教員はこの年度に退職予定であり、これを除くと 40 歳代をピークとして徐々に減少する整った年齢構成となる。

6 . 助手の配置計画

獣医学科に配置する3名の助手（病院獣医師）は、総合参加型臨床実習の指導資格を有する臨床経験3年以上の獣医師を採用する。助手2名は内科のローテーションに、1名は外科のローテーションに組み入れ、教員の管理下で総合参加型臨床実習の学生指導の補助を担当することとしている。また3名の助手は、小動物内科学実習、小動物外科学実習において、教員の指導の下で実習補助することとしている。

・教育方法、履修指導方法及び卒業要件

1. 教育方法

獣医学部の授業方法は、講義・演習・実習と、これらの組み合わせからなり、体験に基づく学修を重視し、実習科目とともに学外見学を積極的に取り入れ、能動的な学びが成立するよう配慮している。

オムニバス形式の教育方法

本学部では、学生が多様な視点から物事を考察することを目的とした授業科目において、オムニバス方式を導入している。オムニバス形式の科目責任者はシラバスに記載した授業目的、達成目標、授業内容や準備学習の指示等を担当者間で確認し、定期試験の後、学生の学修成果の到達度を検証し、評価・改善を行い、教育の質を向上させる体制をとり、教育の一貫性を担保する。

英語を用いた授業の教育方法

獣医学科ではライフサイエンス科目、国際獣医事科目及び臨床獣医科目において、英語を交えた講義を実施する。具体的にはテーマ毎に日本語の講義の後、語彙の解説を日本語と英語で行い、最後の回に英語での意見交換等を行うなどの方法で専門分野の英語での理解を促進する。

特に、「専門英語 A」「専門英語 B」「専門英語 A」「専門英語 B」では受け身型の英語学習から実践英語力の強化を目的として、アクティブ・ラーニングを取り入れる。海外での教育研究経験を持つ専任教員が、自身の海外活動経験に基づき選んだ獣医学関連記事、評論、論文などを実践的な課題として、グループ内での議論、発表を通して将来国際舞台において獣医学関連の問題を解決する能力を身につける。1年次からの能動的な教育の一般英語から専門英語科目を経ることにより、ゼミ配属後の原著論文の読解、プレゼンテーションなどが円滑に行えるとともに、卒業研究を通じたトレーニング期間にコミュニケーション力をさらに向上させることが期待できる。

さらに、ゼミでの卒業研究を始めるための準備段階として、学生はプレゼミナールとして研究室に所属する。プレゼミナールでは、獣医学に関する国際情報や原著論文を読解し、疑問点や分野における未解明の問題点を見出し、自らの疑問点を教員と協議することで卒業研究テーマを決定することを目標とする。さらに担当教員の指導のもとで卒業研究テーマの研究計画を英語で作成する。

また、このような英語力を養った上で、アドバンスト科目では、日本語と英語を交えた講義を行う。これにより両言語での理解力を養い、外国語を用いてコミュニケーションを図ることができる学生を育てる体制とする。

獣医師国家試験へ対応する教育方法、履修指導

- 1 共用試験及び国家試験等をサポートする教育

4年次終了時に実施する共用試験（CBTとOSCE）に関しては、「総合獣医学演習Ⅰ」（4年 期）で対応する。「総合獣医学演習Ⅰ」の第4回、第5回及び第8回の授業において、OSCEの医療面接試験を想定した医療面接実習を行う。また、国家試験に関しては、6年 期に配置する「総合獣医学演習Ⅰ」において、これまでに学習した各領域の総括を行うこととしている。各回の授業においては、基本的な知識の確認の後、国家試験を意識した演習問題に取り組む。

上記の演習科目に加え、学生全体の到達度を見計らいながら、各種の補習講義も行う予定である。学習到達度の未熟な学生に対しては、科目責任者よりチューターに連絡し、受講を促す体制とする。

- 2 共用試験及び国家試験等をサポートする支援システム

獣医学部棟3階に設置するスキルラボには、獣医療で使われる機器・機材（シミュレーションモデルを含む）を常設展示し、学生が自由に手を触れ、模擬練習することによって自主的に授業内容を復習することが可能となる。

導入を予定しているeラーニングシステム（EduTrack）には、様々なビデオコンテンツを搭載し（VPCamp*・Ve4u**）、オンデマンドで自宅からでも閲覧できる環境を整備する。現在、文科省教育支援事業によって獣医療面接に関わるビデオが複数作られているが、これらのコンテンツも搭載する。

講座制導入によるアドバンスト科目の教育方法及び履修指導

獣医学科においては、教育の継続性を重視するため、講座制を導入している。各講座は基本的には、教授、准教授、助教の3人で構成する。これにより、各職位の教員が講座内の役割を認識した上で、学生の教育に責任を持つ体制を整備すると同時に、各講座が担当する教育科目を継続、発展させる仕組みになっている。

養成する人材像の実現に向けて、入学から卒業まで着実に知識、技能を積み上げていくことを重視する。このため、学生の修学状況、学業成績や生活の状況並びに希望する進路に関して、情報を共有し教育に責任を持つ体制をとる。したがって、1年次から3年次までは学年チューターが責任を持つが、4年次以降はゼミに所属することになるため、講座に教育支援、学生支援機能を持たせる必要があり、各講座には教育の継続性のメリットを重視し、講座制を導入する。

体験に基づく学修の重視による能動的な学びの推進

1) 「能動的な学び」の目的及び内容

本学科においては、体験に基づく学びと講義、演習科目を有機的に組み合わせ、知識と経験の往還により獣医師としての実践的な能力を養うことを目標としている。体験的な学びとして実施する学外実習においては、実習は小グループに分け、グループごとに専任教員を配置し個別に実習指導を行うこととしている。実習方法については、以下の

とおりであるが、いずれも各グループに専任教員を配置し、各々の役割を明確にしたうえで、実習を行う体制である。

本学科における能動的な学びとは、前述の実習科目の他、講義、演習並びに授業外の学習を通して、学生の学ぶ意欲を引き出し、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力を身に付ける一連の活動と定義する。学生は、6年間にわたり、自ら課題を見つけ解決していくプロセスを通して生涯にわたり獣医師として研鑽し新たな課題に対応していくための向上心と問題解決能力を涵養する。

2) 授業を担当する教員の教育実績

これらの能動的な学びを実践する専任教員についての教育実績は(資料37)のとおりであり、臨床系の教員についても十分な教育経験及び業績があることを確認している。また、講義資料は事前にホームページ等に掲載して学生に予習を促し、その課題について講義・演習においてディベートを行うなどの対話型授業や、講義の後に意見をまとめ次の課題への指示を出す等の工夫を凝らす。

3) 「能動的な学び」を促す授業方法の工夫

本学科は140名という規模の学科であることを勘案し、その規模において学生の能動的な学びが実現するよう、授業内の学習と授業外学習との有機的な関連付けが可能となる環境整備を行っている。

a. eラーニングシステム

国際獣医教育研究センターでは獣医事に関する専門性の高い情報として感染症情報等を収集する。このセンターに専任教員の教育コンテンツ、VPCamp*・Vet4u**等のデータを登録することで、学生は授業外において随時、課題に対する情報を収集し、仮説を立て、考察する活動を行うことが可能となる。講義科目、演習科目及び実習科目を通じて得られた知識、経験をさらに授業外におけるコンテンツを利用して、学生の能動的な学びが完結するよう、環境を整備している(eラーニングシステム EduTrack)。

(* VPCamp: 文部科学省 大学における公共獣医事教育推進委託事業「分野1 公衆衛生行政等における全国の実習システムの構築」東京大学が幹事校となっている)。

(** Vet4u: 大学間連携共同教育推進事業「グローバル社会を担う次世代型獣医学系大学教育機構の構築」東京大学が幹事校となっている)

b. スキルラボ

獣医学部棟3階に設置するスキルラボには、獣医療で使われる機器・機材(シミュレーション模型を含む)を常設展示し、学生が自由に手を触れ、模擬練習することによって自主的に授業内容を復習することが可能となる。

c. CBT システムの学生への開放

導入を予定している CBT-Medical は、CBT の作問・試験実施・結果分析システムである。このシステムは、基本的には各教員が各講義や演習、さらに試験等で利用するものであるが、教員とは別に学生管理の回路をもうけ、これを学生に開放し自主的に運用させる予定である。学生は準正課教育プログラムの一環として勉強会を発足させ、作問・試験実施・結果分析の作業を行う。学生にとっては普段は受け身である試験に関して、能動的な立場（教師の立場）となるこの試みは、アクティブ・ラーニングの一環としても極めて有意義なものと考えている。

4) 教育能力開発センターの役割

予習・復習などの授業外学習を促す授業形態を学部全体として推進するため、獣医学部には教育能力開発センターを配置し、FD 担当教員を置く。教育能力開発センターは、教育担当副学部長を責任者として、獣医学部の専任教員で構成する（資料 35）。教育能力開発センターを核として、能動的な学びに関する計画立案と推進、効果の検証、自己点検評価や改善計画の立案を行うこととして、教育の PDCA サイクルを機能させる。さらに授業アンケート結果や学生の学修成果等のエビデンスに基づいて、適宜、FD 担当教員から授業改善の助言、授業法の指導を受ける体制とする。また、学部、学科単位において FD 研修を行い、教育方法の改善や学部教育の質向上に向けた取り組みを行う。

2. 履修支援の体制

本学では、『学生便覧』、『教育の目標と方針』と『履修ガイド』を学生に配付し、全学・各学部・各学科の教育目標・方針を明示するとともに、これらに基づいてチューターを中心とした教員が履修指導を実施する。学生の希望進路・適性、興味・関心等に応じて履修モデルを示し、計画的な学修の支援を行う。

3. 履修指導

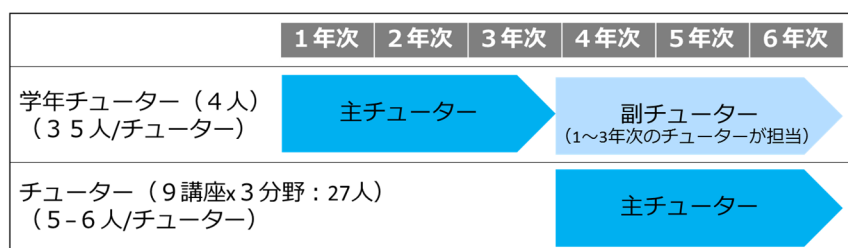
学生が授業の内容を事前に理解した上で、適切な履修プランを立てることができるよう、すべての授業は、授業科目の目的、概要、授業計画、テキスト・参考資料、成績評価基準等を記載したシラバスを、履修登録開始前に Web 上で公開する。これに加えて、春学期及び秋学期の授業の開始時期（4月、9月）には全学生を対象としたオリエンテーションを開催し、当該学年、または当該学期における履修上の注意を周知する。

入学直後のオリエンテーション時に、学部学科の教育目的、教育研究の特色、講座配属方針や進路等について具体的な説明を行う。入学時から卒業時まで、学生の修学、学生生活の指導を行い、必要に応じて個人的な相談助言を行うため、チューター制（担任制）を採用している。獣医学科では、1年次から3年次までは主チューターのための体制とし、各学年4人（35人に1名）配置する。4年次に講座に配属された後は、主チューターと副チ

ューターの2名体制として、講座責任者（9講座×3分野=27人：5.2人に1名）が主チューターとなる。1年次から担当している学年チューターも副チューターとして、6年次までサポートする体制をとる。これにより、1年次から6年間継続して学生をサポートするとともに、講座責任者がチューターになることで進路選択等をサポートできる体制となっている。また、副チューターを置き、複数人により学生をサポートする体制を整備することで、学生は、複数人と相談できる体制となっている。獣医保健看護学科も同様に、1年次～2年次までは各学年2人（30人に1名）配置し、3年次以降は講座責任者が主チューターとなり、1年次から2年次のチューターが副チューターとなる。

（図7）チューター制

獣医学科



獣医保健看護学科



チューターは、半年ごとの成績発表時に学生と面談を行い、知識と技術の修得状況を確認し、個々の学生に履修指導を行う。

獣医学部の卒業生の進路は研究職、公共獣医事、実験動物管理、動物看護、大学院進学等の様々な分野にわたる。そのため、初年次から進路に関する適切な情報を学生へ提供する。チューターは個々の学生が将来の進路をふまえ、自立的に履修計画を立案できるように指導を行う。

獣医学科では、3つの分野の選択は4年次の講座配属時に行う。ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野に各9講座を配置している。

獣医保健看護学科では、3つの分野の選択は3年次のプレゼミナールにおいて講座配属先を決定する。ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、獣医療看護分野に各1講座を配置している。

学生の希望と成績により調整を行い3分野へバランスよく配属する。各分野の専門教員により専門性の高い教育研究を行う。3分野に分かれたのち、獣医キャリアスキルアップ研修において、実習先を選択する際には、講座のチューターが今後のキャリアを見据えて適切に指導を行う体制として、特に医獣連携獣医分野の学生は、医学系、薬学系の研修先を選択するよう促す。

4. 進級要件

(1) 獣医学科

獣医学科の進級要件は、次のとおりである。

4年次から5年次に進級するとき、専門教育科目の「総合獣医学演習Ⅰ」を含む必修科目100単位以上を修得していること。また、外国語教育科目より必修科目6単位、選択必修科目を2単位以上修得していること。

(表9) 獣医学科 5年次進級要件

科目区分		4年次から5年次の進級要件 修得単位数
専門教育科目	学部共通導入科目	「総合獣医学演習Ⅰ」を含む必修科目100単位以上を修得していること
	基礎科目	
	基礎獣医系科目	
	応用生物系科目	
	公衆衛生系科目	
	畜水産系科目	
	臨床系科目	
外国語教育科目		必修科目6単位、選択必修科目2単位以上修得していること

(2) 獣医保健看護学科

獣医保健看護学科の進級要件は、次のとおりである。

3年次から4年次に進級するとき、専門教育科目を60単位以上、そのうち必修科目を40単位以上、外国語教育科目より必修科目6単位、選択必修科目を2単位以上、教養教育科目を16単位以上を含み、合計で96単位以上修得していること。

(表10) 獣医保健看護学科 4年次進級要件

科目区分		3年次から4年次の進級要件 修得単位数	
専門教育科目	学部共通導入科目	60単位以上 (そのうち必修科目40単位以上)	96単位以上
	基礎科目		
	獣医看護基礎科目		
	獣医看護専門科目		
外国語教育科目		必修科目6単位、選択必修科目2単位以上	
教養教育科目	初年次教育科目	16単位以上	
	人間・社会科学教育科目		
	キャリア教育科目		
	科学技術教育科目		

5. 卒業要件

(1) 獣医学科

卒業要件は、表11の通りとする。

(表11) 獣医学科卒業要件

科目区分		修得単位数	
専門教育科目	学部共通導入科目	3単位以上	145単位以上
	基礎科目	26単位以上	
	基礎獣医系科目		
	応用生物系科目	48単位以上	
	公衆衛生系科目		

畜水産系科目			
臨床系科目		47 単位以上	
アドバンスト 科目	獣医キャリアスキルアップ研修	2 単位	
	ライフサイエンス科目	13 単位以上	
	国際獣医事科目		
	臨床獣医科目		
総合科目		6 単位	
外国語教育科目		10 単位以上	
教養教育科目	初年次教育科目	19 単位以上	
	人間・社会科学教育科目	【キャリア教育科目】から 4 単位以上	
	キャリア教育科目	【科学技術教育科目】から 2 単位以上	
	科学技術教育科目		
合計		182 単位以上	

獣医学科の卒業時までには修得すべき単位数は 182 単位以上である。卒業要件は、「専門教育科目」145 単位以上、「外国語教育科目」10 単位以上及び「教養教育科目」19 単位以上、である。

「専門教育科目」のうち、＜学部共通導入科目＞、＜基礎科目＞、＜基礎獣医系科目＞、＜応用生物系科目＞、＜公衆衛生系科目＞、＜畜水産系科目＞、＜臨床系科目＞については、コア・カリキュラムに対応する科目を必修とし、卒業要件単位数とする。

＜アドバンスト科目＞は、「獣医キャリアスキルアップ研修」と 3 つの科目群＜ -A ライフサイエンス科目＞、＜ -B 国際獣医事科目＞、＜ -C 臨床獣医科目＞を設定し、各分野に分かれて人材を養成する。「獣医キャリアスキルアップ研修」は、実践的な場での体験を行い、卒業後の進路など将来設計に役立てる必修科目である。ライフサイエンス分野においては、研究に必要な基礎的な知識と技能を有し、実験動物の研究成果をヒトの治療に繋ぐトランスレーショナル・リサーチ分野で活躍できる人材を養成する。このため、＜ -A ライフサイエンス科目＞には、医療分野全般にわたる国際標準の研究開発のプロセス、ハイスループットスクリーニング等の最新創薬技術、有効性・安全性・品質に関わる諸規制について学ぶ「トランスレーショナル・リサーチ」、「創薬科学」、「国際ライフサイエンス産業政策論」、「ライフサイエンス特別実習」等、9 科目の選択科目を置き、ライフサイエンス分野での実践的な知識を修得する。ライフサイエンス分野を選択した場合には＜ -A ライフサイエンス科目＞より 10 単位を必修とし、残りの 3 単位に

関しては、＜国際獣医事科目＞＜臨床獣医科目＞から修得する。公共獣医事分野においては、国内外の感染症防御や食の安全性を担うための国際的な視野を有し、家畜越境感染症や人獣共通感染症の対策、及び危機管理対応に貢献できる人材を養成することを目的としている。このため、＜ - B 国際獣医事科目＞には、現場で発生した課題に対して自ら考え、検証し解決にあたることのできる実践的な能力を養うことを重視し、「国際獣医事概論」、「国際動物関連法規」、「セキュリティ学」、「グローバル食品管理科学」、「人獣共通感染症学実習」、「公共獣医事情報解析実習」等、15科目の選択科目を置く。また、教育方法としてPBLを取り入れ、学生の実践的な能力を養う。公共獣医事分野を選択した場合には、＜ - B 国際獣医事科目＞から9単位を選択必修とし、残りの4単位に関しては、同科目群あるいは＜ライフサイエンス科目＞＜臨床獣医科目＞から修得する。医獣連携獣医分野においては、加齢性疾患などヒトに類似する環境で自然発症した伴侶動物の疾病構造を解明し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる獣医師を養成する。このため、＜ - C 臨床獣医科目＞は、獣医学で得られた基礎的な研究成果をヒト臨床分野に繋いでいく方法論、新しい医療技術・治療薬・診断薬の開発に活かす手法等を学ぶ「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」、「抗菌薬バイオロジー」、「免疫関連疾病学」、「総合臨床検査特別実習」等、10科目の選択科目を配置する。ライフサイエンス研究の基礎に関する知識を養うことから、＜ - C 臨床獣医科目＞から9単位を選択必修とし、＜ライフサイエンス科目＞から「トランスレーショナル・リサーチ」、「分子細胞腫瘍学」、「創薬科学」の3科目3単位を必修とする。残りの1単位については、分野を問わず選択する。なお、この分野では、「トランスレーショナル・リサーチ」（5年 期）を履修し一般概念を身に付けた後、より臨床学に特化した「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」（5年 期）を学ぶことになる。

本学科では養成する人材像に即し、3つの卒業までの履修モデルを設定する（資料 14 - P1 ~ P3）。

1) ライフサイエンス分野に重点を置く履修モデル

創薬等ライフサイエンス研究で活躍できる人材を養成するために、トランスレーショナル・リサーチ等を重点的に学修する履修モデルとなる。

2) 国際獣医事分野に重点を置く履修モデル

国内外の感染症に係る水際対策、食の安全に対応する公共獣医事を重点的に学修する履修モデルとなる。

3) 医獣連携獣医分野に重点を置く履修モデル

医獣連携獣医師として、伴侶動物の病態解析と治療法の開発について、臨床的な側面と基礎科学的な側面から学修する履修モデルとなる。

(2) 獣医保健看護学科

卒業要件は、表 12 の通りとする。

(表 12) 獣医保健看護学科卒業要件

科目区分		修得単位数	
専門教育科目	学部共通導入科目	3 単位以上	
	基礎科目	4 単位以上	
	獣医看護基礎科目	18 単位以上	
	獣医看護専門科目	24 単位以上	
	獣医看護アドバンスト科目	実験動物科目	5 単位以上
		公衆衛生科目	
		高度獣医療看護科目	
獣医看護実務実習		1 単位以上	
総合科目	12 単位以上		
外国語教育科目		10 単位以上	
教養教育科目	初年次教育科目	19 単位以上	
	人間・社会科学教育科目	【キャリア教育科目】から 4 単位以上	
	キャリア教育科目	【科学技術教育科目】から 2 単位以上	
	科学技術教育科目		
合計		124 単位以上	

獣医保健看護学科の卒業時までには修得すべき単位数は 124 単位以上である。これは、「専門教育科目」84 単位以上、「外国語教育科目」10 単位以上及び「教養教育科目」19 単位以上から構成される。

「専門教育科目」のうち、＜学部共通導入科目＞、＜基礎科目＞、＜獣医看護基礎科目＞については、獣医学の基礎知識と技術を学修する科目を必修とし、＜獣医看護専門科目＞については、獣医看護学の専門知識と技術を学修する科目を必修とし、卒業要件単位数とする。

< 獣医看護アドバンスト科目 > は、各分野での専門的知識と技能を学修する獣医看護実務実習を1単位以上取得することを卒業要件とする。また、それらの分野別の科目については、選択した分野の科目を3単位選択必修とし、合計5単位を修得することを卒業要件とする。さらに、VPPとしての専門性を高めるために、< 総合科目 > のうちの必修科目12単位を卒業要件とする。

本学科では養成する人材像に即し、3つの卒業までの履修モデルを設定する（資料14-P4～P6）。

1) ライフサイエンス分野に重点を置く履修モデル

ライフサイエンス研究に用いる実験動物の取り扱い技術や看護及び管理等について重点的に修得する履修モデルとなる。

2) 公共獣医事分野に重点を置く履修モデル

産業動物の健康維持、ストレス軽減、感染症の予防など公衆衛生分野及び産業動物看護分野に関連する科目を重点的に学修する履修モデルとなる。

3) 獣医療看護分野に重点を置く履修モデル

獣医看護学に関する専門的な知識と技能を備え、高度専門化する獣医療に対応できるVPPに必要な科目を重点的に学修する履修モデルとなる。

6. 学位論文の単位認定について

(1) 獣医学科

学位論文の作成は、総合的な問題解決能力を醸成する教育として位置づける。「卒業論文Ⅰ」では、学生は研究課題を決めるために、これまでの知識と技術に基づき、教員の指導のもと、必要な背景となる基礎情報を論文や書籍から収集し、研究計画を立案する。

「卒業論文」では、自ら選んだ研究課題について、研究目標を達成できるデータの作成、実験データ解析を行う。「卒業論文」では、これまでのデータをまとめ、卒業論文を完成させ、発表する。卒業論文～は学修の集大成としての必修科目として位置づけ、これに必要な学修と成果及び時間を考慮し、各2単位、合計6単位とする。

(2) 獣医保健看護学科

学位論文の作成は、総合的な問題解決能力を醸成する教育として位置づける。「卒業研究Ⅰ」では、獣医看護演習で決めた研究課題に関して研究を実施し、教員との意見交換を行い、中間発表を行う。「卒業研究」では、研究結果に基づき、卒業論文を完成し、研

究内容について発表する。卒業研究、は学修の集大成としての必修科目として位置づけ、これに必要な学修と成果及び時間を考慮し、各4単位、合計8単位とする。

7. CAP制についての考え方

履修にあたっては、履修科目の登録に年間49単位の上限（CAP制）を設けることにより、授業外での自学自習時間を確保し、計画的に学修に取り組めるようにしている。ただし、本学部では前年度の成績優秀者（30単位以上を取得し、かつGPA（Grade Pointの数値の平均値）3.0以上のもの）に対しては、年間57単位までの登録を認める。

単位修得の認定及び学習の評価は、科目ごとに次の等位（評価基準（表13））に基づいて行う。

（表13）評価基準

評価	S(秀)	A(優)	B(良)	C(可)	D(不可)	E
評点	100～90点	89～80点	79～70点	69～60点	59～0点	受講・受験せず
Grade Point	4	3	2	1	0	0

・施設、設備等の整備計画

1. 校地、運動場の整備計画

(1) 校地の整備計画

今治キャンパスは愛媛県今治市（今治市いこいの丘）に設置する。同地は、今治駅から大学までバス約10分（約1.8Km）で通学が可能である。今治キャンパスの校地面積は約56,075㎡であり、大学設置基準における基準面積10,800㎡（収容定員1,080名）を十分に満たしている。岡山キャンパス、今治キャンパス、大学全体の構成は以下のとおりである。

（表14）キャンパスの校地面積

区分	校地	キャンパス毎設置基準	収容定員
岡山キャンパス	254,067㎡	64,700㎡	6,470人
今治キャンパス	56,075㎡	10,800㎡	1,080人
大学全体合計	310,142㎡	75,500㎡	7,550人

(2) 運動場及び体育館の整備計画

運動場の面積は8,214㎡である。また、クラブハウスを設置し、クラブハウス内にはシャワー室（2室）、トイレ（2室）、会議室（1室）、多目的室（1室）部室（22室）を整備する。スポーツ施設として、体育館は2階建て（2,768.2㎡）、テニスコート（3面）、トレーニングルームを整備する。

(3) 学生の休息等空地の整備状況

学生の休憩スペースとして、屋外には、校舎周辺の広場ごとに学生の憩いの場を設け、ベンチやテーブルを配置している。屋内の自習や休憩スペースとして、獣医学部棟3階に学生控ホール、管理棟2階に食堂、管理棟3～4階には図書館（ラーニングcommonsを含む）を設ける。

(4) 自治体との連携関係

本学部は平成 29 (2017) 年 1 月に今治市が行った特定事業の実施主体公募に応募した結果、選定されており、これに伴い実施主体となった本学園と今治市は基本協定を締結した (資料 15)。本学部設置用に今治市より、今治新都市 (今治市いこいの丘) の約 168,262 m²の土地を無償で提供を受ける (資料 16)。さらに、大学立地事業費補助金 96 億円を今治市より交付を受ける (資料 17)。

2. 校舎等施設の整備計画

岡山キャンパス、今治キャンパス、大学全体の校舎の構成は以下のとおりである。

(表 15) 大学全体の構成

区分	校舎	設置基準	学部数
岡山キャンパス	101,278 m ²	61,331 m ²	6 学部
今治キャンパス	25,365 m ²	14,149.3 m ²	1 学部 (獣医学部)
大学全体合計	126,643 m ²	75,480.3 m ²	7 学部

獣医学部の校舎として、下記の表のとおり 獣医学部棟、獣医学教育病院棟、大動物実習棟、大講義棟、管理棟 (管理関係施設、食堂、図書室) を整備する。そのうちの 3 棟は平成 29 (2017) 年度内に建設し、の 2 棟は平成 31 (2019) 年 2 月までに完成する (資料 18)。校舎面積の合計は約 25,365 m² (大学設置基準 14,149.3 m²) である。

(表 16) 獣医学部校舎

獣医学部棟	階	面積	主な機能
	1 階	2,138.83 m ²	実験動物センター (動物飼育室、手術室、解剖室、水産系飼育室)、顕微鏡室、作成室
	2 階	2,142.00 m ²	講義室、演習室
	3 階	2,024.80 m ²	実習室、講義室、教養教員室
	4 階	2,142.00 m ²	実習室、コンピューター室

	5階	2,142.00 m ²	講座室（ライフサイエンス・実験動物）、オープンラボ、P2・P3 レベル実験室、学生室
	6階	2,142.00 m ²	講座室（ライフサイエンス）、オープンラボ、P2 実験室
	7階	922.47 m ²	会議室
合計		13,654.10 m ²	（うち校舎面積 13,654.10 m ² ）

獣医学教育 病院棟	階	面積	主な機能
	1階	2,038.57 m ²	診察室、MRI、リハビリ室、放射線治療室（リニアック）
	2階	1,865.00 m ²	手術室、カンファレンスルーム、ICU
	3階	1,865.00 m ²	国際獣医教育研究センター、講座室（臨床・看護）、臨床実験室、学生室
	4階	1,865.00 m ²	講座室（公共獣医事）、外科実習室、内科実習室、獣医看護実習室
	PH	149.64 m ²	獣医学部棟への連絡通路
合計		7,783.21 m ²	（うち校舎面積 3879.64 m ² ）

大動物実習 施設棟	階	面積	主な機能
	1階	1,227.84 m ²	大動物臨床実習室、大動物解剖室、臨床講義室 隔離解剖室
合計		1,227.84 m ²	（うち校舎面積 1227.84 m ² ）

大講義室	階	面積	主な機能
	1階	516.32 m ²	大講義室
	2階	210.32 m ²	大講義室
合計		726.64 m ²	（うち校舎面積 726.64 m ² ）

管理棟	階	面積	主な機能
	1階	1,522.06 m ²	学長室、会議室、事務室
	2階	1,184.49 m ²	食堂
	3階	1,168.46 m ²	図書館、グループ学習室、ラーニングcommons
	4階	1,099.56 m ²	図書館
合計		4,974.57 m ²	(うち校舎面積 4974.57 m ²)

獣医学部においては、講座室（研究室）55室、講義室8室、演習室9室、実験実習室22室、情報処理学習施設1室を整備し、さらに、学長室、会議室、事務室、図書館、健康管理センター、学生自習室、学生控室を備え、大学設置基準第36条を満たし、教育研究及び時間割で示した授業を行う上で十分な環境が確保できている（資料19）。

養成する人材像に基づき実践的な教育研究を推進するため、次のとおり特色ある施設を整備する。

学生の教育研究スペースとしては、下表に示す大講義棟、獣医学部棟（1階実験動物センター、3階研究室、5階・6階オープンラボ等）、獣医学教育病院棟（1階診療スペース、2階臨床検査室、3階・4階研究室等）、大動物実習施設棟に、教育スペース、研究スペース及び教育研究共通スペースがある（資料46）。

（表17）教育研究スペース

建物名称	階	教育	研究	教育研究共通
大講義棟	1階	279.78 m ²	-	-
	2階	178.52 m ²	-	-
	小計	458.30 m ²	-	-
獣医学部棟	1階	16.80 m ²	1,001.08 m ²	140.25 m ²
	2階	1,166.26 m ²	-	-

	3階	1,112.13 m ²	-	30.78 m ²
	4階	1,322.57 m ²	-	-
	5階	223.70 m ²	36.00 m ²	1,095.02 m ²
	6階	223.70 m ²	-	1,123.10 m ²
	7階	-	-	-
	小計	4,065.16 m ²	1,037.08 m ²	2,389.15 m ²
獣医学教育病院棟	1階	0 m ²	0 m ²	2,038.57 m ²
	2階	293.60 m ²	148.13 m ²	231.44 m ²
	3階	439.62 m ²	-	733.88 m ²
	4階	900.77 m ²	-	243.53 m ²
	小計	1,633.99 m ²	148.13 m ²	3,247.42 m ²
大動物実習施設棟	1階	521.51 m ²	141.55 m ²	123.45 m ²
	小計	521.51 m ²	141.55 m ²	123.45 m ²
合計		9,732.84 m ²	1,326.76 m ²	5,760.02 m ²

このうち、獣医学科を対象に、実施場所と目的別に、許容する学生人数と研究スペースを（資料47）に図示し、総括表を（表18）に示した。卒業論文研究は、5～6年次に6単位で実施される。実際の研究活動は各個人によってメニューが異なり、必ずしも同時に使用されるものではないが、計算上は、同時に366名の学生が「実験」を行っても支障がないことを示している。さらに、コミュニケーションスペースとして、ディスカッションやカンファレンス等を行えるスペース（319人分）を設けている。このことから卒業研究等の研究活動のために十分なスペースを確保しているといえる。

（表18） 卒業研究等の研究活動を行うことができるスペース

建物名称	階	学生室（自習室）			実験スペース （含む診療）			コミュニケーション スペース		
		m ²	学生 配置	一人 当り	m ²	学生 配置	一人 当り	m ²	学生 配置	一人 当り
獣医学部棟	1 F	96.2	16	6.0	643.2	73	8.8			
	5 F	344.9	160	2.2	463.0	96	4.8	271.3	54	5.0
	6 F	344.9	160	2.2	473.1	96	4.9	271.3	54	5.0
獣医学教育病院棟	1 F				288.7	22	13.1			
	2 F				231.4	19	12.2	293.6	130	2.3
	3 F	274.9	184	1.5	171.7	20	8.6	486.0	45	10.8
	4 F	162.6	90	1.8				243.5	36	6.8
大動物実習施設棟				276.4	40	6.9				
	小計	1,223.5	610	2.0	2,547.6	366	7.0	1,565.7	319	4.9
合計学生配置人数		1,295								

（１）講座室（研究室）（15 m² 2室、17 m² 1室、18 m² 2室、20 m² 6室、21 m² 2室、24 m² 3室、25 m² 20室、27 m² 2室、29 m² 4室、35 m² 1室、40 m² 6室、43 m² 1室、44 m² 2室、45 m² 1室、83 m² 1室 全 55室）

講座室（研究室）として、獣医学部棟に29室（獣医学科用26室（個室11室（11名）、合同室12室（24名）、獣医保健看護学科用1室（3名）、外国語教育科目担当用2室（2名））、獣医学教育病院棟に26室（獣医学科用17室（個室、合同室で（37名）、獣医保健看護学科用6室（6名）、教養教育科目担当用3室（3名））を整備する。すべての教員に講座室が与えられるように整備している。

（２）オープンラボ（784.24 m² x2フロア）

獣医学部棟5階、6階講座室の前には、「オープンラボ」を設置する。オープンラボは、教員が実験等のために共同で使うスペースとなっており、中央部にディスカッションスペースを配置し、その両側に実験スペースを設ける構造になっている。オープンラボに

は、研究に必要な大型機器類を共同で使用できるように共通機器室を整備し、実験がスムーズに遂行できるよう配置する。また、感染病原体（ウイルス、細菌、原虫、真菌、寄生虫）に関する教育研究を行えるように、in vitro（試験管）実験のためのP2実験室（バイオセーフティレベル2（BSL2））を配置する。さらに、人獣共通感染症等に対応し、地域における水際対策学術支援の拠点としての役割を果たすため、P3レベルの実験室を配置し、臨床例からBSL3（レベル3）の病原体が分離されたときに対応する。

（3）実験動物センター（1,998.58 m²）

獣医学部棟1階に、ライフサイエンス分野の教育研究のための動物実験、及びVPP養成のための実習等に利用する実験動物センターを配置する。この施設は運用開始後、AAALAC（国際実験動物ケア評価認証協会）の認証を受ける予定である。

小動物飼育エリアは、クリーン動物並びに遺伝子改変動物の飼育室・実験室からなるコンベンショナル区域、SPF（specific pathogen free）動物の飼育室・実験室からなるSPF区域、及び感染実験動物の飼育・実験区域から構成される感染区域からなる。各区域は近年米国で主流となってきたアニマルスイート方式を採用している。アニマルスイート方式とは、一つのエリア内に飼育室と実験室を設置し、相互に往来が可能なシステムである。SPF区域においては、一方向気流式飼育ラックを導入し、飼育する動物は1ケージごとに独立した飼育環境で飼育されている。ケージ内の動物は清浄環境に保たれ、微生物による汚染の拡散を防ぐとともに、他のケージからの汚染を防げる構造になっている。このため、各飼育ケージ相互間のクロスコンタミネーションの可能性はない。また、SPFアニマルスイート内は、独立した空調エリアを形成し、飼育室間、並びに、飼育室と実験室と間を相互に移動することが可能となり、SPFエリア内で飼育、繁殖、実験的処置等の動物実験が完結できる環境となっている。このような方式をとることで、清浄な環境で、動物飼育と実験を行うことができ、実験の効率化と質の向上を維持することができる。

中動物（サル、ブタ等）飼育エリアは、飼育室、P2飼育室、手術室から構成されている。飼育室には屋外運動エリアを持つ飼育室も設置し、飼育動物の行動・心的状態を健康に保つよう動物福祉に配慮されている。これらのエリアにおける実験動物別管理頭数、飼育、保管場所、管理体制については、（資料40）のとおりである。

また、手術室にはC-アーム透視装置、ICU飼育室を併設しiPS細胞移植研究等、感染実験動物飼育・実験区域における人獣共通感染症研究等、先端ライフサイエンス研究、医獣連携獣医研究に用いる。四国の主要産業であり、獣医の職域と関連する水産養殖のために、水産系飼育室（通常実験室・感染実験室）区域を設置する。

獣医保健看護学科の実験動物系教員3名を実験動物センター内の講座室に配置し、管理運営に携わる。

（4）顕微鏡室、作成室（51.12 m²）

獣医学部棟 1 階の顕微鏡室、作成室に共同利用機器として、画像解析に使用する共焦点顕微鏡やフローサイトメトリー等の大型解析装置や、組織標本作成用の設備を整備する。

(5) 国際獣医教育研究センター (14 m² 1 室)

国際獣医教育研究センターは獣医学教育病院 3 階に設置する。また、学内 LAN を用いて、共同利用できるシステムを整備している。

(6) 実習室 (252 m² 1 室、236 m² 1 室、229 m² 2 室、225 m² 2 室、218 m² 1 室、176 m² 1 室 全 8 室)、大動物臨床実習室 (約 268 m²、1 室)、解剖室 (153 m² 1 室、64 m² 1 室、59 m² 1 室、12 m² 1 室)

実習室を獣医学部棟に 5 室 (実習室 (229 m² 2 室、225 m² 2 室、218 m² 1 室) 設置し、獣医学科及び獣医保健看護学科で共用する。90 人収容可能であり、実習を 2 クラスに分けて行うことに対応している。また、獣医学教育病院棟には、外科実習室 (252 m² 1 室)、内科実習室 (236 m² 1 室)、看護実習室 (176 m² 1 室) の、P1A レベル 3 室を設置し、生きた動物を用いた実験を可能とする。また、独立した建物として、大動物実習施設棟を設け、大動物臨床実習室 (1 室)、大動物解剖室 (1 室)、病理解剖室 (2 室)、隔離解剖室 (1 室)、大動物飼育舎を設置する。大動物実習棟の中央部には臨床講義室を設け、各実習室に設置したカメラを通してビデオモニターで手術部位などを観ることが可能となっている。

(7) 獣医学教育病院棟 (獣医学教育病院 3,903.57 m²)

獣医学教育病院棟 (4 階建て) は、二次診療施設としての役割を担い、1 ~ 2 階は診察室や入院施設、手術室を中心とした病院設備を整備し、獣医学教育病院として、基本的な診療から高度獣医療まで対応することを可能としている。さらに、獣医学教育に必須である共用試験 (Vet OSCE) 及び「総合参加型臨床実習」でも利用できる構造とした。また、アドバンスト科目における「総合臨床検査特別実習」で利用する臨床検査室を整備する。

獣医学教育病院棟 1 階には、診察室、処置室、入院室を確保し、日常の診療に使用するとともに学生の実習に利用する。動物診療及び実習設備として、X 線 CT や MRI 等の高度診断装置を導入し、基本的な画像診断実習に対応する。さらに、ヒトの高度医療にも使用される放射線治療装置 (リニアック) を導入することで、医獣連携獣医療を推進する。2 階部分は外科処置を主とする区画である。手術室はカンファレンスルームと画像を接続し、テレビ画面を通じてリアルタイムで手術の様子を観察でき教育効果を高めることを可能にしている。

獣医学教育病院の管理運営体制は、学部長を組織長とし、病院長、診療科長、動物関連技術長（獣医看護師長）及び獣医学教育病院事務課長の役職を設け、獣医学教育病院組織とする。また、放射線治療室（リニアック）の管理体制として、専任教員のうち、第一種放射線取扱主任者の有資格者2名を配置する。

（8）講義室（312㎡1室、211㎡5室、101㎡の臨床講義室1室、458㎡の大講義室1室、全8室）、演習室（85㎡～95㎡ 全8室）、コンピューター室（125㎡、90人収容、全1室）

全講義室、演習室には、プロジェクター等の視聴覚設備及び無線LAN設備を設ける。スモールグループディスカッションなど行うことを想定し、演習室及び講義室の全室に稼働機を置く。また、講座室に配属後から始まるプレゼミナール、獣医看護演習や実験発表などに利用する。さらに、ICT（情報通信技術）を用いた教育を充実させるため、コンピューター室を設ける。コンピューター室は、「情報リテラシー」の他に、共用試験（Vet-CBT）、公共獣医事分野における「公共獣医事情報解析実習」でも使用する。大講義室は、講義や研究発表の他、学会及び講演会などで使用する。

（9）3つの研究グループの施設設備

本学部の研究は目的別プロジェクト型研究という形式をとり、分野横断的に研究者が集い研究を実施する。研究体制は必ずしも教育組織と一致しない。

研究を行う施設は、獣医学部棟（1F、5F、6F）、獣医学教育病院棟（1F、2F、3F、4F）、大動物実習施設棟に分散している。教員研究室は獣医学部棟と獣医学教育病院棟にあるが、おおむねライフサイエンス系の教員は獣医学部棟5F、6Fに（一部1F）、公共獣医事系教員は獣医学教育病院棟4Fに、医獣連携獣医系の教員は獣医学教育病院棟3Fに研究室を持つ。

施設は、研究用（水色）、教育用（黄色）、教育・研究共通（橙）に色分けして表示している（資料46）。上述のように、研究組織と教育組織は必ずしも一致せず、本学部の研究施設は教育組織に所属するものではなく、全ての研究用並びに教育・研究共通スペースは、共有施設として利用する独特のスタイルとなっている。

各研究施設の用途、仕様、備品、さらに主として使用する教育分野を（資料48）にまとめた。

3. 図書館等の資料及び図書館の整備計画

(1) 図書館の整備計画

図書館は、管理棟の3・4階にあり分野別に蔵書を配架している。ラーニングcommons (109 m² 1室、グループ学習室 (10 m² 3室)を含め、延べ床面積の合計は2,159.74 m²、閲覧座席229席(収容定員の21%)を有している。岡山キャンパス、今治キャンパス、大学全体の構成は以下のとおりである。

(表19) 大学全体の図書室構成

区分	図書館	収納可能冊数	座席数	収容定員
岡山キャンパス	3,591.25 m ²	410,000	702席(10.8%)	6,470人
今治キャンパス	2,159.74 m ²	102,758	229席(21.20%)	1,080人
大学全体合計	5,750.99 m ²	512,758	931席(12.33%)	7,550人

(2) 図書資料等の整備計画

本学部では、獣医学科の専門教育用図書として【内国書】6,100点、【外国書】1,265点、獣医保健看護学科の専門教育用図書として【内国書】1,323点、【外国書】107点を揃え、合計【内国書】11,423点、【外国書】2,250点を整備する。また、教養教育用図書、外国語教育用図書として【内国書】4,000点、【外国書】878点を揃え、総計13,673点を整備する。

学術雑誌(電子ジャーナルを含む)について、洋雑誌では『Nature』、『Nature Medicine』、『Nature Immunology』、『Science』、『Proceedings of the National Academy of Sciences』、『Cell』、『Lancet』、『Veterinary Journal』、『Journal of Animal Science』、『American Journal of Veterinary Research』等を揃え、和雑誌(国内発行誌)は、「畜産技術」、「動物の循環器」、「動物心理学研究」、「日本栄養・食糧学会誌」、「日本獣医師会雑誌」、「日本畜産学会報」、「エキゾチック診療」、「Animal Behavior and Management」、「EXPERIMENTAL ANIMALS(実験動物)」、「Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition」、「Medical Entomology and Zoology(衛生動物)」、「J-VET」、「Small Animal Dermatology」、「Veterinary Oncology」、「Veterinary Circulation」などを整備する。視聴覚資料や電子書籍などについては、電子書籍【内国】2,384点、電子書籍パッケージ【外国】2点、オンラインデータベース1点を設け、視聴覚資料752点を整備する。

(3) 情報施設等の機能

図書館内にはパソコンを設置し、レポート等(EXCEL, PowerPoint, Word)の作成可能とする。また、このパソコンから、ネットワークを利用し、語学学習(TOEIC, TOEFL 対策やリスニング対策)のe-ラーニングシステム、学習管理システム(LMS) MOMO CAMPUS やポータルシステム(成績確認、シラバス確認、休補講確認、連絡事項確認、ポートフォリオ利用、授業アンケート利用等)が利用可能であり、図書館蔵書検索、自身の貸出状況や予約状況確認などもできる。語学学習のe-ラーニングシステムについては英語教材に加え、韓国語、中国語、フランス語、ドイツ語の教材を揃える。

また、グループ学習室にも各室にパソコンを設置し語学学習(発音練習を含む)や、プレゼンテーションの練習など、多目的な利用が可能となり充実した学習環境となっている。

(4) 他の図書館等との協力

国立情報学研究所のNACSIS - CAT / ILLをはじめ、国立国会図書館相互貸借システムなどを利用して、図書館間の相互貸借(ILL: Inter Library Loan)を行っている。岡山キャンパスの図書についても、蔵書検索が可能であり、今治キャンパスでも貸出ができるようにキャンパス間相互貸借(ILL)の制度を構築する。学内のILLの受付は、Webから申し込むこともできるようにしている。この他、BLDSSによる文献取り寄せもできるようにしており、文献取り寄せの手段は、ほぼ網羅している。

・入学者選抜の概要

1. 入学者受入れの方針（アドミッションポリシー）

（1）獣医学科

獣医学科では、以下の資質を持つ人を国内外から幅広く求める。

- A 生命、医療、動物に関する興味や探究心を持ち、これらの知識、技能を活かし社会に貢献したいと考える人
- B 科学的な知識と社会的な倫理を総合的に判断し、思考しようとする人
- C 物事を多面的に考察、理解し、要点をまとめることができる人
- D 新たな課題について、積極的に取り組む意欲のある人

（2）獣医保健看護学科

獣医保健看護学科は、以下の資質を持つ人を国内外から幅広く求める。

- A 動物やその環境について知的な好奇心、探究心を持つ人
- B 広く動物の福祉と健康に貢献しようとする人
- C 物事を多面的に考察、理解し、要点をまとめることができる人
- D 与えられた課題について、自律的、継続的に取り組むことができる人

2. 選抜の方法

本学部の入学者選抜の方法は、獣医学科（表 20- 1 ）、獣医保健看護学科（表 20- 2 ）の区分とする。

選抜方法は、AO 入試、推薦入試、一般入試、センター試験利用入試等を設ける。全国の受験者に受験機会を与えるために、既存学部と同様に地方試験（一般入試前期 S A 方式で 25 会場等）及びセンター試験利用入試を実施する。

なお、2018 年度入試ではセンター試験利用入試を実施しない。これに伴い、センター試験利用入試の募集人員は、一般入試（S A、S A B、S B、B 1〔獣医学科を除く〕、後期の各方式）に募集人員を振り替える。2019 年度入試からは、（表 20- 1 ）、（表 20- 2 ）のとおり入学者選抜を実施する。

また、獣医学科においては、四国知事会からの要望（資料2）により四国において活躍する獣医師を供給することを目的に、四国内の高校に在籍、及び在住する生徒を対象にした「特別推薦入試【四国入学枠】」「センター試験利用入試C I【四国入学枠】」といった地域枠を設けた入試を導入する。これらの入試では、20名程度の授業料を減額する四国枠入試特待生制度を設ける。

留学生受け入れについては、獣医学科、獣医保健看護学科ともに日本語能力試験N2レベル以上とする。選考においては、多様な教育課程への準拠と、自然科学の基礎知識習得の確認のため、私費外国人留学生入試【E J U利用】、国際バカロレア入試等を実施し、合わせて20名の募集枠とする。

(表 20-1) 獣医学科 入試区分・選考方法

入 試 区 分		専願制	併願制	首席	選考方法
推薦入試 (入学定員の割合 50%未満)	特別推薦入試 1	専願制	12	書類審査、基礎的な学力試験、面接	
	特別推薦入試【四国枠】 1	専願制	16	書類審査、基礎的な学力試験、面接	
	専門学科・総合学科特別推薦入試 1	専願制	2	書類審査、基礎的な学力試験、面接	
	推薦入試 A 方式 1	併願制	24	細査書(評定平均値、1.0)、学力検査(2科目)	
一般入試 (入学定員の割合 50%程度)	A 方式	専願制		書類審査、面接(基礎的な学力試験を含む)	
	一般入試前期 S A 方式	併願制	26	学力検査(2科目型)	
	一般入試前期 S A B 方式	併願制	12	学力検査(2科目型)	
	一般入試前期 S B 方式	併願制	6	学力検査(2科目型)	
	一般入試後期(ほか併用) 2	併願制	4	学力検査(2科目型)、センター利用(1科目型)	
	センター試験利用入試 C I 2	併願制	6	センター利用(1科目型)	
	センター試験利用入試 C I 【四国枠】 2	併願制	4	センター利用(4科目型)	
	センター試験利用入試 C 2	併願制	4	センター利用(2科目型)	
	センター試験利用入試 C 2	併願制	2	センター利用(2科目型)	
特別入試 (入学定員若干 名)	私費外国人留学生入試	併願制	20	書類審査、EJU(日本語留学試験)の成績、面接	
	国際バカロレア入試	併願制		書類審査、面接(基礎的な学力試験を含む)	
	帰国生特入試	併願制		書類審査、面接(基礎的な学力試験を含む)	
	社会人入試	併願制		書類審査、面接(基礎的な学力試験を含む)	

・2018年度入試は、下記(1、2)の説明内容により入学者選抜を実施する。また、2019年度入試からは(表20-1)のとおりとする。

1:2018年度については、十分な告知期間が確保できない「特別推薦入試、特別推薦入試【四国枠】」「専門学科・総合学科特別推薦入試」「推薦入試 A 方式」は実施時期を変更するが、受験生の混乱を防ぐため、それぞれ「獣医学部特別推薦入試」「獣医学部専門学科・総合学科特別推薦入試」「推薦入試 C 方式」と名称を変更して実施する。なお、選考方法・募集人員に変更はない。また、特別推薦入試に設けていた【四国枠】は獣医学部特別推薦入試で実施する。

2:2018年度については、センター試験を利用しないため、センター試験利用入試の募集人員は、以下のとおり、一般入試(S A、S A B、S B、後期)に振り替える。

- ・センター試験利用入試 C 8名 一般入試前期 S A 方式 4名、一般入試前期 S A B 方式 4名
- ・センター試験利用入試 C 【四国枠】4名 一般入試前期 S A 方式 4名
- ・センター試験利用入試 C 4名 一般入試前期 S B 方式 4名
- ・センター試験利用入試 C 2名 一般入試後期 2名

これらセンター試験利用入試の募集人員振替により、一般入試の募集人員は以下のとおりとなる。

- ・一般入試前期 S A 方式 34名
- ・一般入試前期 S A B 方式 16名
- ・一般入試前期 S B 方式 12名
- ・一般入試後期 6名

また、一般入試後期は学力検査(2科目)+センター利用(1科目)から、学力検査(3科目)へ変更して実施する。なお、C に設けていた【四国枠】は一般入試 S A 方式で実施する。

(表 20-2) 獣医保健看護学科 入試区分・選考方法

入 試 区 分		選考方法	倍率	選考方法
推薦入試 (入学定員の割合 50%未満)	特別推薦入試 1	専願制	10	書類審査、基礎的な学力試験、面接
	専門学科・総合学科特別推薦入試 1	専願制	2	書類審査、基礎的な学力試験、面接
	推薦入試 A 方式 1	併願制	10	書類審査(評定平均値×10)、学力検査(2科目)
	推薦入試 K 方式	併願制	2	書類審査(評定平均値×10)、学力検査(4科目)
一般入試 (入学定員の割合 50%程度)	A 方式	専願制	2	書類審査、面接(基礎的な学力試験を含む)
	一般入試前期 S A 方式	併願制	15	学力検査(2科目型)
	一般入試前期 S A B 方式	併願制	5	学力検査(言語占2科目型)
	一般入試前期 S B 方式	併願制	5	学力検査(言語占2科目型)
	一般入試前期 B 1 方式	併願制	5	学力検査(4科目型)
	一般入試後期	併願制	1	学力検査(2科目型)
	センター試験利用入試 C 1	併願制	2	センター利用(4科目型)
	センター試験利用入試 C 2	併願制	2	センター利用(2科目型)
	センター試験利用入試 C 3	併願制	1	センター利用(2科目型)
	センター試験利用入試 C 4	併願制	1	センター利用(2科目型)
特別入試 (入学定員若干 名)	私費外国人留学生入試	併願制	若干名	書類審査、学力試験、面接
	国際バカロリア入試	併願制		書類審査、面接(基礎的な学力試験を含む)
	帰国生徒入試	併願制		書類審査、面接(基礎的な学力試験を含む)
	社会人入試	併願制		書類審査、面接(基礎的な学力試験を含む)

・2018年度入試は、下記(1、2)の説明内容により入学者選抜を実施する。また、2019年度入試からは(表20-2)のとおりとする。

1: 2018年度については、十分な告知期間が確保できない「特別推薦入試」「専門学科・総合学科特別推薦入試」「推薦入試A方式」は実施時期を変更するが、受験生の混乱を防ぐため、それぞれ「獣医学部特別推薦入試」「獣医学部専門学科・総合学科特別推薦入試」「推薦入試C方式」と名称を変更して実施する。なお、選考方法・募集人員に変更はない。

2: 2018年度については、センター試験を利用しないため、センター試験利用入試の募集人員は、以下のとおり、一般入試(S A、S A B、S B、B 1、後期)に振り替える。

- ・センター試験利用入試 C 3名 一般入試前期 S A 方式 2名、一般入試前期 S A B 方式 1名
- ・センター試験利用入試 C 3名 一般入試前期 S B・B 1 方式 3名
- ・センター試験利用入試 C 1名 一般入試後期 1名

これらセンター試験利用入試の募集人員振替により、一般入試の募集人員は以下のとおりとなる。

- ・一般入試前期 S A 方式 17名
- ・一般入試前期 S A B 方式 6名
- ・一般入試前期 S B・B 1 方式 8名
- ・一般入試後期 2名

3. 四国枠設定の根拠及び外国人留学生枠について

四国枠を20名とした根拠について

四国枠を設定した理由として、今治市調査に基づく過去3年間の四国各県の公務員獣医師の募集、採用状況は次表のとおりである。

(表21) 四国各県の公務員獣医師の採用状況

県別	H27		H28		H29		累計		累計 不足分
	募集	採用	募集	採用	募集	採用	募集	採用	
香川	6	3	3	3	5	4	14	10	-4
徳島	10	5	10	7	10	3	30	15	-15
高知	4	3	9	2	9	5	22	10	-12
愛媛	3	3	5	3	8	5	16	11	-5
計	23	14	27	15	32	17	82	46	-36
過不足	-9		-12		-15		-36		

いずれの県においても募集に対して採用される公務員獣医師が少ない状況であり、毎年、募集を増加させても供給不足が解消されない状況にある。平成29(2017)年度においては、32名の募集に対して17名しか採用できておらず、需要の53.1%しか供給できていない状況である。

一方、四国4県において公務員獣医師、産業動物獣医師に関し、現状を維持するためには、毎年23名を確保し続ける必要があるとの試算が出ている(平成26(2014)年2月4日付、国家戦略特区として提案された際の試算資料「四国における大学獣医学部新設提案について」)。この23名と平成29(2017)年度現在の供給不足分の15名とを合わせ、平成30(2018)年度は38名の募集枠となるが、毎年53.1%程度の供給しか見込めない状況が継続するとすれば、38名の募集枠の147%以上の募集を行う必要が発生する。したがって、平成30(2018)年度は $38 \times 1.47 = 55$ 名の募集となる。これに対し、これまで採用されてきた人数は既存の獣医系大学出身者とする、平成30(2018)年度において55名に対して17名分が既設、38名分が供給不足となる。

これらの状況を鑑み、本学においては20名の四国枠を設定し、四国地区における需要に対応する。

「国内外から幅広く求める」とあるが、外国人留学生枠を設けていない理由

アドミッションポリシーに対応して、外国人留学生枠を設ける。獣医学部獣医学科の留学生受け入れは、私費外国人留学生入試【EJU利用】と国際バカロレア入試を合わせ、20名の募集枠を設定している。

なお、留学生確保の見通しとしては、韓国江南スカイ学院（資料36）をはじめ、本学園が世界13地区に配置する海外事務所・支局長をとおして、アドミッションポリシーを周知し、学生募集をおこなう。

4. 選抜体制

推薦入試、一般入試、特別入試を実施し、アドミッションポリシーに合致した多彩な受験生に対応する入試を用意する。募集人員の大きな一般入試前期SA方式、SB方式については、数学、英語、理科(物理・化学・生物)の3科目入試とし、アドミッションポリシーで求める学力を評価する。なお、入学後、英語を用いた授業を行うが、入学直後から卒業時に求められる英語力を身につけるためのステップアップ教育を行うため、英語のみに重点を置いた入学者選抜は実施しない。一般入試では3教科の合計点で判定を行う。また専願制の特別推薦入試については面接を課し、コミュニケーション能力、グループ活動への適性、自分の意見を持ち表現することができることを評価する。あわせて思考力・判断力・表現力といった学力の3要素を多面的に評価する仕組みをつくる。推薦入試の募集人員は、本大学の附属高等学校からの推薦も含め、入学定員の5割を超えない範囲とする。

選抜体制は、公正な判定を保ち、入試の透明性の確保を図るように運営している。入試本部は岡山キャンパスの入試広報センター・入試広報部が担い、今治キャンパスにおいては、担当教員との連絡、入試会場の設置など実務を担当する入試広報の専任職員を配置する。

合否判定においては、入試広報センター・入試広報部による資料作成、原案調整検討委員会、入学委員会、学科会議を経て、教授会で審議する多段階の判定手順を踏み、適切な判定とアドミッションポリシーとの合致確認が行われるよう選抜体制を整える。

特に、留学生については、海外13地区に配する海外事務所・支局長を通して、募集段階でアドミッションポリシーを周知する。また、入学後の生活面に関する支援を充実させるため、学園国際交流局と教学・学生支援課が連携する体制を整備する。

・取得可能な資格

獣医学部では、社会的ニーズを背景として学生が高い専門性を培い、社会貢献できるように、以下の資格の取得を奨励する。取得可能な資格及びそれに必要な科目は、以下の通りである。

(1) 獣医学科

資格	種類	条件
獣医師	国家資格（受験資格）	指定された授業科目の単位を修得することで卒業時に受験資格を取得できる。
実験動物一級技術者	日本実験動物協会認定資格（受験資格）	

(2) 獣医保健看護学科

資格	種類	条件
認定動物看護師	動物看護師統一認定機構認定資格（受験資格）	指定された授業科目の単位を修得することで受験資格を取得できる。
実験動物一級技術者	日本実験動物協会認定資格（受験資格）	
家畜人工授精師	国家資格（受験資格）	指定された授業科目の単位を修得し、別途講習を受講することで受験資格を取得できる。（受験科目一部免除）
食品衛生監視員	国家資格（任用資格）	指定された授業科目の単位を修得すること。
食品衛生管理者	国家資格（任用資格）	

・実習の具体的計画

1. 獣医学科

(1) 獣医学科における学外体験学修

入学時から継続して、獣医師や獣医関連専門家（VPP）の働く現場を見学し、獣医学の知識や技能が現場でどのように活用されるのか理解させるために、1～3年次に開講する「動物関連キャリア概論」、「獣医公衆衛生学実習」、「動物衛生学実習」の中で、学外体験を行う。「動物関連キャリア概論」では2学科合同で6班～15班（1班5～40人程度）に分かれて、家畜衛生、公衆衛生、研究機関等の現場を見学し、体験後は学内に戻り、班ごとに発表、省察する。

5年次の総合参加型臨床実習を経て、各人が将来設計に応じ、本格的な獣医療現場の獣医キャリアスキルアップ研修を行い、実際に獣医事の現場に出るまでの基盤となる実習プログラムになる。

この学外体験学修の目的は、初年度から、学内における講義及び実習が、現場での獣医師の仕事につながるものであることを実感させ、獣医師となるための学習意欲を維持向上させることにある。なお、学外体験施設については（資料20）に示した。

「獣医公衆衛生学実習」は、公衆衛生学分野での環境因子の検出と測定を行う保健所、保健環境研究所、屠畜場等を訪問し実際の作業を体験することで、その意義と問題点と解決方法を思考する能力を養う実習である。

「動物衛生学実習」では、ウシ、ウマ、魚類、ミツバチを代表例として、その飼育環境を見学し、衛生管理方法、疾病予防・診断・防除方法、生産物の安全性の評価方法などに関する基本的衛生監視技能と手技修得のための理解を深める。いずれも16班（1班9人程度）に分かれて見学し、体験後学内に戻り、班ごとに発表、省察する。

実習開始前に、実習担当教員は実習先と連絡を取り当日の打ち合わせや協議を行うとともに、学生にはガイダンスを行い、学外見学の心構えや事故防止について指導する。

1) 「動物関連キャリア概論」(1)

「動物関連キャリア概論」は、入学直後の1年期において、獣医師並びにVPP（獣医関連専門家）の職域の広さを学び、実際に現場を知り、獣医師やVPPとなることへの意識付けを行う科目である。合計2回の学外見学を計画しており、1回目は畜水産施設、2回目は保健所、牧場、屠畜場、動物園など獣医師やVPPが実際に活躍している現場を見学する。なお、本実習と同時期に「生命科学実習」を開講しており、同一のグループ編成（班）として、学生の実習が重複しないようプログラムを組んでいる（資料32-1P）。

学生及び教員配置計画

実習先ごとの学生の配置は(資料 32 - P2) のとおりである。実習先によって受入人数が異なるため、5～40人の班に分けて行動することになる。

○1 回目の学外見学：畜水産関係施設（学部共通 200 名）

学生を「生命科学実習」と同一の3グループに分け、さらに1グループを3班（20人～30人程度/班）構成とする。各班は、近隣の畜水産関係施設等を見学する。教員は1班につき2名配置し、学生の引率と指導を行う。これらの教員配置については（資料 32-P2）のとおりであり、時間割上の調整ができています。また事前準備、事後片付け等の時間も確保できており、他の授業科目の担当に関し支障はない。遠方の施設にはマイクロバス（大学所有1台、他レンタカー使用）で学生を送迎する。

○2 回目の学外見学：保健所、牧場、屠畜場、動物園など獣医師及びVPPが活躍している現場（学部共通 200 名）

学生は15班（5～20人/班）に分かれて、他の実習のない午後を利用して、獣医師及び獣医関連専門家が活動している現場を見学する。教員は1班につき2名以上配置して学生の引率と指導を行う。ほとんどの実習施設が愛媛県内であるが、遠方の施設にはマイクロバス（大学所有1台、他レンタカー使用）で送迎する。学生や教員の配置計画は（資料 32-P2）のとおりである。

実習先との連絡・連携体制

学内に、学外実習運営連絡協議会を設置し、各実習先との連絡調整、覚書締結、契約、学内起案書等の管理及び、実習ガイダンスの主催等を行う。委員長、学部長、副学部長及び、実習担当教員で構成され、教学・学生支援課が事務を行う。定期的及び緊急時の学外実習運営連絡協議会を開催し協議を行う。

学外実習運営連絡協議会は実習担当教員と連携して実習の質と量について、継続的に評価を行う仕組みを取り入れる。各学生の経験した実習内容を適時に把握し、学生が目的とした実習を経験できているかを確認するとともに、実習先との継続した連携を構築する。実習期間中の問題対応など、実習期間中24時間体制で、学生及び実習先と連絡がとれる体制を構築する。

事前・事後における指導計画

学外見学の前に、担当教員及び学外実習運営連絡協議会委員は以下の項目についてガイダンスを行い、体験学修の効果を高める教育を行う。見学後は、学内にて各班がそれぞれ体験した内容を分析し、発表を通じて他の班に情報伝達をする。

主担当	ガイダンス内容
-----	---------

実習担当教員	1) 実習の目的、方法、内容の確認 2) 報告、発表方法 3) 学生への評価方法
学外実習運営連絡協議会	1) 希望実習先の選択方法（学外見学では省略） 2) 実習プログラムとスケジュール 3) 実習先へ提出する学生履歴書の書き方指導（学外見学では省略） 4) 実習マナー講座開催 5) 実習上の留意事項（健康管理、守秘義務等） 6) 緊急時（災害・事故やその他トラブル等の対応方法） 7) 傷害保険、損害賠償保険等の加入確認

2) 「獣医公衆衛生学実習」(2)

「獣医公衆衛生学実習」は、公衆衛生学分野での環境因子の検出と測定を行う保健所、保健環境研究所、屠畜場等を訪問し実際の作業を体験することで、その意義と問題点と解決方法を思考する能力を養う実習である。

学生及び教員配置計画

2年 期で行われる実習の計画は以下のとおりである。獣医公衆衛生学実習は、実習の最後で学外見学を予定している。学生は2グループに分かれ、保健所、保健環境研究所、屠畜場等を見学する。各班には教員を2名配置し、学生の引率及び指導を行う。学外見学は、各グループにつき、3日（午後3コマ）を当てるが、遠方の施設には試験休み等を利用して午前中からマイクロバス（大学所有1台、他レンタカー使用）で送迎する（資料32-P3）。

実習先との連絡・連携体制

学内に、学外実習運営連絡協議会を設置し、各実習先との連絡調整、覚書締結、契約、学内起案書等の管理及び、実習ガイダンスの主催等を行う。委員長、学部長、副学部長及び、実習担当教員で構成され、教学・学生支援課が事務を行う。定期的及び緊急時の学外実習運営連絡協議会を開催し協議を行う。

学外実習運営連絡協議会は実習担当教員と連携して実習の質と量について、継続的に評価を行う仕組みを取り入れる。各学生の経験した実習内容を適時に把握し、学生が目的とした実習を経験できているかを確認するとともに、実習先との継続した連携を構築する。実習期間中の問題対応など、実習期間中24時間体制で、学生及び実習先と連絡がとれる体制を構築する。

事前・事後における指導計画

学外見学の前に、担当教員及び学外実習運営連絡協議会委員は以下の項目についてガイダンスを行い、体験学修の効果を高める教育を行う。見学後は、学内にて各班がそれぞれ体験した内容を分析し、発表を通じて他の班に情報伝達をする。

主担当	ガイダンス内容
実習担当教員	1) 実習の目的、方法、内容の確認 2) 報告、発表方法 3) 学生への評価方法
学外実習運営連絡協議会	1) 希望実習先の選択方法(学外見学では省略) 2) 実習プログラムとスケジュール 3) 実習先へ提出する学生履歴書の書き方指導(学外見学では省略) 4) 実習マナー講座開催 5) 実習上の留意事項(健康管理、守秘義務等) 6) 緊急時(災害・事故やその他トラブル等の対応方法) 7) 傷害保険、損害賠償保険等の加入確認

3) 「動物衛生学実習」(3)

獣医師が対象とするべき家畜、家禽、ミツバチ、魚介類について、その飼育環境と衛生管理方法、疾病予防・診断・防除方法、生産物の安全性の評価方法などに関する衛生監視技能と手技を修得する実習科目である。

学生及び教員配置計画

学内実習と学外実習を組み合わせる。学生は2グループに分かれて実習を行う。採材に行く時は、各グループは、さらに1班20~35人に分かれる。全ての学生は、肉牛及び乳牛、ブタ、ウマの飼育施設並びに養鶏場を訪問し、飼育環境、飼育様式、バイオセキュリティ体制等を学修する。さらに、衛生管理検査、安全評価のために各施設で採材を行い、学内で検査を行う。また、半数の学生は、獣医師が責任を負うべき対象であるミツバチ及び魚類の飼育施設をそれぞれ訪問し、家畜と同様に飼育環境、飼育様式、バイオセキュリティ体制などを学修するとともに、採材し、学内で検査する。学内での検査実習は、1グループごとに行い、7~8人の班に分かれて、事前に検討した評価方法で検査する。学外実習には、各訪問班につき教員を2名配置し、学生の引率及び指導を行う(資料 32-P4)。実習行程については、以下のとおりである。

	学外施設	サンプル	学内実習
1日目	のまうまハイランド	馬飼育施設の水、飼料、空気 購入馬肉	水質、飼料、空気の検査
2日目	養鶏場	鶏卵、飲水、排水、糞、飼料など	サンプルの保管
3日目	養蜂場 / 養殖場	飼料、水、死骸等	2日目、3日目のサンプルを用いた培養、検査開始
4日目			2日目、3日目のサンプルの解析、分析
5日目	肉牛、乳牛飼育施設	飼料、飲水、排水、堆肥、牛肉加工ブロック 飼育環境、原乳	5日目のサンプルを用いた解析開始（培養等）
6日目			5日目のサンプルの解析、分析
7日目	豚の飼育施設		
8日目			総合討論

実習先との連絡・連携体制

学内に、学外実習運営連絡協議会を設置し、各実習先との連絡調整、覚書締結、契約、学内起案書等の管理及び、実習ガイダンスの主催等を行う。委員長、学部長、副学部長及び、実習担当教員で構成され、教学・学生支援課が事務を行う。定期的及び緊急時の学外実習運営連絡協議会を開催し協議を行う。

学外実習運営連絡協議会は実習担当教員と連携して実習の質と量について、継続的に評価を行う仕組みを取り入れる。各学生の経験した実習内容を適時に把握し、学生が目的とした実習を経験できているかを確認するとともに、実習先との継続した連携を構築する。実習期間中の問題対応など、実習期間中 24 時間体制で、学生及び実習先と連絡がとれる体制を構築する。

事前・事後における指導計画

学外見学の前に、担当教員及び学外実習運営連絡協議会委員は以下の項目についてガイダンスを行い、体験学修の効果を高める教育を行う。見学後は、採取した材料を適切に保存して学内に持ち帰り、学内実習室で衛生管理検査、安全評価を行う。

主担当	ガイダンス内容
実習担当教員	1) 実習の目的、方法、内容の確認 2) 報告、発表方法 3) 学生への評価方法
学外実習運営連絡協議会	1) 希望実習先の選択方法（学外見学では省略） 2) 実習プログラムとスケジュール 3) 実習先へ提出する学生履歴書の書き方指導（学外見学では省略） 4) 実習マナー講座開催 5) 実習上の留意事項（健康管理、守秘義務等） 6) 緊急時（災害・事故やその他トラブル等の対応方法） 7) 傷害保険、損害賠償保険等の加入確認

（２）獣医学科における総合参加型臨床実習

コア・カリキュラムに指定される「総合参加型臨床実習」（必修科目）に関する具体的な計画を以下に述べる。

1) 実習先確保の状況

小動物臨床においては、附属の獣医学教育病院にて実習を行い、産業動物臨床においては、NOSAI（四国4県、広島県、岡山県）及び獣医学教育病院産業動物診療科にて実習を行う（資料20）。1班5～6人で構成し、24班に分かれて、小動物診療科及び産業動物臨床診療現場を5年次春1学期にローテーションで回る。

2) 実習先との契約内容

NOSAI（四国4県、広島県、岡山県）との契約内容については、実習生の受入れに対して、本学の「総合参加型臨床実習要項」（資料21）を提示し、実習内容の理解を得た上で、承諾を得ている。

3) 実習水準の確保、実習前の準備状況

「総合参加型臨床実習」に参加するには、4年次秋学期で実施される共用試験（Vet-CBT、Vet-OSCE）に合格することが前提となる。学生は、実習の目的に沿って自己の実習目標を設定する。実習に臨み、学内の実習指導教員の指導のもと、実習施設の実習指導者より助言を受ける。

実習前に、学生に対しては、ガイダンスを行い、総合参加型臨床実習の実習要項の確認、個人情報保護や感染症などの事故防止に関する取り決め等の指導、学生教育研究災害傷害保険（学研災）、学研災付帯賠償責任保険Cコース（医学賠）への加入、実習に対する心構え等について指導する。

4) 実習先との連絡・連携体制

学内に、学外実習運営連絡協議会を設置し、各実習先との連絡調整、覚書締結、契約、学内起案書等の管理及び、実習ガイダンスの主催等を行う。委員長、学部長、副学部長及び、実習担当教員で構成され、教学・学生支援課が事務を行う。定期的及び緊急時の学外実習運営連絡協議会を開催し協議を行う。

学外実習運営連絡協議会は実習担当教員と連携して実習の質と量について、継続的に評価を行う仕組みを取り入れる。各学生の経験した実習内容を適時に把握し、学生が目的とした実習を経験できているかを確認するとともに、実習先との継続した連携を構築する。実習期間中の問題対応など、実習期間中 24 時間体制で、学生及び実習先と連絡がとれる体制を構築する。

5) 学生及び教員配置計画

学生は、24 班（5～6 人/班）に分かれて、附属の獣医学教育病院を診療科別（内科、外科、腫瘍・麻酔科、病理・臨床検査、産業動物(学外往診)）にローテーションで回る。産業動物は、獣医学教育病院の産業動物診療科と地域 NOSAI での実習を併用する。

獣医学教育病院では、診断・治療を行っている助教以上の教員を実習指導者とする。外部機関では、NOSAI 愛媛、香川、徳島、高知、岡山、広島に所属し、産業動物診療に従事している獣医師に指導を依頼する。農林水産省「獣医学教育における獣医学生の臨床実習の条件整備に関する報告書」にしたがって、3 年程度の経験のある獣医師の管理のもとに実習をおこなう。

教員の配置は、学生 1 班（5～6 人）ごとに 1 名を月曜日から木曜日まで曜日ごとに配置し、学生の指導ができる体制を取っている。ローテーション及び教員配置表は(資料 22・資料 32-P5)に示した。

獣医学教育病院では実習に対応するため、診察室 8 室、処置室、薬品庫、血液・尿検査室、入院室、リハビリ室、X 線撮影室 3 室、CT 撮影室、MRI 撮影室、超音波検査室 2 室、放射線治療室、病理解剖室、外科手術室 3 室（1 室予備）、内視鏡検査室（眼科診察室を兼ねる）、ICU 室、臨床検査室、カンファレンスルーム(4 室)等を配置し、さらに病理・臨床検査を行う班のために大動物実習施設棟に大動物病理解剖室及び中動物病理解剖室を配置して学生が分散して実習できるようになっている。獣医学教育病院診療科で実習を行う学生は、5～6 人で 1 班となり、24 班中 20 班が病院の各所において実習を行う（残りの 4 班は教育病院外で実施する産業動物診療実習となる）。実習は、必要に応じて器材・設備のある場所で実施するため、1 日中固定した場所で実施することはなく、絶えず移動しながら行うので、必ずしも図のとおりにはならないが、1 例として病院における教員配置

及び学生配置の模式図（資料 50）を示した。図にしたがって配置を説明すると、内科の 4 班はそれぞれ診察室（図では 6 室が予備）、処置室（処置台 2 つが予備）、薬室（製剤室、調剤室、薬品庫）内視鏡検査室へ、外科の 4 班は診察室、処置室、外科手術室（1 室が予備）ICU 室へ、腫瘍・麻酔の 4 班は放射線治療室、X 線撮影室、リハビリ室、外科手術室へ、画像診断の 4 班は 2 班ずつに分かれて超音波検査室、カンファレンスルームへ、病理・臨床検査の 4 班は病理解剖室、入院室、臨床検査室及び中動物病理解剖実習室で実習を行う。このように獣医学教育病院は、実習を行うのに十分なスペースと機能を備えている。

月～木曜日（1-4 限）の診療日は、診療開始前のブリーフィングを担当教員から行い（30～40 分）、その後学生は診療に参加する（5～6 時間程度）。当日の診療終了後、その日診察した症例の、診断・処置などについて担当教員または研修医から解説を聞き（60～80 分）、質疑応答後に解散する。

獣医学教育病院での診察は症例によって著しく異なり、内容、時間共に画一的ではないが、内科系診療における学生の診療参加の内容の一例を下記に示す。

内分泌疾患を疑う症例 1 では、医療面接 身体検査 ディスカッション、結果と必要な検査 飼い主への説明 採血 血液・生化学検査 臨床病理に検査依頼 超音波検査 X 線検査 ディスカッション、結果と必要な検査 飼い主への説明 CT 検査 画像診断に依頼 ディスカッション、結果と必要な検査 飼い主への説明 刺激試験 ホルモン測定 臨床病理に依頼 ディスカッション、結果と必要な検査 飼い主への説明、次回診察予約のように進み合計時間は 410-560 分である。症例 1 の診察と並行して循環器疾患を疑う症例 2 の診療を始め、医療面接 身体検査 ディスカッション、結果と必要な検査 飼い主への説明 採血 血液・生化学検査 臨床病理に検査依頼 超音波検査 X 線検査 心電図検査 ディスカッション、結果と必要な検査 飼い主への説明、治療法選択 処方・投薬 飼い主への説明、次回診察予約の手順で進み、この症例に係る時間は 230-250 分となる。症例 2 の診察終了後に腫瘍性疾患を疑う症例 3 を診察し、この症例の診察時間は 360-510 時間となる。例とした 3 症例の診察に必要な時間は、同時に並行して進める場合もあるが、単純計算では 10 時間以上となり、総合参加型臨床実習に参加する学生は、これらの診察に交互に関わる。1 週間の診療参加において結果として多くの診療項目に携わることになり、診療を総合的に学ぶことができる。

例) 内科ローテーション 一日の診療シミュレーション（教員 1 人、学生 5-6 人）

タイムスケジュール	症例 1（内分泌疾患）			症例 2（循環器疾患）		
	事項	実施時間（分）	担当	事項	実施時間（分）	担当
9:00	医療面接 身体検査	15-30 15-30	学生 A			

タイムスケジュール	症例1（内分泌疾患）			症例2（循環器疾患）		
	事項	実施時間（分）	担当	事項	実施時間（分）	担当
9:30	ディスカッション （結果と必要な検査等）	15-20	学生 全員			
9:45	飼い主への説明	15-30	学生 全員			
10:00	採血、血液・生化学検査 臨床病理に依頼	15	学生 A			
10:15	超音波検査、X線検査	40	学生 A			
10:55	ディスカッション （結果と必要な検査等）	15-20	学生 全員			
11:10	飼い主への説明	15-30	学生 全員			
11:25	刺激試験、ホルモン測定 臨床病理に依頼	60	学生 A			
12:25	昼食、休憩					
13:10				医療面接	15-30	学生 B
				身体検査	15-30	
13:30				ディスカッション （結果と必要な検査等）	15-20	学生 全員
13:45				飼い主への説明	15-30	学生 全員
14:00				採血、血液・生化学検査 臨床病理に依頼	15	学生 B

タイムスケジュール	症例1 (内分泌疾患)			症例2 (循環器疾患)		
	事項	実施時間 (分)	担当	事項	実施時間 (分)	担当
14:15	ディスカッション (結果と必要な検査等)	15-20	学生 全員			
14:30	飼い主への説明	15-30	学生 全員	超音波検査、X線検査、心電図検査	60	学生 B
14:45	CT検査 画像診断に依頼	60	学生 全員			
15:45	ディスカッション (結果と必要な検査等)	15-20	学生 全員			
16:00	飼い主への説明 次回診察予約	15-30	学生 全員	飼い主への説明 治療法選択	15-30	学生 全員
16:15	合計診療時間	310-435		処方・投薬	15-30	学生 B
16:30				飼い主への説明 次回診察予約	15-30	学生 全員
16:45				合計診療時間	195-295	

金曜日の3～4時限に1週間の実習のまとめの時間をとる。獣医学教育病院2階カンファレンスルーム4室を使用し、1)内科系(内科、病理・臨床検査)、2)外科系(外科、腫瘍・麻酔)、3)画像診断、4)産業動物(NOSAI以外)に分かれて実施する。進行は担当教員が行う。内容はその週の診療患者及び診療科によって異なる。学生は、その週に実施した診療について、主要な症例を選択し、診療の経過を説明する。担当教員は診療の内容を解説する。学生は、質疑応答により理解を深めるとともに、症例発表のテーマを絞っていく。

(表22) 総合参加型臨床実習の基本的な1週間の流れ

月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
<p>診療日（1 - 4 限）</p> <p>1．診療開始前のブリーフィング（30～40分）： その日に診察する予定の動物患者の概要説明（教員）</p> <p>2．診療参加（5～6時間：当日診療が終了するまで）</p> <p>3．当日まとめ（60～80分）： 終了後、その日の診察した症例の、診断・処置などについて概要を解説（担当教員または研修医）。</p> <p>4．質疑応答</p>				<p>まとめ（3 - 4 限）</p> <p>1）内科系（内科、病理・臨床検査）、</p> <p>2）外科系（外科、腫瘍・麻酔）、</p> <p>3）画像診断、</p> <p>4）産業動物（NOSAI 以外）に分かれて実施する。</p> <p>1．その週に実施した診療について、主要な症例を選択する。</p> <p>2．診療の経過を説明する（学生）</p> <p>3．診療の内容を解説（担当教員）</p> <p>4．質疑応答</p>

6) 学内及び学外実習先における診療頭数

小動物は学内の獣医学教育病院で外来患者を対象にして実習を行う。産業動物は、獣医学教育病院の産業動物診療科と地域NOSAIでの実習を併用する(資料32 - P6)。獣医学教育病院での外来患者数（見込み）を(表23)に、産業動物診療の実習先における家畜種類、飼育頭数、受け入れ可能学生数を(表24)に示した。

獣医学教育病院の外来疾患動物数の背景として、近隣都市の人口との相関性がある。

本学部の近隣都市の人口は、今治（人口 15.8 万人）、松山（51.5 万人）、西条（11.5 万人）、新居浜（12.0 万人）、四国中央（8.9 万人）、伊予（3.8 万人）、尾道（14.0 万人）、福山（46.5 万人）、三原（9.6 万人）であり、合計 173.6 万人である（2015 年の統計）。

関東の大都市圏でない、類似の人口背景を有する獣医学教育病院の平成 26 年度の伴侶動物年間診療件数は、以下の通りである（人口の多い順）。

鹿児島大学（鹿児島 60.7 万人、霧島 12.7 万人、鹿屋 10.5 万人、薩摩川内 9.7 万人、始良 7.7 万人、出水 5.5 万人）106.8 万人で 5,200 件（年間診療日を 200 日とすると 1 日あたり同 26 件 / 日）。

北里大学（十和田 6.3 万人、青森 29.0 万人、八戸 23.4 万人、弘前 17.6 万人、上北 10.0 万人、三戸 7.0 万人）93.3 万人で 5,000 件（同 25 件 / 日）

宮崎大学（宮崎 40.4 万人、都城 16.7 万人、延岡 12.7 万人、児湯 7.2 万人、日向 6.3 万人、日南 5.5 万人）88.8 万人で 2,300 件（同 11.5 件 / 日）。

岩手大学（盛岡 29.3 万人、一関 12.1 万人、奥州 12.0 万人、花巻 9.8 万人、北上 9.3 万人、紫波 6.1 万人）、78.6 万人で 1,700 件（同 8.5 件 / 日）。

鳥取大学（鳥取 19.1 万人、米子 14.9 万人、東伯 5.7 万人、倉吉 4.8 万人、西伯 4.3 万人、境港 3.5 万人）55.3 万人で 2,900 件（同 14.5 件 / 日）。

帯広畜産大学（帯広 16.8 万人、釧路 17.5 万人、河東郡音更 4.5 万人、中川郡幕別 2.7 万人、日高郡新ひだか 2.3 万人、富良野 2.3 万人）で、合計 46.1 万人で 4,800 件（同 1 日あたり 24 件）であった。

帯広畜産大学を除くと、人口 100 万前後で年間 5,000 件、50 万～100 万以下では、年間 2,000～3,000 件である。

これらの診療件数を考慮すると、近隣獣医師会との連携・協力、質の高い獣医療の供給、広報活動などの疾患動物を集めるための努力は必要であるが、本学の獣医学教育病院においても、1 日 30 件程度の疾患動物の確保には十分な人口背景であると考えられる。診療科別の年間延診察見込頭数は、内科系 1,800 件、外科系 1,200 件、腫瘍科 1,700 件 行動治療科 100 件、画像診断 1,000 件、病理診断 200 件以上を予定している。画像診断 麻酔科、臨床検査、病理診断はそれぞれの診療科での診療に加えて、内科、外科、腫瘍の疾患動物の診療（検査等）を分担する。

産業動物に関しては、愛媛県の牛の飼養頭数は乳用牛 5,710 頭、肉用牛 11,380 頭である。また近隣の宇佐見牧場が乳用牛 450 頭を飼育しており、参加型臨床実習の実施に協力が得られることになっている。さらに、四国の畜産農家から NOSAI を介して廃用牛を集め、大学に近接した新開牧場に年間最大 12 頭を委託している。この飼養頭数は、診療、健康診断及び繁殖検診の対象として 5 件 / 週の確保は可能である。また、産業動物診療科では、大学の近隣農家で飼育されているウシと、のまうまハイランドで飼育されているウマを対象とし、教員が実施する定期健康診断及び繁殖検診を含む産業動物診療に同行する。

（表23）総合参加型臨床実習 獣医学教育病院外来患畜数（見込み）

診療科	「総合参加型臨床実習」に必要な外来患畜数
内科診療科	10-15 件 / 日
外科診療科	5 - 6 件 / 日（入院動物を含む）
画像診断	1 - 2 件 / 日（画像診断依頼）他診療科動物の画像診断を含めると 15 件 / 日

腫瘍・行動・麻酔診療科	7 - 8 件 / 日 (内容によって内科診療科あるいは外科診療科に担当を依頼)。麻酔科は、外科診療科疾患動物の外科手術、腫瘍科の動物の生検材料採取等の麻酔を担当する。
病理・臨床検査	他診療科が診療した動物を担当する。臨床検査、細胞診、場合によっては臨床疾患動物の病理解剖を実施する。
合計	23-31 件 / 日

(その他) 産業動物診療に関しては、教員による往診がある。

(表 24) 総合参加型臨床実習 産業動物診療実習先の家畜種類・飼育頭数

	実習施設	種類別飼育頭数			実習 受入 人数	備考
		ウシ		ウマ		
		乳用	肉用			
1	産業動物診療科 (獣医学教育病院)	150-200頭		50頭	42	ウシ 近隣農家 2 - 3 戸 ウマ のまうまハイランド飼養動物 50頭 (平成29(2017)年)
2	愛媛県農業共済組合 東予家畜診療所 松山家畜診療所 大洲家畜診療所 南予家畜診療所	5710頭	11380頭		48	乳用牛 113戸 肉用牛 177戸 (平成28(2016)年)
3	香川県農業共済組合 東部家畜診療所 中央家畜診療所 中部家畜診療所 三豊家畜診療所	1790頭	19600頭		7	乳用牛 92戸 肉用牛 226戸 (平成28(2016)年)
4	徳島県農業共済組合 本所家畜診療所	5140 頭	22600頭		7	乳用牛 113戸 肉用牛 202戸 (平成28(2016)年)

5	高知県農業共済組合 中央家畜診療所（南国） 中央家畜診療所（佐川） 高幡家畜診療所（四万十町）	4164頭	5043頭		36	乳用牛 72戸 肉用牛 186戸 (平成28(2016)年)
6	岡山県農業共済組合連合会 生産獣医支援センター 南部家畜診療所 西部基幹家畜診療所 西部家畜診療所 真庭家畜診療所 蒜山家畜診療所 北部基幹家畜診療所	15300頭	31900頭		42	乳用牛 280戸 肉用牛 490戸 (平成28(2016)年)
7	広島県農業共済組合 東広島家畜診療所 北広島家畜診療所 府中家畜診療所 庄原家畜診療所 三次家畜診療所	9430頭	24400頭		48	乳用牛 171戸 肉用牛 665戸 (平成28(2016)年)

7) 事前・事後における指導計画

事前指導の目的は、大学で修得した知識と臨床現場での実践を結びつけることにある。現場実習に向けた心構えや取り組みの姿勢、実習の意義や目的を再確認し、実習生としての言動や規定の遵守などについて総点検する。

事後指導では、実習終了時に症例発表を行い、体験した症例について検討する。実習を通して向上や深化が図られた点や努力が必要な点など、多角的な視点から臨床実習の省察を行い、成果と今後の課題等について意見交換をする。

8) 成績評価及び単位認定

「総合参加型臨床実習」の成績評価については、各診療科において診療に参加した症例について作成した実習日誌（20%）、週間レポート（20%）、実習終了報告書（30%）及び症例発表（30%）により、実習担当教員が単位を認定する。なお、実習日誌、実習終了報告書の提出物については、各診療科及び産業動物臨床実習施設の成績評価に含める。

（3）獣医キャリアスキルアップ研修

アドバンスト科目の「獣医キャリアスキルアップ研修」に関する具体的な計画について述べる。

1）実習先確保の状況

「獣医キャリアスキルアップ研修」においては、資料添付した研修先での研修が可能である（資料20）。本研修は、学外施設において、専門獣医師としての役割を体験するものである。研修先は1か所でも複数か所でも可とする。より長期の研修（最長12週間まで）を可能にするため、実習期間を第2クォーターに設定し、第2クォーターに続いて夏季休業期間も継続して実習を実施できるようにしている。

2）研修先との契約内容

担当教員は、受け入れ先が学生の「獣医キャリアスキルアップ研修」に適切な水準であるか判断して選定する。承諾機関との契約内容については、研修受け入れに対して、本学の「獣医キャリアスキルアップ研修要項」（資料23）を提示し、研修内容の理解を得た上で、承諾を受ける。

3）学生及び教員配置計画

1施設1～2名の学生を研修生として職業体験をさせる。大学の近隣もしくは学生の帰省先から移動可能な獣医療関連機関（研究機関、大学、国家機関、地方自治体、民間関連企業、動物病院等）を研修先とする。インターン期間は2週間以上とし、その間、学外実習運営連絡協議会を中心とする教員組織が、定期的に学生と連絡を取り合い、研修の進捗状況を把握する。

4）研修先との連絡体制

担当教員を窓口として、研修先と連携する。担当教員は、協議・共通理解できる体制を整え、研修先との打合せ、学生の指導援助等を行うとともに、学生からの相談や研修先からの問い合わせ等に対応する。学外実習運営連絡協議会は実習担当教員と連携して実習の質と量について、継続的に評価を行う仕組みを取り入れる。各学生の経験した実習内容を適時に把握し、学生が目的とした実習を経験できているかを確認するとともに、実習先との継続した連携を構築する。実習期間中の問題対応など、実習期間中24時間体制で学生及び実習先と連絡がとれる体制を完備し、実習中の学生の安全、安心を担保する。

5) 研修水準の確保、研修前の準備状況

「獣医キャリアスキルアップ研修」を受けるには、5年 期の「総合参加型臨床実習」を終えることが前提となる。学生は、研修の目的にそって、自己の研修目標を設定し研修に臨み、学内担当教員からの指導のもと、研修施設の研修指導者から助言を受ける。

担当教員は、学生に対しては、ガイダンスを行い、 研修要項の確認、 個人情報保護や感染症などの事故防止に関する取り決め等の指導、 学生教育研究災害傷害保険（学研災）、学研災付帯賠償責任保険Cコース（医学賠）への加入、 研修に対する心構え等を教授し、 学生は履歴書・研修先への誓約書を作成し、提出する。

6) 想定する業務内容と学習効果

当研修において想定する業務内容と学習効果を、研修先の分類ごとに以下に示す。

（表 25）研修先における業務内容、学修内容

分類	業務内容	学修内容
高等教育機関	<ul style="list-style-type: none"> ・ 疾病の病態の分析、鑑別診断、疾病予防法、治療法等に関する専門的な研究及び実験を行っている。 ・ 実験結果や研究成果の発表、ディスカッションを通して専門家の養成を行っている。 <p>（例）医学部内科学研究室、腎疾患に関する臨床例を対象に、現在の治療、診断法、問題点を学修するとともに、問題解決のための研究を行っている。薬学部生命薬科学科ではサイトカインの分析、定量法開発をもとに、いわゆるサイトカインアンバランスによる疾病（サイトカイン病）の治療法研究を行っている。</p>	<p>ヒト医療で何が求められているのか、また、ヒト医療と獣医療において共通して抱える問題点について考え、獣医師としての視点から、これら2つの領域にどのように貢献できるかを学修する。</p>
研究機関	<ul style="list-style-type: none"> ・ 臨床に関連する基礎研究や応用研究を推進しており、種々の疾患を対象に実験、研究並びにその結果や成果の発表、ディスカッションを行っている。 <p>（例）iPS 研究を行う研究室では、再生医療の基礎研究と応用研究を、長寿科学研究所ではアルツハイマー病などの早期診断、治療・予防法の開発研究を進め、問題点を明らかにし、問題解決のための研究を推進している。</p>	<p>最先端の研究並びに研究技術に触れ、臨床獣医師として、将来再生医療や創薬開発などの最先端研究（新規検査手法、臨床評価手法、解析方法など）にどのようにして関われるかを学修する。</p>

分類	業務内容	学修内容
動物病院	<ul style="list-style-type: none"> ・診療、手術等、獣医療に携わるすべての業務を行う。 ・一般獣医療において治療困難な症例等への対応や介護獣医療、終末医療、伴侶動物喪失時のクライアントへの精神的支援など広範囲な業務を遂行している。 	<p>実際の動物病院で行われている診療を体験し、獣医臨床獣医学において何が求められているのか、ヒト医療技術を獣医療に活かすための方策や、獣医療技術をヒト医療や基礎研究にどのように活かせるかについて学修する。</p>

7) 成績評価及び単位認定

「獣医キャリアスキルアップ研修」の成績評価については、各研修施設における実習日誌（20%）、実習先の評価（30%）、週間及び総合レポート（50%）の内容により、実習担当教員が成績評価する。

(4) 学内実習の具体的計画

1) 小動物内科学実習(3)

対象動物の種類

小動物内科学実習では、イヌ、ネコ（生体は使用しない）を対象とし、シミュレーター（模型）を積極的に使用する。インフォームドコンセントを含む手技の習得については、シミュレーターを用い、模擬クライアントの支援を得て基本的な技術を習得し、最終的に生体を用いて技術を確認する。生体を用いる実習は、保定、身体検査、経口投与、採血（静脈内投与）、心電図、X線撮影、糞便採取、採尿、皮膚搔把等の侵襲性の低い項目に限定する。生体使用頭数は1班に1頭（計8頭）を予定している。

これらの生体を用いた実習に関しては、学生を2グループに分け、イヌの負担を考慮して、16頭の犬を用意する。

学生の割り振りの考え方

40名の学生を2つのグループに分け、70名で2回の実習を行う。70名の学生を8班に分け各班約9名を対象に実習を行う。1実習室は4班35名の規模であり、教員は1班2人以上配置する。

教員の指導体制

21名の教員及び助手3名で指導に当たる。

2) 獣医療面接実習(4)

対象動物の種類

獣医療面接実習では、生きた動物を使用しない。模擬クライアントの協力を受け、ダミーのシミュレーション動物(縫いぐるみ)を使用して実施する。

学生の割り振りの考え方

獣医療面接実習では、140人の学生を2つに分け、70名の実習を2回行う。70名をさらに7-8名の小グループに分けて内科実習室で実習を実施する。

教員の指導体制

10名の指導教員がスーパーバイザーとして指導にあたる。模擬クライアントを10名以上養成して実習に参加していただく。

3) 小動物外科学実習(3)

対象動物の種類

小動物外科学実習は、イヌを対象とし、血管確保、カテーテル留置、気管挿管、救急救命処置、皮膚切開・縫合、腸管縫合、骨折整復等の処置・手技等は基本的にDVD画像による提示とシミュレーターを用いて手技を習得させ、必要であれば生体を用いる。各回の実習内容及び用いる対象器材または動物は、次のとおりである。

	実習内容	対象
第1日目	基本的な外科手技	DVDによる提示、生体(イヌ)、シミュレーター
第2日目	手術手技の基本的な適用法	器具・器材、DVDによる提示
第3日目	手術手技の基本的な適用法	器具・器材、DVDによる提示、シミュレーター
第4日目	麻酔法1	DVDによる提示、シミュレーター、生体(イヌ)
第5日目	麻酔法2	DVDによる提示、シミュレーター、生体(イヌ)
第6日目	救急処置法	DVDによる提示、シミュレーター
第7日目	避妊手術	生体(イヌ)
第8日目	避妊手術	生体(イヌ)

第9日目	外皮の手術	DVDによる提示、シミュレーター
第10日目	消化器の手術	DVDによる提示、シミュレーター
第11日目	抜糸、呼吸器及び胸部疾患の手術	DVDによる提示、生体（イヌ）、シミュレーター
第12日目	抜糸、神経系の手術	DVDによる提示、生体（イヌ）、シミュレーター
第13日目	呼吸器及び胸部疾患の手術	DVDによる提示とシミュレーター
第14日目	泌尿・生殖器の手術	DVDによる提示とシミュレーター
第15日目	骨筋系の手術	DVDによる提示とシミュレーター
第16日目	体壁の手術	DVDによる提示とシミュレーター

シミュレーターを用いる手技習得の実習を各班8～9名ずつで行う。シミュレーターはそれぞれ2体程度を用意する。生体のイヌは、16頭用意する。

学生の割り振りの考え方

小動物外科学実習では、2つの臨床実習室を使用する。140名の学生を2つのグループに分け、70名で2回の実習を行う。70名の学生を8班に分け各班約8～9名を対象に実習を行う。実習は2室（外科実習室、看護実習室）使用し、各実習室の学生配置は4班35名として十分なスペースを確保する。

教員の指導体制

13名の教員及び3名の助手で指導に当たる。

4) 獣医画像診断学実習(3)

対象動物の種類

イヌ、ネコ、ウシなどを対象とする。生体はイヌを使用する（ネコは生体を使用しない）。使用頭数は、1班に1頭（計8頭）とする。画像の読影や診断の要点については、イヌ及びネコに加えてウシなども対象とする。

学生の割り振りの考え方

140名の学生を2つのグループに分け、70名で2回の実習を行う。70名の学生を8班に分け、各班8～9名を対象に実習を行う。レントゲン撮影や超音波断層検査等の実施方法の習得については、獣医学教育病院の施設を用いて生きた動物を使用する予定であるが、画像の読影や診断の要点についてはDICOM(Digital Imaging and Communications in Medicine)を導入し、iPad等を使用して収録した多数の画像を用いた実習を行う。

教員の指導体制

8名の教員で指導に当たり、各班に少なくとも1名の指導教員を配置して指導を行う。

5) 産業動物臨床実習(4)

産業動物臨床実習は、ウシ、ウマ(生体を使用しない)、シミュレーター、画像モニターを用いて、産業動物臨床における安全で確実な手技を習得する2単位の実習科目である。

対象動物の種類

産業動物臨床実習の対象動物は、ウシ、ウマ(生体を使用しない)である。使用頭数はウシ6頭、シミュレーター6体である。さらにウシの負担を考慮して、12頭のウシを準備し、6頭ずつ交代で実習用に使用する。実習は、A)シミュレーター(模型)を用いた基本技術の習得、B)画像モニターによる観察、C)生体を用いた技術の習得・確認の3つをローテーションにより行う。生体を用いる実習は、ハンドリング、身体検査、栄養状態評価、体温・心拍数・呼吸数測定、採血、乳汁採取等の基本的で侵襲性の低い項目に限定する。生体使用頭数は1回の実習に6頭程度を予定している。実習用ウシの確保・飼育・運搬等については近隣の牧場の協力を得て行う(資料49)。

学生の割り振りの考え方

140名の学生を2グループに分け、さらに1グループを3班とする(1班あたりの学生数約23名、生体の場合は1頭あたり4名程度の学生)。シミュレーターによる実習、モニターによる観察の後、生体を利用する実習を行う。約23名程度の班において、ローテーションでシミュレーター、観察、生体による実習を回る。

教員の指導体制

7名の教員及び2名の助手で指導に当たる。生体は1頭につき1名(6名)、シミュレーターは2名、観察は1名を配置する。

6) 獣医臨床繁殖学実習(4)

対象動物の種類

ウシ、シミュレーター(模型)、と場材料(生殖器)を対象とする。手技の習得については、できるだけシミュレーターまたは、と場材料を用いて基本的な技術を習得し、最終的に生体を用いて技術を確認する。生体を用いる実習は、発情検査、直腸検査、疾患牛の診断等基本的で侵襲性の低い項目に限定する。生体使用頭数は1回の実習に6頭程度を予定している。

学生の割り振りの考え方

140名を2つのグループ(70名)に分け、2回の実習を行う。70名をさらに2つ(35名)に分けて、35名を実習室でシミュレーターまたは生きた動物を対象とする実技実習を行う。残りの35名は隣接する臨床講義室において、教員の解説とともに実技風景の映像を見ながら実技の様子を観察する。学生を入れ替え、再度実技実習と解説及び観察を行う。

7) 獣医解剖学実習(2)

対象動物の種類

獣医解剖学実習では、イヌ、ブタ、ウシ、ニワトリを対象とする。ウシは廃用牛を使用することとする。四国の畜産農家からNOSAIを介して集め、大学に近接した新開牧場に飼育・管理を委託して実習に供する。

学生の割り振りの考え方

獣医解剖学実習では、140名の学生を2グループに分け、大動物実習施設棟の大動物解剖室に移動式の解剖台を設置して実習を行う。実習は、動物の大きさに合わせて適宜グループを作り行う。部位ごとの観察は、小グループに分かれて行う。ウシの解剖は各グループ1頭(計2頭)、ブタの解剖は各グループ2頭(計4頭)を用いる予定である。実習は、テレビカメラと大型モニターからなる映像システムを通して見ることも可能な体制を整えており、教育効果を保つように工夫している。

教員の指導体制

5名の指導教員を配置して指導を行う。

8) 獣医微生物学実習(2)

対象動物の種類

獣医微生物学実習では、動物は使わず、全て *in vitro* の実験とする。

学生の割り振りの考え方

獣医微生物学実習では、140名の学生を2つのグループに分け、2つの実習室を用い、同時に開講する。各実習室では、70名の学生を7班に分け各班10名で実習を行う。

教員の指導体制

10名の教員で指導に当たり、各実習室にそれぞれ5名の指導教員を配置して指導を行う。各実習室では、1班10名からなる7班を対象に指導する。

9) 獣医病理解剖学実習(3)

対象動物の種類

ウシ、ニワトリを用いて実習を行う。ウシは廃用牛、ニワトリは廃鶏を使用し、加齢性の病態変化を学修する。廃用牛は、四国の畜産農家から NOSAI を介して集め、大学に近接した新開牧場に飼育・管理を委託して実習に供する。廃鶏は富田養鶏から入手する。

学生の割り振りの考え方

獣医病理解剖学実習では、140人の学生を4つのグループに分け、35人ずつ実習を行う。実習室は大動物実習施設棟の病理解剖室を使用する。廃用牛は4頭を使用し、廃鶏はさらに小グループ（5名程度）に分け実施する。

教員の指導体制

3名の専任教員で指導に当たる。

10) 獣医免疫学実習(2)

対象動物の種類

マウスを用いる。

学生の割り振りの考え方

獣医免疫学実習では、140名の学生を2つのグループに分け実施する。各グループ70名の学生を7班に分け、1班10名を対象に実習を行う。

教員の指導体制

7名の教員が指導に当たる。

11) 魚病学実習(3)

対象動物の種類

魚類(スルメイカ、コイ、マダイ等)を使用する。

学生の割り振りの考え方

魚病学実習では、140名の学生を2グループに分け、獣医学部棟の実習室(5ないし6階)、ならびに1階の水産系飼育室・実験室にて実習を行う。それぞれのグループを各7班に分け実施する。各グループには、複数の魚体が行き渡るようにする。

教員の指導体制

4名の教員が指導に当たる。

12) 人獣共通感染症学実習(5)

対象動物の種類

バイオセーフティの安全管理手技を実践・修得することが目的であるので、人獣共通感染症学実習では動物は使わず、全て *in vitro* のシミュレーション実験とする。また ABSL2 (P2 動物実験) では、ダミーのシミュレーション動物 (縫いぐるみ) を用いるので、生きた動物は使わない。

学生の割り振りの考え方

公共獣医事分野を選択した学生及び他分野に所属して人獣共通感染症学実習を選択した学生 (総数 40~50 名を想定) を対象とする。4 名で 1 班とする (10~12 班を想定)。本実習は、短期集中型で、1 日 5 コマ × 1 週間で行う。基本的に、午前中は主として各 BSL 施設の概要、ハード、ソフトの説明、基本操作手順、入室から退出までの注意事項の確認などを行う (2 コマ)。その後、全員が日を変えて BSL2, BSL3, ABSL2 の実験室に入り、すべての手順を実施する。退出後、チェックリストをもとに、実施上、失敗した点、問題となった点、疑問に思った点などを各自整理し、討論する (3 コマ)。

教員の指導体制

BSL 3 以上の施設で研究した実績のある 8 名の教員で指導に当たる。

以上の学内実習は、使用する教室 (資料 33) や担当教員の割り振りの調整ができてい

2. 獣医保健看護学科

(1) 獣医保健看護学科における体験学修

獣医師と獣医関連専門家 (VPP) の働く現場を獣医学科の学生と一緒に見学し、獣医看護学の知識や技能が現場でどのように活用されるのか理解させるために、1 年次に開講する「動物関連キャリア概論」で学外体験を行う。2 学科合同で 6 班~15 班 (1 班 5~40 人程度) に分かれて、家畜衛生、公衆衛生、研究機関等の現場を見学し、体験後は学内に戻り、班ごとで発表、省察する。

(2) 獣医保健看護学科における総合臨床実習

本項では、臨床実習として位置づけられる「病院動物看護実習」、「獣医看護実務実習」、「獣医看護実務実習」に関する具体的な計画を述べる。

1) 実習先確保の状況

「病院動物看護実習」においては、附属の獣医学教育病院にて実習を行い、「獣医看護実務実習」、「獣医看護実務実習」においては、資料添付した実習先等での実習を行う (資料 20)。「病院動物看護実習」は 1 班 7~8 人で構成し、8 班に分かれて、小動物

診療科を3年 期にローテーションする。「獣医看護実務実習 」、「獣医看護実務実習 』では学外施設において1～3名で実施する。

2) 実習先との契約内容

「獣医看護実務実習 」、「獣医看護実務実習 』における小動物病院、牧場及び大動物病院、研究機関等との契約内容については、実習受け入れに対して、本学の「病院動物看護実習/獣医看護実務実習 実習要項」(資料24)を提示し、実習内容の理解を得た上で、承諾を受けた。

3) 実習水準の確保、実習前の準備状況

学生は、実習の目的にそって、自己の実習目標を設定し実習に臨み、大学の実習指導教員からの指導のもと、実習施設指導者からの助言を受ける。実習の終了後には、実習実施報告書を提出するとともに、報告発表を行う。学生に対しては、ガイダンスを行い、実施要項の確認、個人情報保護や感染症などの事故防止に関する取り決め等の指導、学生教育研究災害傷害保険(学研災)、学研災付帯賠償責任保険Cコース(医学賠)への加入、実習に対する心構え等、実習先との契約内容について周知する。

4) 実習先との連絡体制

学内に、学外実習運営連絡協議会を設置し、各実習先との連絡調整、覚書締結、契約、学内起案書等の管理及び、実習ガイダンスの主催等を行う。委員長、学部長、副学部長及び、実習担当教員で構成され、教学・学生支援課が事務を行う。定期的及び緊急時の学外実習運営連絡協議会を開催し協議を行う。

学外実習運営連絡協議会は実習担当教員と連携して実習の質と量について、継続的に評価を行う仕組みを取り入れる。各学生の経験した実習内容を適時に把握し、学生が目的とした実習を経験できているかを確認するとともに、実習先との継続した連携を構築する。実習期間中の問題対応など、実習期間中24時間体制で、学生及び実習先と連絡がとれる体制を構築する。

5) 教員配置並びに指導計画

病院動物看護実習は別紙(資料25)に示すとおり、獣医学科及び獣医保健看護学科教員によるローテーションで指導にあたる。学外獣医看護実務実習では担当教員が実習先との連携をとり、必要に応じて実習先への訪問、連絡調整を行う。実習担当教員の年間スケジュールは別紙(資料42)のとおりであり、授業を進めていく上での支障のない教員配置となっている。

6) 事前・事後における指導計画

事前指導の目的は、大学で修得した知識と臨床現場での実践を結びつけることにある。現場実習に向けた心構えや取り組みの姿勢、実習の意義や目的を再確認し、実習生としての言動や規定の遵守などについて総点検する。

事後指導については、実習終了に際しての報告発表にて行う。事後指導では、実習を通して向上や深化が図られた点や努力が必要な点など、多角的な視点から臨床実習の省察を行い、成果と今後の課題等について意見交換を行い、実習を通じて、職業適正や将来設計等について考える。

7) 成績評価及び単位認定

「病院動物看護実習」の成績評価については、定められた学習項目の達成度(60%)、実習に臨む姿勢(20%)、症例/事例報告(20%)により担当教員が単位を認定する。「獣医看護実務実習」「獣医看護実務実習」の成績評価は本学学生としての責任と礼節に対する意識(20%)、実務実習の遂行に必要な書類作成(20%)、実習先からの評価(20%)、実務実習報告書(20%)、実習終了後の発表(20%)により担当教員が単位を認定する。

・企業実習（インターンシップ）を実施する場合の具体的計画

社会人になるための基礎を身につけ、就職活動へとつなげていくための企業実習（インターンシップ）を実施する。

1．企業実習（インターンシップ）の事前学修及び実習先確保の状況

インターンシップ参加の前に、教養教育科目として「インターンシップ概論」を開講する。「インターンシップ概論」の受講生は、「業界・職種・企業研究」「仕事・働くことの意味」「インターンシップを経験した学生の体験談」等についての講義を受け、担当教員は、「レポート作成」等で評価し、単位を認定する。講義の中で服装、挨拶、言葉遣い、電話対応などのマナーを身に付け、単位を認定された学生は、インターンシップに参加する。インターンシップ受け入れ企業等の募集は本学が独自で開拓しているほか、キャリア支援専門スタッフ等が、愛媛県中小企業中央会、愛媛県中小企業同友会または企業等と交渉し、インターンシップの受入を確保する（資料26）。

2．実習先との連携体制

各企業でのインターンシッププログラムについては派遣前に参加学生にとって有為な体験となるよう今治キャンパスのキャリア支援専門スタッフと、岡山キャンパスのキャリア支援センターのスタッフが協働して受け入れ企業側担当者とともに、学生の適性・インターンシップの内容についての情報を共有することによって綿密な計画をたてる。

3．成績評価体制及び単位認定方法

「インターンシップA、B、C」は、「インターンシップ概論」を受講したのち、履修可能である。インターンシップに参加し、企業等で4日以上インターンシップに参加した者は、実習時間によって「インターンシップA（国内30時間以上）：1単位」「インターンシップB（国内60時間）：2単位」「インターンシップC（国内90時間以上）：3単位」の単位取得が可能となる。学生には、実習日誌及びまとめ（資料27）を義務づける。受け入れ企業担当者はインターンシップ実施評価報告書（資料28）を提出する。インターンシップ担当教員は、以上の資料をもとに、「インターンシップを通して実社会の現状が把握できているか」、「勤務状況や勤務態度は社会人としてふさわしいものであったか」を評価し、更に「インターンシップ参加後のプレゼンテーションで自らの経験を述べ、就活に向けて積極的な心構えがでているか」等を評価し単位を認定する。

・管理運営

獣医学部の管理運営においては、学部教授会を設置し、教学面の重要事項の審議を行う大学協議会等は、テレビ会議システムを用い、岡山キャンパスと同時に審議、情報共有を図り、円滑な運営を行う。

1．教授会

本学では学則第 61 条に基づき、各学部にも学部教授会を置いている。その構成員は、専任の教授、准教授、講師、助教であり、定例の学部教授会は「学部教授会規程」において、毎月 1 回開催する。教授会の審議事項は、次のとおりである。

- (1) 学生の入学、卒業及び課程の修了
- (2) 学位の授与
- (3) 教育研究に関する重要事項で、学部教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が別に定めるもの

(3)については、学長裁定（平成 29(2017)年 4 月 1 日裁定）により次のとおり定めている。

- 1) 教育課程の編成
- 2) 教員の教育研究業績の審査
- 3) 教育、研究の組織並びに教育内容に関する事項
- 4) 予算並びに施設設備に関する事項
- 5) 学生定員並びに学生納付金に関する事項
- 6) 学生の表彰、懲戒及び身上に関する事項
- 7) 学生の厚生補導に関する事項
- 8) 学則、大学院学則の改正に関する事項

2．大学協議会

教学に関する全学的な審議事項を対象とする大学協議会を置いている。学則において、「教学に関する全学的事項を審議し、学長に最終的な意見として述べるものとする」と規定している。構成員は学長、副学長、学部長の他、学科・センター等の代表者であり、毎

月1回、学部教授会、各種会議の審議事項等について、教学面での最終的な調整及び審議を行っている。大学協議会の審議事項は次のとおりである。

- (1)総長の諮問事項
- (2)学長の諮問事項
- (3)大学の重要事項に関すること
- (4)各学部・各研究科間の調整に関すること
- (5)学則、大学院学則の改正並びに諸規程の制定、改廃に関する事項
- (6)その他大学の運営に関する事項

本学の教学面において、時期に応じ機動的な対応や検討を行うために、学科長、各種教学に関するセンターが所属する第1学部運営委員会が教学的な業務の推進を行う。また、教育改革等の企画案件については、学長会議、学部長等会議での検討を経ている。

これらの体制により、機動的に意思決定を行い、会議を通して、同時に学部・学科等への各組織に決定事項が浸透、実行される仕組みとなっている。

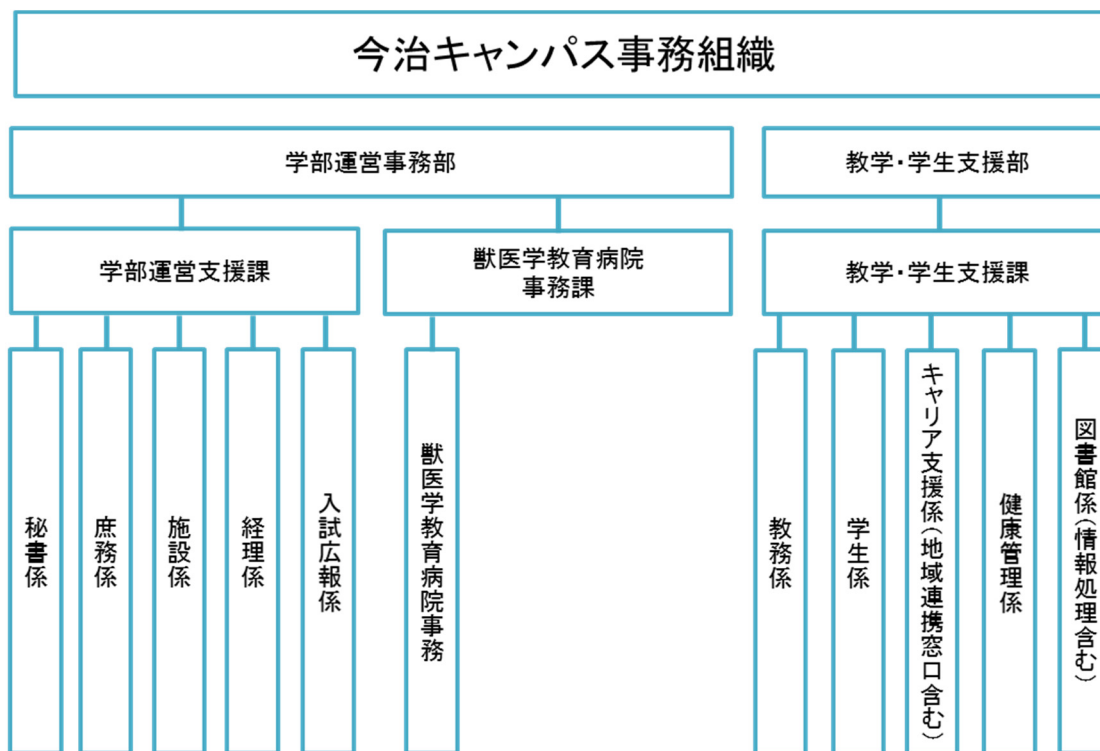
また、獣医学部は遠隔地（約140km、岡山キャンパスから車で2時間）であるため、岡山キャンパスと連携しながら独自の運営を行う体制である。今治キャンパスにおいては、学部内の教育に責任を持つ体制として、副学部長制を導入し、学部長の指示のもと、教育の責任者として教育担当の副学部長を置く。副学部長の下に、教務委員会、カリキュラム改革委員会、FD委員会を置き、学部全体の教育の質保証に責任を負う組織を明確にする。

3. 事務組織体制

今治キャンパスの事務組織は、学部運営事務局と教学・学生支援部の2つの部で構成する。学部運営事務局には学部運営支援課と獣医学教育病院事務課の2つの課を置き、教学・学生支援部には教学・学生支援課を置く。各課には下図のとおり学部の運営と学生の支援に必要な係を置く。それぞれの係は岡山キャンパスの関係部署と連携しながら事務処理を行う。学生情報等のデータは岡山キャンパスで一元管理し、両キャンパスにおける各種様式・手続きの標準化を行う。

岡山キャンパスと今治キャンパス間はテレビ会議システムを完備し、岡山キャンパスにおいて定期的に開催している部長会議、部課長会議、その他の関係会議への参加や、業務打合せに活用する。また、大学事務局長をはじめ岡山キャンパス各部署の幹部職員が定期的に今治キャンパスの各係を訪れ、業務上の問題点の解決や手続きの摺り合わせを行う体制をとる。

(図 8) 今治キャンパス事務組織 (案)



・自己点検・評価

1. 本学の自己点検・評価と認証評価について

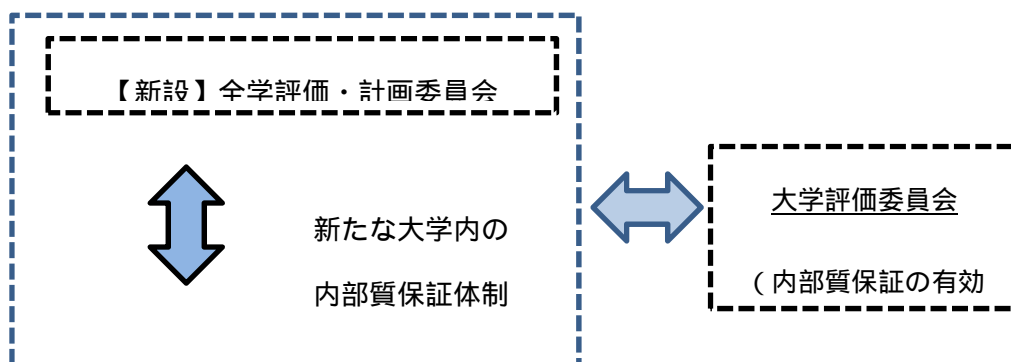
平成3(1991)年の大学設置基準の大綱化の中で、大学の教育研究活動等の状況についての自己点検・評価が導入されたことをふまえて、本学では、平成4(1992)年度から本格的に自己点検・評価活動に取り組んできた。平成19(2007)年に公益財団法人大学基準協会の第一期認証評価を受け「適合」の評価を得ている。平成25(2013)年には同協会による第二期認証評価を受審し、「適合」の評価を得て、平成32(2020)年度まで認定を得ている。

2. 全学の内部質保証の実施方法と体制

平成28(2016)年3月、文部科学省より認証評価機関に関する学校教育法110条の改正を平成30(2018)年度から施行することが示され、認証評価において内部質保証システムが最重要点検項目となることが示された。本学が受審を予定している公益財団法人大学基準協会も、平成30(2018)年度から適用する第3期大学基準を平成28(2016)年度に公表し、全学的な観点からの内部質保証体制を大学の最重要点検対象と示している。

これらの背景から、本学は第3期認証評価受審の準備として、平成28(2016)年度に中長期計画と全学運営組織を重視した新たな内部質保証体制の構築を決定した。平成29(2017)年度より、全学と部局が連動して事業の推進、点検評価、改善の責任を負うことで、単年度におけるPDCAサイクルを機能させ、全学と部局が中長期計画に基づき自らの質保証を継続的に行う体制を運用する。具体的には、本学の内部質保証体制は、全学的組織として「全学評価・計画委員会」を置き、部局(=機構、学部・研究科、事務局)単位では「組織別評価・計画委員会」を設ける。全学と部局が連動して事業の推進、点検評価、改善を行い、中長期計画に基づき自らの質保証を継続的に行う体制を構築している。全学の内部質保証の有効性や教育研究活動等の妥当性については、外部の意見を取り入れるため、外部委員を加えた「大学評価委員会」が検証する。

●内部質保証の体制



3. 第3期認証評価を受ける計画

本学は第3期認証評価を平成32(2020)年度に受審する予定であり、認証評価に向けた計画は次のとおりである。

- 平成29(2017)年2月 第3期に向けた内部質保証体制確定
- 平成29(2017)年4月 新体制での運用開始
- 平成29(2017)年7月 第2期の改善報告書提出(公益財団法人大学基準協会)
- 平成30(2018)年7月 第3期認証評価の申請検討ワーキンググループ設置
- 平成32(2020)年1月 第3期認証評価の申請
- 平成32(2020)年9月 審査受審(実地審査等)
- 平成33(2021)年3月 第2期認証期間の終了(H33.3.31)

4. 獣医学部における内部質保証について

獣医学部については、岡山理科大学自己点検・評価規程に定めた観点に加えて、公益財団法人大学基準協会の「獣医学部教育に関する基準」である8つの大項目(1 使命・目的、2 教育課程・学習成果、3 学生の受け入れ、4 教員組織、5 学生支援、6 教育研究等環境、7 社会連携・社会貢献、8 点検・評価、情報公開)をふまえた内部質保証を自律的に行いつつ、完成年次以降には第三者評価を受ける計画である。

5. 結果の活用・公表

自己点検・評価の結果、改善が必要な事項については、「岡山理科大学自己点検・評価規程」第6条に基づき、速やかに適切な措置を講じ、各組織の目標(中期目標)を改善するための判断材料(データ)として活用している。自己点検・評価の結果については、平成22(2010)年の「認証評価での助言に対する改善報告書」、平成25(2013)年の「岡山理科大学自己点検・評価報告書2013」と認証評価結果をホームページ上で公表している。

・情報の公表

教育研究活動等の状況に関する情報については、社会に対する説明責任を果たし、教育研究の質を向上させるため、岡山理科大学ホームページ内の「情報公開」において以下の項目を公表している。これは本学部においても同様の方針である。

HP アドレス (トップ) <http://www.ous.ac.jp/>

情報公開アドレス http://www.ous.ac.jp/page.php?sec=ctg_1&jpml=koukai

主な公表項目は次のとおりである。

1 . 大学の教育研究上の目的に関すること

- ・ トップ > 情報公開 > 本学の教育研究目的に関する情報

ここでは建学の理念、沿革、教育研究上の目的（大学、学部、大学院）を掲載している。

2 . 教育研究上の基本組織に関すること

- ・ トップ > 情報公開 > 本学の教育研究上基本組織に関する情報

ここでは学部学科・研究科・専攻組織図、附属施設並びに事務組織図を掲載している。

3 . 教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

- ・ トップ > 情報公開 > 教員組織、教員数、教員業績・学位に関する情報

ここでは、基礎情報（役職者）、基礎情報（学部・研究科、基礎情報（教員数・職階別）、教員保有学位・業績 教員検索システムデータ、年齢別教員数、専任教員1人あたりの学生数、専任教員数と非常勤教員の比率を掲載している。

4 . 入学者に関する受入方針及び入学者の数、収容定員及び在学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること

- ・ トップ > 情報公開 > 入学者・在籍者・卒業に関する情報

ここではアドミッションポリシー（大学、学部、大学院）、入学定員、入学者数・入学者推移、編入学者数、収容定員、収容定員充足率、在学者数（社会人学生数・留学生

数)、学位授与状況(卒業生数・修了者数)、就職者数・進学者数、退学・除籍者及び中退率、留年者数、主な就職先・進学先の情報を掲載している。

5. 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

- ・ [トップ](#) > [情報公開](#) > [教育課程に関する情報](#)

ここではカリキュラムポリシー(大学、学部、大学院)、履修モデル、年間授業計画(年間行事予定表)、授業科目の名称・内容・目標並びに年間の授業計画を掲載している。

6. 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

- ・ [トップ](#) > [情報公開](#) > [学修評価及び卒業修了基準に関する情報](#)

ここではディプロマポリシー(大学、学部、大学院)、学修成果に係る評価、修業年限及び卒業修了に必要な修得単位数を掲載している。

7. 校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

- ・ [トップ](#) > [情報公開](#) > [学習環境に関する情報](#)

ここでは蔵書数、面積、所在地、主な交通手段、キャンパス概要、キャンパスライフ施設、課外活動の状況(文化局、体育局)を掲載している。

8. 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること

- ・ [トップ](#) > [情報公開](#) > [学生納付金に関する情報](#)

ここでは授業料、入学金その他の費用、特待生制度の概要を掲載している。

9. 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

- ・ [トップ](#) > [情報公開](#) > [学生支援と奨学金に関する情報](#)

ここでは就職支援、メンタルヘルス等健康支援、奨学金制度、学生相談窓口、保険制度を掲載している。

10. その他（教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報、学則等各種規程、設置認可申請書、設置届出書、設置計画履行状況等報告書、自己点検・評価報告書、認証評価の結果等）

・トップ>情報公開>その他の公開情報

ここでは自己点検評価、設置届出書類、財務状況（法人全体、岡山理科大学）、岡山理科大学学則、岡山理科大学大学院学則、情報開示（法人全体）学校法人会計の特徴・各科目の説明を掲載している。

これらの公表項目の他、以下の項目についても情報公開ページにて公開している。

・トップ>情報公開>社会貢献・産学官連携・大学間連携

社会貢献、産学官連携、大学間連携を掲載。

・トップ>情報公開>海外協定校

大学間連携海外協定校、協定校からの受け入れ学生数及び海外派遣学生数を掲載。

・教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

本学では教員の教育能力を高める組織的・実践的取り組みとして平成 12(2000)年度に FD 委員会を設け、授業の改善を目的に教育システムの点検、授業内容（範囲及び水準）・方法の妥当性の検証等に全学的に取り組んできた。

平成 22(2010)年度には教育開発支援機構（平成 28(2016)年度より「教育支援機構」）を創設して、FD 推進室を中心に従来の取り組みの拡充を図り、学生による授業評価アンケート、教員間の授業参観、これらの有効性・妥当性の検証と啓発・周知を図るための講演会等の研修、各種報告書の作成と公開等を行っている。平成 28(2016)年度に大学の機構改革に伴い、FD 推進室を教育開発センターに改組すると共に、本学が直面する教育課題に対応し教育改革計画を立案し、集中的に審議するための学長直下の組織として、教育改革会議を設置した。更に教育改革会議が発議し全学で決定した方針や改革計画を実行する役割を果たすとともに、各学科から改革案を全学に提案する役割も果たす教育ディベロッパーの制度も確立した。これにより、全学、学部・学科、個人という縦の繋がりによる責任の明確化と推進体制が構築され、同時に学部・学科と機構との横の連携による情報共有を図っている。

また、教育研究活動の適切かつ効果的な運営を図るため、教職員を対象として必要な知識や技能を習得させ、能力及び資質を向上させるための研修として、SD を計画的に行っている。

以下、教育内容の改善に関わる研修としてFDを下記1～4に、教育研究活動の適切かつ効果的な運営を図るための取組としてSDを5に述べる。これらの取組は今治キャンパスにおいても同様に行う。

1．学生による授業評価アンケートの実施と活用

すべての授業科目に対してWeb（ポートフォリオ）によるアンケート調査を実施している。質問項目は、学生自身の学習の取り組み、授業内容の水準、方法、形態、施設・設備などに加え、自由記述欄も設けている。

アンケートの集計結果はWeb上で確認することができ、所属長の点検と同時に担当教員自身が学生による自由記述欄へのコメントに対する所見をWebシラバス上に登録し、すべての学生が所見を閲覧できるようにしている。また、Webシラバスの所見欄が拡充され、「受講者へのコメント」、「次回に向けての改善・変更予定」を加え、学生の意見に教員が応えることによって継続的な授業改善が行われるようにしている。

2．教員間の授業参観

本学では、非常勤講師担当科目も含め、すべての授業を学科単位・科目区分単位で参観できるようにしている。参観希望者は授業担当者に1週間前までに申し出て、参観後には当該授業の内容・方法の改善に資する所見を提出する。授業科目によっては全教職員に参観を募るものもあり、その目標・趣旨・進度等を含め教育開発センターが周知を図っている。

3．FD講演会等の教員研修と情報の共有

学内の教職員を対象に、教育開発センターが企画立案あるいは共催した講演会等の研修を年間数回実施している。必要に応じて学外から研究者や注目される実践者を招いたり、他大学の視察を行ったりするなど、先進的な取り組みに関する情報の収集に努め、課題意識の共有・啓発と見識の深化を図っている。

これらの取り組み状況は、学内の主な委員会で報告され、講演会等の資料や実施結果は報告書にまとめてポータルサイト等で公開し、情報の共有を図っている。授業アンケートの分析も教育開発センターが行い、その成果と課題、今後の取り組みについては上記の講演会を通して周知を図り、検討を重ねている。

4．今治キャンパスにおける取り組み

獣医学科において、英語によるコミュニケーション能力を有する学生を養成するため、6年間を通して行う英語教育の達成目標と水準を明確にしている。授業科目を担当する教員は、これらの目標と水準を認識した上で、担当する授業科目の目標に沿って授業を実施する。学生の到達度、学修成果を検証することで、学科として英語によるステップアップ教育が到達目標に達しているか、成果及び実施プロセスを検証し、改善に向けた意見交換をFDとして実施する。

5 . FD に関する大学間の取り組み

FDに関する全国的な取り組みについては、京都大学高等教育研究開発推進センターや大学教育学会等から配信される情報などを収集している。特に、今治キャンパスにおいては、四国において活発に活動が行われている四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（Shikoku Professional and Organizational Development Network in Higher Education。以下「SPOD」という）のFD・SD活動に職員を派遣する。岡山県内では、高等教育機関の連携事業である「大学コンソーシアム岡山」等の活動に参加する。収集した情報は学内で共有し、FDに対する全学の意識を一層高めるよう努めている。

6 . SD 活動に関する取り組み

本学においては、「目指すべき職員像」を掲げ、事務職員の能力及び資質の向上を目的としたSD活動を実施している。

<目指すべき職員像>

- 1) ビジョンを共有し、行動する職員
- 2) 大学で働くことを誇りとする職員
- 3) 誠実な対応により信頼される職員
- 4) 確かな情報を見極め、適確な判断ができる職員
- 5) コミュニケーションを常に心がける職員
- 6) 多様な人々と協働できる職員
- 7) 自ら考え、企画提案できる職員

これらの職員像を実現するため、まず、目指すべき職員像を共有し、大学職員として求められるコミュニケーション能力、課題解決能力を養う研修を重点課題として取り組んでいる。また、教育研究活動の適切な運営を図るため、今後の入学者選抜の在り方、ハラスメント防止、IRに基づく質保証、大学のグローバル化等、全学的な重要課題は、教員・職

員合同でFD・SDを実施している。獣医学部においては、獣医学教育の観点から独自の研修も行っていく。

・社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

本学の進路支援は、単に学生の就職活動の支援だけでなく、広く学生の社会的な自立や職業的な自立を促すものとして、「キャリア形成」も念頭においた「キャリア支援」と位置づけた体制をとっている。

1．教育課程内の取組について

獣医学部は各分野への進路を実現するために、方向付け教育を行う。キャリア支援においても、教育プログラムの年次進行、養成する人材像に合わせ研究機関、公務員関係、高度獣医療診療機関を中心に情報提供等の支援を行う。

これに加えて、XIで述べた「インターンシップ概論」「インターンシップA・B・C」の他にも、生涯を通じての主体的な学びの意味を理解し、自律的に判断・実践していくための知識と技能、表現力を身につけるため、初年次教育科目として、大学での学びの方法論を習得する「フレッシュマンセミナー」を、また、キャリア教育科目として「プレゼンテーション基礎編A・B」等を設け、就業力を養う教育体制とする。

2．教育課程外の取組について

獣医学部では学生の進路を支援するために、今治キャンパスでも教学・学生支援課の中に、キャリア支援の専門的な技能を持ったスタッフを配置し、岡山キャンパスに設置しているキャリア支援センターと緊密な連携をとる。岡山キャンパスのキャリア支援センターで行っている、独自のキャリアガイダンスの実施や就職支援冊子の編集・発行、保護者との教育進路懇談会や企業懇談会の開催、求人情報や在学生・卒業生の就職活動情報を管理するデータベース「理大就職ナビ」の構築・運用、メーリングシステムによる迅速な就職支援体制は、今治キャンパスにおいても行う。

これらの取り組みは、平成21(2009)年度文部科学省大学教育・学生支援推進プログラム「地方理工系大学における迅速で組織的な就職支援システムの構築」として採択され、事業終了後には、最高ランクのS評価を受けた。今治キャンパスでは、本学が培ってきた優れた支援体制を継承しながら、学生のニーズにあった就職支援を行う。

キャリアガイダンスは、1年次から開始し、特に就職活動年次のガイダンスは、実際の就職活動のスケジュールに対応して実施する。

また、各種セミナーについては、主に就職活動者を対象に、外部講師を招いて開催する。具体的には、Web試験対策セミナー、インターンシップセミナー、メイクアップセミナー、グループディスカッション体験セミナー等を開催する。

3. 適切な体制の整備について

本学のキャリア支援センターが提供する就職進路支援行事を（資料 29）に示す。

以下に、その他の就職支援の概要を記載する。

（1）就職支援マガジン

各年次に応じた冊子『ME（Magazine for Employment）』を作成し、各年次のキャリアガイダンス等で使用している。

（2）教育進路懇談会の開催

全国各地で教育進路懇談会を開催し、保護者と担当教員とキャリア支援センターのスタッフが、在学生の学修成果、学生生活及び進路について、情報共有する。愛媛県内出身学生の保護者を対象としては、開設後は、今治キャンパスも保護者会会場に追加する。

（3）企業説明会

岡山キャンパスでは、毎年、300社を超える企業等の参加による合同企業説明会を行っており、今治キャンパスの学生はこれらへの参加ができる。今治キャンパスにおいても合同企業説明会を開催する。今治キャンパスでは特に獣医師やVPPを必要とする国や地方公共団体の医療保健機関及び民間企業を対象とする。さらに、就職活動開始年次には、学生の採用に向け、キャンパス内での業界研究・説明会を行う。

（4）就職ポートフォリオ

学生一人ひとりの成長度合いを可視化し、キャリア形成へのフィードバックを図るよう、就職適性検査・就職模擬試験を1年次及び就職活動開始年次を実施して、入学時との能力・適性の違いや変化を把握し、キャリア支援に役立てる。

（5）筆記試験対策

今治キャンパスでは、公務員対策講座等を開催し、獣医学部の学生に対して専門に特化した試験対策講座を設ける。なお、実際に勤務している方を講師に招いたセミナーや、獣医師国家試験に合格した学生・OBによる体験報告会などを実施する。

（6）就職支援システム

全在学生が利用できる就職支援システム「理大就職ナビ」を今治でも運用する。

（7）卒業生に対する支援

在学生と同様に卒業生に対する支援を行なう。既卒者向けの求人情報は、随時「理大就職ナビ」に掲載しており、学外から情報を入手できるようにしている。また、必要に応じて常に相談・面談が行える体制を整える。

(8) その他

今治キャンパスのキャリア支援スタッフは2名を予定しているが、岡山キャンパスのキャリア支援センターのスタッフのほか、近畿（大阪）、中国地区（広島）に設けている「就職連絡事務所」に常駐する職員が企業訪問し、企業開拓や情報の収集を行い学内にフィードバックする。

獣医学部では教育課程の取り組みと、社会的・職業的自立に関する指導・支援を活用し、学生のキャリア形成を支援する。